

廣義門院
伏見行宮
ノ傍ニ精
藍ヲ建立
セラルル
大光明院

止於此矣。嵯峨聖代以後，垂于五百載。曆應年中，今廣義門院長子太上天皇，特爲後醍醐聖廟，草故龜山行宮，鼎新金僊淨刹，屢詔正覺國師爲開山，不數年間，速成焉。實天下偉觀也。此知皇后當初植德于此地，以待今日矣。又文中，廣義門院，宣於伏見行宮傍，建造此精藍，專安修禪徒，而自稱大光明院者，蓋以追慕橋太后遐蹤，兼別世號也。熟推原禪宗流行之因由，特興盛伏見嵯峨之兩地，孰知非兩太后曾乘願力，而前身後身，互相扶豎者乎。不是強差排，倘能察吾法之所以係者，必驗愚之言不誣爾。伏惟光嚴院、光明院、十善宿因、萬乘現果、楚王弓賤、未忘天下、香至珠貴、早辨世明、深信無上覺王、乃有法寶、能濟困窮、終致脫屣國位、同稱釋氏、現世希有、潤飲野處、固表出塵之風、枯淡清寥、以資養道之味。昨是天上棠棣、海內蒼生、無不仰恩光、今爲法中連枝、方外緇流、亦咸挑尊庇、是以天下靡然皆嚮化、如來以佛法付囑、金言終不虛矣。夫如斯之事，釋尊說中，因地雖間見之，震旦扶桑開國以來，正爲人主而如斯者，諸典籍中，所未曾記也。西天唯無畏三藏一人而已。猗嗟火中蓮，可見今日事難逢。兄弟家，伏感荷，所以觀願建寺度僧，又自作高貴者歸道，千歲榜樣之聖恩，內懷慚愧，外肅威儀，念々在般若中者，非啻不負國土恩，亦堪令佛壽命久住於世，如偈所謂：常在此不滅者。

偈

也。佛言，僧有三種：道尊、德備、化被人天者，國師也。禪定攝念、戒行護身者，國僧也。徒爾拱手，放逸過時者，國賊也。兄弟家，切須念之。復說偈曰：當初大聖昇忉利，象駕今朝又入山。阿闍一聲鐘報曉，睡僊驚起紫雲端。

〔智覺普明國師年譜〕

貞治元年壬寅(癸卯)○中秋七月奉太上天皇聖旨，住梵王山

大光明寺，二十二日，承旨恭爲國母光儀門陸座，上皇臨筵而聽。

○廣義門院ノ崩シ給フコト，延文二年閏七月二十二日ノ條ニ，光嚴法

皇，御領伏見ノ地ヲ大光明寺塔頭ニ交付セシメ給フコト，本年四月八

日ノ條ニ見ユ。

〔參考〕

〔本朝歷代法皇外紀〕 曆應皇帝

帝諱豐仁，(光明天德)○中貞治二年七月，(光明天德)○中略，法皇，西芳寺ニ御幸アラセラルル，又勅周

皎潭，(號)碧，開光大光明寺本尊，(略)○下

二十五日，(壬辰)足利基氏，相模大多和村ノ地頭ヲシテ，領家ノ租入ヲ鎌倉法華堂ニ付セシム。

〔相州文書〕

十四 鎌倉郡文書
西御門村法華堂所藏

南朝正平十八年 北朝貞治二年七月二十五日

大光明寺
本尊ヲ開
眼ス

南朝正平十八年 北朝貞治二年七月二十七日

相模國三浦大多和村當年領家分年貢錢事爲右大將家法花堂去年歲末御靈供并今年三五七月分御節供及器料々足所被仰下也任切符之旨可被致沙汰之狀依仰執達如件

貞治二年七月廿五日

(朱書) 上杉憲顯入道桂山道昌
沙彌(花押)

地頭殿

○基氏武藏人見郷等ノ地ヲ鎌倉法華堂ニ寄進スルコト五月十六日ノ條ニ見ユ

二十七日甲午北黨長沼宗秀尾張宗義ニ屬シ陸奥行方野ニ戰フ

〔皆川文書〕野○下

去月廿七日奥州石河庄内行方野合戰之時若黨等或討死或被疵之由尾張式部大夫宗義所注申也神妙彌可抽戰功之狀如件

貞治二年八月廿五日

(義詮)
(花押)

長沼淡路五郎殿

○尊氏關東ニ赴カントシ長沼宗秀ヲ招クコト觀應二年十月二十九日ノ條ニ義詮公武ノ和破レ近江ニ至レルヲ告ゲテ宗秀ヲ招クコト

同三年閏二月二十四日ノ條ニ基氏宗秀ヲシテ宇都宮氏綱ノ上杉憲顯ヲ擊タントスル通路ヲ塞ガシムルコト本年八月二十日ノ條ニ見ユ

二十九日丙申北朝小除日從三位足利義詮ヲ從二位ニ敍ス

〔公卿補任〕三十

權大納言從三位源義詮(足利)三十七月廿九日敍從二位越階

非參議正三位藤爲忠(藤子)三十七月廿九日任參木

〔後愚昧記〕三七月廿九日丙申今夜有小除日聞書後日見之參議藤原爲忠(元待從)從二位源義詮公卿昇進如此自餘略之五位藏人左兵衛權佐藤宗顯(正三位)愚息實冬敍從四位上今度除目不知之間(所九)不申驚也遮而御沙汰畏悅都護申沙汰歟難有云々

是月光明法皇山城西芳寺ニ御幸アラセラル

〔本朝歷代法皇外紀〕曆應皇帝

帝諱豐仁略○中貞治二年七月幸西芳寺拜瞻佛舍利勘計得一万三千餘顆下

丹波守護仁木義尹、同國畑莊ヲ收メントス、三條公忠、幕府ニ請ヒ、之ヲ止ム、

〔後愚昧記〕

三

七月十九日丙戌酉時剋、自畑飛脚到來、經世、經光等進狀當

國守護仁木兵部大輔、稱伊勢仁木跡、爲所望當庄、差上波々伯部僧妙阿、去十

五日上洛了、於武家恐可有支沙汰者、

廿日丁亥、早旦行算向大樹許并七條大夫入道、（所波高經）許事書并舉狀所持向也、

各不被達歸了、○下略、吉田秀仲ノ殺サル、コト

八月十四日、晚頭自畑飛脚到來、當庄半濟、爲守護計、宛行當國住人村上帶刀

不知之間、彼村上入代官於庄家之間、稱不可用之追歸了者、經世、經光等注進

之、

十七日癸丑、及衝黑、自畑飛脚又到來、村上入部必定也、卒大勢可亂妨之由、風

聞之間、可及合戰、京都御沙汰可被忿之由也、經世狀許也、

廿四日庚申、畑庄事、今日奉行人依田左近大夫時朝披露之、可成奉行之由治

定云々、爲悅了、

引付頭人、尾張將監義高、大夫入道孫、當時執事也、

畑莊ノ守護
濟計トシ
テ當國人
ニ村上帶刀
ニ宛行フ

合戰ニ及
パントス

引付頭人

忠光諷誦
ノ草案并
ニ料紙ヲ
三條公忠
ニ請フ忠
成國ハ忠
光ノ妻ノ
父

世系

歌什

北朝正三位樹下成國薨ズ、

卅日丙寅、畑庄事引付奉書、行算持參之、仍下遣丹州了、奉行依田左近大夫許松茸一
合八十本、遣之、又勘解由三位行忠卿、許一合送遣之、各稱爲悅之由、

〔後愚昧記〕

三

八月廿九日乙丑、新藤中納言忠光卿送諷誦草并料紙、薄檀紙作

繪、示可清書之由、仍書遣了、彼卿妻室爲亡父、日吉禰宜祝部也、四十九日佛事也、

光陰未滿、引上而行之云々、

〔系圖纂要〕

九十八 號外十四
祝部 樹下

成久 總官、禰宜、正四上、大藏大輔、飛驒守、

成國 總官、禰宜、正三、文和四年春、成國之家皇居、
康安二年正五再皇居、二十一還幸、

成光 小比叡、禰宜、從四下、
中務宮小大輔、

〔倭歌作者部類〕

散二三位

祝部成國禰宜子、風雅集三 新千載集四 四

〔續倭歌作者部類〕

散二三位

正三 祝部成國 新拾遺集 四首、新後拾遺集 二

○後光嚴天皇、成國ノ第二移御アラセラル、コト、文和四年二月七日

南朝正平十八年 北朝貞治二年七月是月

ノ條ニ、再ビ成國ノ第二移御アラセラル、コト、去年正月四日ノ條ニ見ユ、

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

八月丁酉朔盡

二日戊戌北朝前内大臣三條公秀薨ズ、

〔後愚昧記〕

三

八月三日己亥、雨下、申剋許前中納言爲明卿來臨、於西隣菴

面謁、暫言談之後歸了、○中略彼卿語曰、昨日巳刻、入道内府名公秀公、法綽空薨逝了、自

去月廿八日、如瘡病發動、終以薨去云々、年七十九歲云々、天室之遺老也、可惜

々々、卽以書狀、訪遣兩公實音、了、各有返事、

〔公卿補任〕

四十

權大納言正二位藤實繼一、五十按察使内膳別當、八月二日服暇、父十一月十八

日復任、

從二位藤實音二、四十八月二日服解、父廿一日復任、

〔公卿補任〕

參議正四位下藤公秀

前權中納言從二位實躬卿息、弘安九

正五從五下臨時、正應殿永仁三二九和泉守遊義門院、御分國三月八從五上御即位、御給位、同

三正五正五下、永仁二正六從四下、八月五從四上、同六三廿四右少將、七月十

三日正四下、廿三日新帝昇殿同、讓位八月十春宮昇殿立坊正安三正廿一新帝

昇殿讓位八月廿四日春宮昇殿立坊嘉元々三卅右中將、同三十一十六補藏

瘡ヲ病ム

官歴

南朝正平十八年 北朝貞治二年八月二日

一六〇

人頭、德治二四月三日任參議、以上同三九月廿七日敍從三位、廿四、感前參
等、延慶二三月廿三日兼備前權守、十月十五日任權中納言、同三正月五日敍
正三位、同四四月十五日從二位、以上正和三正月二日敍正二位、幸、朝義門
給御、同四二月廿一日辭退、四月十七日還任、文保二三月十二日禮服宣下、以
上、同三八月轉正、元應三七月廿六日任權大納言、元亨二正月廿六日辭、二
月廿五日本座、以上元弘二十月十五日任陸奧出羽按察使、正慶二五月十
七日詔止使、建武三十一月廿五日任大宰權帥、以上觀應三十一月廿七日
任內大臣、當日不設饗祿并客座、又不同日左右內大臣依官次可列之由宣下、
文和二七月二日出家、六十法名禪定、以上

〔尊卑分脈〕

藤原氏 公季孫

實躬

實數

號八條、參木、中將、按察使、內大臣、大宰師、正二位、文保（和久）

實繼

別當、參木、中務、左衛門督、大宰師、言、按察使、內大臣、從一

實音

一本、作香儀、同三司、從一位、參議、右兵衛督、權大

實言

納言、大宰師、至德三二二、參議、長相卿女、

世系
八條卜號

歌什

女子 從三位、准二宮、光嚴院、（三）秀子、陽祿門院、（崇光）大上皇并後光
女子 殿院二代國母、文和元十廿九院號、同日先准宮母、

融觀 稚野

了空 報恩院

〔倭歌作者部類〕

大臣 入道內大臣、公秀前大納言實躬卿子、新千載集二

〔續倭歌作者部類〕

大臣 八條入道內大臣、新拾遺集四首、內一首入新

續古今集一首

新拾遺之內一首有稱入道前內大臣者、考之、此時代內府入道者藤公秀也、
雖然、同集所載八條入道內大臣亦公秀也、同人異稱不審、然而新千載有入
道內大臣、是為公秀云々、內茲一所載之、

○公秀所領文書ヲ子實繼ニ讓ルコト、文和二年三月五日ノ條ニ見ユ、

〔南狩遺文〕

海部郡由良莊門前村興國寺藏

出雲國楯縫南北庄地頭職、所被寄附雲樹禪林寺也、可被存知給者、天氣如此、
仍執達如件、

南朝正平十八年 北朝貞治二年八月三日

一六一

南朝正平十八年 北朝貞治二年八月三日

正平十八年八月三日

右中辨判

一六二

知訥上人禪室

足利直冬、吉川經秋ヲ招致ス、

〔吉川家文書〕

凶徒對治間事、連署狀披見了、尤以神妙、當方事、既所打立也、急速可馳參之狀如件、

正平十八年八月三日

(花押)

吉河駿河守殿

○直冬、經秋ヲ土佐守護職ニ補スルコト、本年十二月二十九日ノ條ニ、長門岩永郷、同國三原大島及ビ出雲比伊郷等ノ地頭職ヲ、勳功ノ賞トシテ、經秋ニ充行フコト、明年二月一日ノ條ニ見ユ、

幕府、攝津守護使等ノ、同國春日社領垂水、西牧、榎坂、四ヶ郷等ニ、入部濫妨スルヲ停ム、

〔今西文書〕

○乾 攝津

〔附書〕 赤松兵庫助範顯 國主赤松信濃大夫判官舍弟

春日社領攝津國垂水、西牧、榎坂、四ヶ郷神人等申守護使等亂入狼藉事、任院宣、長者宣、并大將家御下知、代々御教書旨、所被停止大小國役守護使入部亂妨狼藉也、然者早任先例、可致其沙汰之狀、下知如件、

貞治二年八月三日

(赤松範顯) 兵庫助(花押)

〔附書〕 赤松兵庫助範顯ハ、攝津ノ國主赤松信濃守範貞ノ次男也、

○幕府、攝津守護赤松光範ヲシテ、春日社領同國榎坂郷ヲ、社家雜掌ニ交付セシムルコト、延文元年八月四日ノ條ニ見ユ、

七日、義詮、石橋和義ノ若狹守護及ビ今富名領主ヲ罷メ、斯波高經ヲ以テ之ニ代フ、

〔若狹國守護職次第〕

一尾張右衛門佐入道(和義)石橋殿、貞治二年八月七日ニ改替之、代官國富、

一尾張修理大夫入道(高經)足利七條殿、貞治二年八月ヨリ力者を杖つぎ下させ

畢、○中 代官完草上總介、又代官安富、

〔若狹國稅所今富名領主代々次第〕

一尾張左衛門佐入道(和義)といしはし申、

南朝正平十八年 北朝貞治二年八月七日

一六三

南朝正平十八年 北朝貞治二年八月十一日

一六四

代官藤澤
次郎加藤

略 ○中 貞治二年八月七日よかゝるあり、

一尾張修理大夫入道々朝七條殿と申、

貞治二年八月よ力者を杖つきよ下され了、代官藤澤次郎、加藤三郎二人
なり、貞治二年八月廿八日よ國へ下向し畢、税所代海還左衛門尉、

○義詮、石橋和義ヲ若狹守護職及ビ税所今富名領主ト爲スコト、康安
元年十月是月ノ條ニ、佐々木高氏等、高經ヲ伐タントストノ風聞アル
コト、本年七月十日ノ條ニ見ユ、

十一日、丁未北朝權中納言柳原忠光ニ帶劔ヲ聽ス、

〔公卿補任〕四十 權中納言從三位藤忠光、三十一八月十一日聽帶劔、

〔柳原家記錄〕七十七 柳原忠光仲光卿記勅裁口宣

貞治二年八月十八日 宣旨

權中納言藤原朝臣忠光

宜聽帶劔、

藏人右少辨藤原仲光奉

口宣一番獻之、早可令下知給之狀如件、

八月十八日

右少辨仲光

進上 坊城中納言殿

○柳原家記錄所載仲光卿記、十八日ニ作ル、今姑ク公卿補任ニ據リテ、
是日ニ揭グ、

十二日、戌申義詮、東寺八幡宮領山城久世上下兩莊地頭職ノ、政所料所タル
ヲ停メ、同寺雜掌ニ安堵セシム、

〔東寺百合文書〕〇山城之二十三

當寺八幡宮領山城國久世上下庄地頭職事、建武寄進以來、社家知行于今無
依違之處、稱有土久世庄内得宗跡爲政所料所、付給人云々、當庄内不可有各
別闕所之間、被止料所之義訖、此上寺家知行如元不可有相違之由、可有御下
知之狀如件、

貞治二年八月十二日

權大納言花押

東寺長者光壽僧正御房

〔東寺百合文書〕〇山城之二十

南朝正平十八年 北朝貞治二年八月十二日

一六五

建武ノ寄
進以來社
家ノ知行
相違ナシ

東寺八幡宮領山城國久世上下庄地頭職事被止政所料所之義訖早小串治郎右衛門尉相共莅彼所如元沙汰付寺家雜掌可執進請取之狀依仰執達如件

貞治二年八月十二日

治部大輔(花押)

市太郎左衛門尉殿

東寺八幡宮領山城國久世上下庄地頭職事被止政所料所之義訖早市太郎左衛門尉相共莅彼所如元沙汰付寺家雜掌可執進請取之狀依仰執達如件

貞治二年八月十二日

治部大輔(花押)

小串治郎右衛門尉殿

○尊氏東寺八幡宮ニ山城久世莊地頭職ヲ寄進スルコト延元元年七月一日ノ條ニ見ユ

義詮尾張鶴栗上下御厨及ビ伊奈波藏人女子跡ヲ石清水八幡宮ニ寄ス

〔石清水文書〕

六 菊大路家文書

寄進 石清水八幡宮

尾張赤池郷半分替進ス

尾張國鶴栗上下御厨并伊奈波藏人女子跡事

右爲同國赤池郷半分替所令寄進之狀如件

貞治二年八月十二日

權大納言源朝臣(花押)

十四日^{庚戌}北朝贈從三位足利貞氏ニ從一位ヲ贈ル

〔師守記〕

四十二 帝國圖書館本

貞治四年五月八日丙寅天晴^{○中}今朝讚岐入

道以後贈官位事被注遣町野遠江前司許以使者中村進取之故也^{○下}

兩條

一淨妙寺殿以後贈官位事

淨妙寺殿^{貞氏○}

貞治二年八月十四日贈從一位^{○中}

大外記師茂

〔親長卿記〕

三

文明四年八月十七日天晴今日有多田廟所^{故正四位下贈源滿仲朝臣}

位宣下^{○中}抑參向廟所勅使事少納言多分例也被仰少納言長直朝臣之處

所勞云々仍中務輔并大內記參向例相尋之處如此

就贈位宣命^{○是利}中務并內記參向例無所見候但貞治二年八月十四日源貞氏

南朝正平十八年 北朝貞治二年八月十四日

一六七

少納言不參ニツキ六位藏人

正平十八年八月十五日

〔源〕
〔公〕
〔文〕
〔力〕
○忠
重

○九條某忠重ニ和泉淡輪莊公文得分ヲ安堵セシムルコト、正平十四年十一月二十七日ノ條ニ見ユ、

十六日、子後醍醐天皇二十五回聖忌、後村上天皇、法華御八講ヲ、攝津莊嚴淨土寺ニ修シ給フ、

〔新葉和歌集〕十九 哀傷歌 正平十八年八月十六日、莊嚴淨土寺にて御八講お

とをこゝたれおる夜、月久をりて侍々れり、よませ給々流、

後村上院御製

秋をへて月やのされき曇へき泪あたるゝいさよひは空

〔續史愚抄〕二十五 後光嚴院中 八月十六日、壬子、略 中 此日奉爲後醍醐院廿五回

聖忌、南主於莊嚴淨土寺被修八講云、結願歟、長者補任、同異本、新葉集、

〔參考〕

〔攝津名所圖會〕住吉郡 朝日山莊嚴淨土寺 神宮寺の東あり、眞言宗、

白河院御宇應徳元年、津守國基の開基なり、略 中 星霜累りて今の形あり

御製

皆既

の淨域となれり、略 下

月食、北朝、權僧正道淵ヲシテ、之ヲ祈禳セシム、

〔東寺長者補任〕四 權僧正道淵 八月十六日、月蝕、御祈勤之、聊出現、

〔本朝統曆〕十 八月十六夜望、寅 月蝕皆既、卯 丑、五

十七日、丑 足利基氏、圓覺寺塔頭正續院領相模厚木郷ノ殺生ヲ禁ズ、

〔相州文書〕二十二 山之内村 圓覺寺所藏

正續院領相模國厚木郷致生禁斷事、近隣輩背先例、於寺領河、致狼藉云々、太不可然、所詮隨注申交名、可處重科之狀如件、

貞治二年八月十七日

〔基氏〕
〔花押〕

○直義、兵士衆庶ノ厚木郷ニ濫妨狼藉スルヲ禁ズルコト、觀應二年十一月二十三日ノ條ニ見ユ、

十八日、甲 義詮、土岐頼康ヲシテ、禁裏御料所尾張得重保ヲ朝用地ト爲サシム、

〔三寶院文書〕三 山城

禁裏料所尾張國得重保事、臨川寺三會院雜掌、捧先日寄進狀、雖申子細、替治

南朝正平十八年 北朝貞治二年八月十七日 十八日

臨川寺三會院雜掌寄進狀ヲ

南朝正平十八年 北朝貞治二年八月十八日

定程、先可爲朝要地也、任申請之旨、不日遵行之、可令全所務之狀如件、

貞治二年八月十八日

(義詮)
花押

土岐大膳太夫入道殿

〔三寶院文書〕

○八山城 第二回探訪

禁裏新所尾張國得重保事、御教書如此、案文遣之、早任被仰下之旨、可沙汰付下地於雜掌狀如件、

貞治二年十一月十七日

(土岐頼康)
花押

八板左衛門尉殿

〔三寶院文書〕

○三山城

尾州得重保事、以御事書兩篇、雖被仰下候、善忠(頼康)可渡進之由申入候、替地出來候間、先可被置料所候、且先季被沙汰、入公用等候歟、御奉行候者、旁可然存候、内々得意、可有申御沙汰候、恐々謹言、

九月三日

義詮(花押)

三寶院殿

相馬胤家、所領ヲ子胤重ニ讓ル、

〔相馬岡田文書〕

○磐城

相馬胤家の重代本領する所い、嫡子五郎胤重にゆつりわさむ所領村々數事、

陸奥國行方郡内岡田村(八尾)、やけうさき村、谷河原上(龍谷)、やいん(院内)の村、(院内)、(院内)とい、かりく(院内)ら一所、(院内)き保内波多谷村、下総國(院内)いつ(院内)のかう、(院内)あしき(院内)、(院内)らむら(院内)れうち、(院内)まふし内、(院内)す(院内)茂れむら(院内)のうち、(院内)いや(院内)きし入道(院内)の田在家、胤家重代本領する所い、かの所を五郎胤重にうつきさうもんともに、ゆつりわさむ也、さあ(院内)い(院内)さんれい(院内)こ(院内)ま(院内)あ(院内)せて知行すへし、仍爲後れきふ(院内)と如件、

貞治貳年八月十八日

平胤家(花押)

ゆつりわさむ五郎胤重に、みちのくに行方郡内いん(院内)かい(院内)のむらの内、上内下内、此田在家、
ま(院内)さ(院内)か(院内)の(院内)ところをゆつりわさす也、御公事(院内)い(院内)さんれい(院内)の(院内)とく(院内)ぎ(院内)るへし、仍ゆつり狀如件、

南朝正平十八年 北朝貞治二年八月十八日

南朝正平十八年 北朝貞治二年八月十八日

貞治貳年八月十八日

平胤家(花押)

一七四

下總南相
馬村
泉村
陸奥岡田

ゆつとわさびちやくし五郎胤重に、(ナカ)まもつきの國、(ナカ)ま見えさうま、いほまの
むら、(上角屋)かまやあと、(金山)かあやま、(舟屋)ふあと、みちれくに、行方郡内、(岡田)たかこのむら、やつ
うさき、(波多谷)舟とい、かりくら一所、(大前原)るうら、かえはるかや、せかきれうれう
ち、(波多谷)まのむら、

右かのところの、重代をんやうするほい、(ナカ)まつきさうもんとともに、胤重
にゆつりわさすところまちなり、もし男子女子にても候へ、いてきさるや
あら候へ、もちいゑるらす、御くうし、さんれいこまゐせて、つとむへく
候、仍ゆつり状如件、

貞治貳年八月十八日

平胤家(花押)

下總陸奥
村

ゆつとわさびちやくし五郎(胤重)下總國さつまれ村内、やまふしれ田、在家
壹きんはす波の(行)い(ら)やきし入道、田、在家壹宇、合貳宇つ、(ナカ)まつきさうもん
ともにゆすりわさす處也、御公事分以下の、先例のとくさるへし、仍ゆつり

状如件、

貞治貳年八月十八日

平胤家(花押)

〔相馬岡田雜文書〕

奥州行方郡内院内村内下之内、孫三郎う息壹石三斗蒔榎渡候畢、仍狀如件、

常陸介胤家(花押)

貞治貳年癸卯九月三日

○胤家陸奥院内村内下之内ヲ孫三郎ノ息ニ打渡スコト、便宜合敘ス、
胤康所領ヲ胤家ニ讓ルコト、元徳三年九月二十六日ノ條ニ見ユ、

〔参考〕

〔相馬岡田系圖〕

胤康 相馬泉五郎、又號岡田、○事蹟略ス、

胤家 字乙鶴、相馬小次郎、岡田新

領泉村、金山、魚梁戸、舟津、以上相馬郡内岡田、八兔、飯土江、狩倉元徳三年九月廿六

日、得父讓狀、院内、波多谷、新田、建武二年十二月廿日、得父讓狀、此外領手賀

藤心、上總國、三直津、久良海、真利谷、常州、伊佐郡西方、

南朝正平十八年 北朝貞治二年八月十八日

一七五

胤重 相馬岡田五郎宮内丞

領泉郷薩摩村内田在増尾村内田在上魚梁戸金山舟戸以上相馬郡岡田八兔
矢河原狩倉院内上鶴谷飯土江狩倉波多谷以上貞治二年八月十八日得

父讓狀

二十日丙辰是ヨリ先足利基氏宇都宮氏綱芳賀高名等ノ上杉憲顯ヲ
擊タントスルヲ聞キ是日鎌倉ヲ發セントス尋テ氏綱等ト武藏岩殿
山及ビ下野夫玉等ニ戰ヒ之ヲ破ル

〔額田小野崎文書〕

依上杉基氏入道參上宇都宮下野守氏綱可及合戰之由有其聞之間既來廿日所發向
也、不廻時尅可馳參之狀如件

貞治二年八月十八日

〔花押〕

小野崎伊勢守殿

〔秋田藩採集文書〕

二十城下諸士文書十

凶徒蜂起之間去廿六日合戰之所討勝候也、不廻時日可馳參之狀如件

貞治二年八月廿九日

〔花押〕

基氏小野
崎伊勢守
ヲ招ク

基氏ノ長沼
勝ヲ告シ
テ那須周
防ヲ守ル
ク招ケ

基氏長沼
宗秀ヲシ
テ宇都宮
氏綱ノ通
路ヲ塞ガ
シム

基氏茂木
彌三郎ヲ
招ク

中村眞行
岩殿山ニ
戰フ

那須周防守殿

〔栃木縣廳採集文書〕

四百七十四號

宇都宮下野守可引籠□□之カ由有其聞早差塞通路□□之カ退治之術之狀如件

貞治二年九月六日

〔花押〕

長沼淡路守殿

〔茂木文書〕

○羽後

凶徒蜂起之間所討散□□之カ不廻時日可馳參□□之カ狀如件

貞治二年九月十日

〔花押〕

茂木彌三郎殿

〔集古文書〕

二十四中村眞行目安類

下野國喜連處士三浦某藏

中村彌次郎眞行申軍忠事

右去八月廿六日武州岩波山御合戰之間令同道中村安藝守馳參、最前屬御
手致戰功候、剩左膝被切之條歷然也、然早賜御證判、爲備向後龜鏡、恐々目安
言上如件

貞治二年十月 日

南朝正平十八年 北朝貞治二年八月二十日

南朝正平十八年 北朝貞治二年八月二十日

一七八

承了(矢野政親)
(花押)

〔畑野靜司氏所藏文書〕斐○甲

□(細野)六郎左衛門入道常全申忠節事

去三月五日、鎌倉令當參之處、同八、御教書、相催一族一揆輩、可馳參

之間、則以飛脚、甲州之一族等相觸畢、御所上州御發向之間、令供奉、同

卅、石殿山屬當御手候之處、寂初御敵、散々合戰之間、常全馳向、御敵數輩

□(筆力)高股被疵畢、然則直御見知、(之)□(上)□(感力)判爲備向後龜鏡、恐々言上仍如

件、

貞治二年十一月 日

承了(矢野政親)
(花押)

〔畑田文書〕武○

著到 常陸國

鎌田遠江守時幹

右去九月五日、馳參足利御陣迄了、鎌倉御入之期、令供奉候訖、然則給御證判、

爲備向後龜鏡、仍著到如件、

貞治二年十月 日

承了(矢野政親)
(花押)

著到 常陸國

鹿島畑田遠江守時幹申軍忠事

右凶徒爲御對治野州御發向之間、屬當御手、寂前馳參、鎌倉御入令供奉、至于

今、所致當參奉公也、仍著到如件、

貞治二年三月 日

承了(矢野政親)
(在判)

〔諸州古文書〕混十五 六

目安

石河遠江入道妙圓并舍弟刑部少輔光親申軍忠事

○(中略)上杉憲顯、三寶寺城ニ戰ヒ、尋テ、越中東城寺城ヲ、將又鎌倉御共仕、抽

忠節者也、然則下給御證判、爲備末代龜鏡、恐々言上目安如件、

貞治三年十一月 日

南朝正平十八年 北朝貞治二年八月二十日

一七九

石河遠江
守入道妙
圓光親
軍忠狀

畑野六郎
左衛門入
道常全
殿山屬當
戰

鎌田時幹
著到狀

基氏ノ鎌
倉入リニ
從

承了(花押)

〔後愚昧記〕

三 九月九日、乙亥、傳聞、此間自關東飛脚到來、兵衛督朝臣、與宇津宮一族等合戰、兩方各十萬餘人討死了、宇津宮引退籠城了云々、

〔正宗諸家系圖〕

○坤 藤原 宇都宮

貞綱

高貞 彈正少弼、五良、兵庫介、

貞治二年八月廿日、基氏宇都宮爲對治御發向、芳賀伊賀守高貞八百餘騎卒、武州若林東馳向、散々合戰、高貞打負引返、略下

〔下野國志〕

古城盛衰 芳賀系圖

高久 左兵衛尉、實宇都宮景綱二男、建武元年甲戌卒、法名智山道惠、號光明院、

高名 從五位下、左兵衛尉、入道禪可、越後守護職、應安五年壬子十一月晦日卒、法名號松林院直山禪可、八十二、

富高

正高 信濃守、貞治二年八月廿六日於武藏野討死、

高貞 從五位下、伊賀守、彈正少弼、兵庫助、初名公貞、宇都宮貞綱長男、歌人、法名、號本性院、徹山道覺、一本作貞高、非也、

高家 駿河守、實高山城主、

兩軍各討死十萬餘人

芳賀正高

〔太平記〕

三十九前

如此近年ハ、西源院本、近來ハニ作ル、敵ニ成タリツル人々ハ、皆降參シテ、貞治改元ノ後ヨリ、洛中西國靜ナリトイヘトモ、東國ニ亦不慮ノ同士家、西源院本、同士ノ軍出來シテ、里民樵蘇ヲ樂マス、其事ノ起リヲ尋レハ、此家、西源院本、此ノ三四年カ先ニ、參考太平記ニ、按尊氏直義構隙、合戰於薩、將軍兄弟ノ御中惡ク成給ヒテ、合戰ニ及シ刻、上杉民部大輔本、參考太平記ニ、天正

基氏上杉 好シテ捨テ 顯ニ越テ後 守護職ヲ 與フ 憲顯ト高 名越後ニ 高名ノ軍 敗ル

ア顯ト 故高倉禪門ノ方ニテ、始ハ上野國板鼻ノ合戰ニ、宇都宮ニ本、宇都宮字ナシ、打負テ、後ニハ薩埵山ノ軍ニ御方ノ負ヲシタリシカ、兎角シテ信濃國へ逃下リ、宮方ニナリテ、猶此所存ヲ遂ハヤト、時ヲ待テソ居タリケル、上杉懸ル不義ヲ致シケレトモ、鎌倉左馬頭基氏、幼少ヨリ上杉ニ抱キソタテラレシ舊好、捨カタク思ハレケレハ、別儀ヲ以テ、先越後國守護職ヲ與ヘテ、上杉ヲソ呼出サレケル、此時芳賀兵衛入道禪可ハ、越後國守護ニテ有ケルカ、降參不忠ニ義ニ作ル、ノ上杉ニ思ヒ替ラレ奉リテ、抽賞恩賞、前田家本、作ノ國ヲ召放サルヘキ様ヤアルトテ、上杉ト芳賀ト、越後國ニテ合戰ニ及ブ事數月、前田家本、ナリ、禪可遂ニ打負シカハ、當國ヲ上杉ニ奪ハル、ノ

南朝正平十八年 北朝貞治二年八月二十日

高名上野
板鼻ニ陣

芳賀高貞
同高家ハ
百餘騎ヲ
率キテ武

基氏ノ陣
白旗一揆

ミナラス、一族若黨其數ヲ知ス落サマニ皆討レニケリ、禪可是ヲ忿テ、哀不
 思議モ有テ、世ノ中亂ヨカシ、上杉ト一合戦シテ此恨ヲ散セント憤ケリ、懸
 ル處ニ、上杉○前田家本、上、已ニ左馬頭ノ執事ニ成テ、鎌倉へ越ルト聞ヘケ
 レハ、禪可道ニ馳向テ戦ハントテ、上野板鼻ニ陣ヲ取テソ待タリケル、然ト
 モ上杉上野國へモ入サル先ニ、左馬頭宣ヒケルハ、何ソ我意ニ任テ、加様ノ
 狼藉ヲ致スヘキ、所存アラハ、遂テ退テニ作ル、訴訟ヲ致スヘキ處ニ、合戦ノ
 企奇怪ノ至ナリ、○前田家本、至、所詮對治ヲ加フヘシトテ、自大勢ヲ率シテ、
 宇都宮へソ寄ラレケル、野○参考太平記ニ、西源院本云、上杉カ勢ハ、イマタ上
 ト云聞アリ、禪可此事ヲ聞テ、○西源院本、此事ナシ、サハラハ鎌倉殿ト先戦ハン
 トテ、我身ハ宇都宮ニ在ナカラ、嫡子伊賀守高貞○参考太平記ニ、櫻雲記亦
 于第三十卷、可并見トアリ、次男駿河守ニ、○参考太平記ニ、天正本云、高家甚
 西源院本、高貞ノ二字ナシ、而第三十四卷、以伊賀守爲高家、
 矛盾ト八百餘騎ヲ差副テ、武藏國へソ遣シケル、此勢坂東路八十里ヲ、○参考
 平記ニ、金勝院本、作八里、非也、此トアリ、○参考、一夜ニ打テ、六月十七日、○参考
 一夜行ニ、日路、天正本、作八里、非也、此トアリ、○参考、
 記、天正本、作二十四日、櫻雲、辰刻ニ、苦林野ニソ著ニケル、小塚ノ上ニ打上テ、
 近○前田家本、已ニ敵ニ作ル、鎌倉殿ノ御陣ヲ見渡セハ、東ニハ白旗一揆ノ勢

平一揆

五千餘騎、甲冑光ヲ輝カシテ、明殘ル夜ノ星ノ如クニ陣ヲ張、西ニハ平一揆
 ノ勢三千餘騎、○参考太平記ニ、三千、戟矛勢冷シテ、陰森タル冬枯ノ林ヲ見
 ルニ異ナラス、中ノ手ハ左馬頭殿ト覺テ、二引兩ノ旗一流、朝日ニ映シテ飛
 揚セル其陰ニ、左輔右弼○前田家本、西源院本、密シク、騎射馳突ノ兵ト
 モ、三千餘騎ニテ控タリ、○参考太平記ニ、三千、上ヨリ見越ハ、數百里
 ニ列リテ、坂東八箇國ノ勢トモ、只今馳參ルト覺テ、雲霞ノ如ク見ヘタリ、鳥
 雲○前田家本、ノ陣堅クシテ、逞卒機銳ナレハ、、○前田家本、逞卒ノ機ヲ變ス
 機横スルトナ、如何ナル孫吳カ術ヲ得タリトモ、千騎ニ足ヌ小勢ニテ、懸合
 スヘシトハ覺ス、○前田家本、此間、已ニ兩陣アリ、、芳賀伊賀守馬ニ打乗テ、母衣
 ヲ引繕テ、○西源院本、綱、申ケルハ、平一揆、白旗一揆ハ、○西源院本、白旗一
 テ通スル仔細アリシカハ、軍ノ勝負ニ附テ、或ハ敵トモナリ、或ハ御方トモ
 成ヘシ、跡ニサカリテ、只今馳參ル勢ハ、縦何百萬騎アリト云トモ、物ノ用ニ
 立ヘカラス、家ノ安否、身ノ浮沈、只一軍○前田家本、唯此一軍ニ作リ、、ノ中ニ
 定ムヘシト、高聲ニ呼ハリテ、前後ニ人ナク、東西ニ敵アリトモ思ハヌ氣色
 ニテ、真前ニコソ進タレ、舍弟駿河守是ヲ見テ、軍門ニ君ノ命ナシ、戰場ニ兄

南朝正平十八年 北朝貞治二年八月二十日

ノ禮ナシ今日ノ軍ノ先懸ハ我ナラテハ覺ヌ者ヲト嗚呼カマシケニ廣言吐テ兄ヨリ先ニツト懸拔テ懸入上ハ相從フ兵トモ八百餘騎誰カハ是ニ劣ルヘキ我先ニ戰ハント○前田家本我先ニ敵ニ逢ハントニ魚鱗ニ成テソ懸リケル左馬頭基氏○西田家本我先ニ敵ニ合トニ作ル參然タル敵ノ勇銳ヲ見ナカラ機ヲ撓シ給ハス相懸リニ馬ヲ靜々ト歩マセ事モナケニ進マレタリ敵聞聲三度作テ些擬議シタル處ニ天モ落地モ裂ルカト覺ル計ニ只一聲聞ヲ作テ左右ニ颯ト分レ芳賀カ八百餘騎ヲ東西ヨリ引包テ弓手ニ相附馬手ニ背ケテ切テ落シ切テ落サレ捲ツマクラレツ半時許戰テ兩陣互ニ地ヲ易南北ニ分レテ其跡ヲ顧レハ原野血ニ染テ草ハサナカラ綠ヲカヘ人馬汗ヲ流シテ堀カ子ノ池モ血トナル○西源院本野草皆血ニ成テ綠ヲ替人馬汗ヲ流シテ堀カ子元ノ陣ニ取上リ芳賀ハ左馬頭ノ始ノ陣ニ打上リテ共ニ其兵ヲ見ルニ討レタル者百餘人創ヲ被ル者數ヲ知スサテモ宗徒ノ者共ノ中ニ誰カ討レタルト尋ル處ニ駿河守殿コソ鎌倉殿ニ切落サレ給フト見ヘツルカ召レテ候シ御馬ノ放レテ候ツル如何様討レサセ給ヒテヤ候ラント申ケレハ○西源院本乘下ソ申ケル離ニ作ルカラ其入ハ無トソ申ケル離ニ作ル兄ノ伊賀守流ル涙ヲ汗ト共ニ推拭

テ云ケルハ只二人影ノ如ク從テ死ナハ共ニト思ヒツル弟ヲ○西源院本目ノ前ニテ討レ其死骸何クニ有トモ見ヘス○前田家本目ノ前ニテ作リ其死骸以下サテアルト云事ヤ有ヘキトテ切散サレタル母衣○前田家作結繼テ鎧ユリ直シ喚テソ懸入ケル鎌倉殿方ニモ軍兵○前田家七十餘人○前田家本院本考太平記ニ十金勝討レタルノミナラス木戸兵庫助○前田家前田家本城戸兵庫助ニ作ル兩方引分ツル時近附敵ニ引組テ落重ル敵ニ討レケレハ是ヲ聞給ヒテ鎌倉殿御眼血ヲトキタル如クニ成テ○西源院敵ニ討レキタト申ケレハ左馬頭眼宣ケルハ此合戰ニ必死ナハ諸トモニ死シ生ハ同ク生ント深ク契リシ事ナレハ命ヲ惜ヘキニ非ストテ○前田家ニ死トハ一所ト深ク契シ事ナレハ彼カ討レ候者可惜命サラノ子ノ如ク叩キナシタル太刀ノ刃本ヲ小刀ニテ削リ直シ打振テ懸足ヲ出シ給ヘハ左右ノ兵トモ三千餘騎大將ノ先ニ馳拔テ一度ニ颯ト懸リ合追廻懸違ヘ喚キ叫テ戰フ聲サシモ廣キ武藏野ニ餘ル計ソ聞ヘケル大將左馬頭餘ニ手繁ク○前田家本一度ニ時ヲ瞳ト作レハサハカリ廣キ武藏野懸立懸立戰ヒケル程ニ乗給ヘル馬ノ三頭平頸○前田家本三太刀斬レテ犬居

南朝正平十八年 北朝貞治二年八月二十日

ニトウト伏タリケル、是ヲ大將ト見知タル敵多カリケレハ、懸寄懸寄兜ヲ
 打落サント、後ヨリ廻ル者モアリ、飛下飛下徒立陸〇西源院本、ニナリ、太刀ヲ
 打背ケテ組討ニセント、左右ヨリ懸ル敵モアリ、サレトモ左馬頭元來力人
 ニ勝レ、心飽クマテ早クシテ、膚撓マス目逃カス、以下西源院本、膚、黃石公カ傳
 ヘシ處、李道翁カ授シ道機ニ膺テ心トセシ太刀キ、ノ手開ニ作、太刀ナレ
 ハ、或ハ兜院本、甲ニ作ル、ノ鉢ヲ真ニ打破リ、引太刀ニ廻ル、院本、右ニ廻ル
 ニ作、敵ヲ切居、或ハ鎧ノ胴院本、臆ニ作ル、中ヲ懸ス、打切テ、餘ル太刀ニテハ、
 左ニ懸ル敵ヲ拂ハル、其及本、其兵及ニ作ル、ニ胸ヲ冷シテ、敵敢テ近ツカス、
 東西開ケ前後晴テ、彌々大將馬ニ放レヌト、見知ラヌ敵モナカリケリ、大高
 左馬助重成〇参考太平記ニ、毛利家本、重成子、有左馬助重成、然而重成系圖不詳、既註
 第九卷官軍攻六波羅段、可并見ト、遙ニ是ヲ見テ、急馳ヨリ弓手ニ下立テ、穴
 夥シノ只今ノ御舉動候ヤ、昔ノ和泉淺井那西源院本、和泉朝比奈ニ作リ、
 モ、是迄ハヨモ候ハシト、觀面ニ譽奉リ、早此馬ニ召レ候ヘト申セハ、左馬頭
 悅テ、馬ノ臀股ニ〇参考太平記ニ、本文誤作、内股、今依異本改之、トアリ、前田
 馬ノ字ナシ、七ユラリト飛乗テ、鞍坪ニ直リ様ニ、平家ノ侍後藤兵衛力平〇参考、金

大高重成
基氏ノ勇
戰ヲ感嘆ス

勝守院本云、名盛永盛衰記、主ノ馬ニ乗テ逃タリシニハ、遙ニ替タル舉動〇前
 院本、振舞ニ作ル、カナ、只今コソ誠ニ大高ノ名ハ相應シタレト、互ニソ譽返
 サレケル、給ヒケレニ作ル、其後左馬助ハ、大高ハニ作ル、其後放レ馬ノ有ケル
 ヲ取テ打乗、所々ニ群立タル御方ノ勢ヲ相招キ、又敵ノ中へ懸入テ、時移ル
 マテソ戰ヒケル、互ニ人馬ヲ休メテ、兩方へ颯ト引分レタレハ、亦鎌倉殿ノ
 御陣ハ、芳賀カ陣ト成、芳賀カ陣ハ、再鎌倉殿ノ御陣ト成、芳賀伊賀守、御方ノ
 勢ヲ見廻シテ、八郎カ見ヘヌハ、討レタルヤラント、親ノ身ナレハ、心許ナケ
 ニ申ケルヲ、馬ノ前ナル中間〇前田家本、中、放レ馬ノ數百疋走散タル中ニ、
 毛色鞍具足ヲ委シク見テ候ヘハ、黑鶉毛ナル馬ニ連翳ノ鞅懸タルハ、慥ニ
 〇西源院本、二、字ナシ、八郎殿召レタリツル御馬ニテ候、早討レサセ給ヒヌトコソ
 覺候ヘト申ケレハ、サテ其馬ニ、馬ト鞍ニニ作ル、其血ヤ附タルト問ニ、イヤ馬
 ノ頭ニ、前田家本、三、頭ニ作ル、矢一筋立テ見ヘ候ヘトモ、鞍ニ血ハ附候ハ
 ストソ答ケル、是ヲ聞テ、西源院本、是、サシモ勇メル伊賀守、涙ヲ一目ニ
 〇前田家本、一、目、浮メテ、サテハ此者幼稚ナレハ、生虜レケリ、軍暫モ隙アラ
 ハ、八郎如何様切レヌト覺ユ、イサヤヤ懸テニ作ル、イサ合一軍セント云ケレ

岡本富高
基氏打
タントス

岩松直國
基氏直國
テヲ著
著交換
用スシ

直國ノ郎
黨金井新
左衛門直
國富代直
共ニ討死
ス

芳賀八郎
生虜レ
後ニ歸サ
ル

南朝正平十八年 北朝貞治二年八月二十日

一八八

ハ、岡本信濃守富高聞モ敢ス、莞爾トウチ笑テ、仔細候ハシ、
シ、敵ノ大將ヲノ大將ヲニ作ル、見知ヌ程コソ、葉武者ニ逢テ、組テ家○前田
字ナシ、勝負ハセシト、軍ハシニクカリシ、今ハ見知タリ、○前田家本、今ハ已
見知タリ、西源院本、今ハ先ニ白絲ノ鎧著テ下立タリツル若武者ハ、慥ニ鎌
倉殿ト見澄シタリ、鎧ノ毛ヲシルシニシテ、組討撰○前田家本、ニ討奉ランス
ル事、何ヨリモ安カルヘシトテ、敵ニ心安ククノ前田家本、心安紛レント、源○西
本、テ敵ニ組ヲ押直シ、紛、笠驗ヲ取テ投捨時衆○前田家本、ニ最後ノ十念ヲ
受テ、本云、仰考太刀ヲ押直シ、北條家、西源院、南都、天正、思ヒ切タル機ヲソ顯
シケル、左馬頭ノ御方ニ院○前田家本、左馬頭ノ御方ニハ、愛ニ作リ、西源院
治部大輔ハ、野參考太郎政經子也、按、名直國、ヨク慮有テ、軍ノ變ヲ籌ル人ナリケ
レハ、大將左馬頭殿ノ鎧ノ毛ヲ、敵何様見知ヌラント推量シテ、御大事ニ替
ラント思ハレケレハ、我今マテ著給ヘル紺絲ノ鎧ニ、鎌倉殿ノ白絲ノ鎧ヲ
鎧○前田家本、御俄ニ著セ替奉リテソ控ヘタル、著替奉ルニ作リ、西源院本、俄
タニ著替テソ引ヘ、暫有テ兩陣又亂合テ、入替入替戦ヒケル、岡本信濃守、白絲
ノ鎧著タル岩松ヲ、左馬頭殿ソト目ニ懸テ、○前田家本、大將組テ討ント相

近附岩松ハ亦元來左馬頭大將○前田家本ノ命ニ代ラント、鎧ヲ著替シ上ハナ
シカハ命ヲ惜ムヘキ、二人共ニ靜々ト々ト前田家本、閑馬ヲ歩マセ寄テ、アハ
ヒ○前田家本、アハ已ニ草鹿ノアヅチ長ニ西源院本、埒タケニ作リ、成ケ
ル時、岩松カ郎等院○前田家本、岩松カ郎等ノ五字ナシ、金井新左衛門、岩松○西源院
ニ部大輔カ馬ノ前ニ馳塞テ、岡本信濃守ニ作ル、岡本ト引組馬ヨリドウト落ケ
ルカ、互ニ中ニテ刺違ヘテ、共ニ命ヲ止テケリ、岩松ハ左馬頭ノ命ニ代ラン
ト命ニ替ラント鎌倉殿ノ御鎧ヲ著カヘ、金井ハ岩松カ命ニ代リテ、○前田家
ニ作ルケテ討死ス、落○西源院本、主從共ニ義ヲ守テ、節ヲ重スル忠貞有カタカ
ルヘキ人々ナリ、○前田家本、有難カ、其外命ヲ輕シ義ヲ重シテ、○前田家本、
儀ヲ輕シ、名ヲ金石ニ類スル兵共ニ作ル、愛ニテ勝負ヲ決セント、相互ニソ
ニ比シ、以下西源院本、八字ナシ、サテ芳賀八郎ハ、生虜レタリケレトモ、幼稚ノ
上垂髮ナリケレハ、軍散シテ後二人ヲ附テ歸サレケルトカヤ、優ニヤサシ
トソ申ケル、家○北條家、南都、天正、芳賀八郎所擒以下、金勝院、西源院本、不出、毛利
小冠者カケラカ、餘ニ打笑ヒ、我等カシカハ、助マテ召二人ノ主ヲ持タル事候ハ、此
ハ、如何ナル鎌倉殿ニ相違シテ、兎角云ニ及ハスト召仕ハレケルマシケレトモ、此
ハ、左馬頭殿モ案ニ相違シテ、兎角云ニ及ハスト召仕ハレケルマシケレトモ、此

南朝正平十八年 北朝貞治二年八月二十日

一八九

ヒニケリ、サレハ君無諫臣、則君失其國矣。父無諫子、則父亡其家矣。ト云リ、禪可縱老僻ミテ、懸ル悪行ヲ企ツトモ、子トモ若義ヲ知テ制シ止ル事アラハ、豈許多○前田家、西源院本、若干ニ作ル一族共ヲ討セテ、諸人ニ嘲哂セラレンヤ、思慮ナキ禪可カ合戰故ニ、鎌倉殿ノ威勢彌重ク成シカハ、大名一揆ノ噉議共、是ヨリ些○前田家本、則ニ作リ、止ニケリ、西源院本、定トニ作ル、

〔喜連川判鑑〕關東從三位左兵衛督基氏（花押）

宇都宮彌三郎基氏ノ陣ニ行キテ罪ヲ謝ス

卯、貞治二、八月、芳賀禪可退治ノ爲御進發、武州若林野ニ御陣、合戰、芳賀伊賀守敗北シテ、宇都宮へ歸ル、基氏直ニ宇都宮（兵衛）ニ退治有ベシトテ、小山ガ館ニ御陣、宇都宮彌三郎急ギ御陣ニ參テ、罪ヲ謝シ、禪可逐電ノ由言上、上杉憲顯モ越後ヨリ御陣へ參ル、翌日鎌倉へ御歸陣、

〔鎌倉大日記〕八月廿日、鎌倉御立、同廿六日、武州岩殿山、芳賀高貞以下宇都宮家來者蜂起、依之、入間川殿御向、御敵令沒落、其儘逐敵跡、野州夫玉宿御陣、

上杉憲顯越後ヨリ來會ス

上杉桂山禪門自越後御陣參向、

〔櫻雲記〕中同廿六日、基氏兵ヲ發シ、武州岩殿山ニテ、芳賀伊賀守高貞入道禪可ト合戰、高貞其弟駿河守敗軍、基氏はヲ追フ、野州夫玉ノ宿ニ至ル、宇

宇都宮氏綱和ヲ請フ

（兵衛）都宮頻ニ和ヲ請、於是基氏歸ル、

○芳賀高貞、畠山國清ニ從ヒテ上洛スルコト、延文四年十一月六日ノ條ニ、上杉憲顯、三寶寺城ニ戰ヒ、尋デ、越中東城寺城ヲ圍ムコト、同年是歲ノ條ニ、石河妙圓、同光親等ヲ率井テ、越中赤田城ヲ攻ムルコト、同五年是歲ノ條ニ、基氏、憲顯ヲ越後ニ徵シテ、鎌倉管領ト爲シ、尋デ、憲顯越後ヲ發シテ、鎌倉ニ赴クコト、本年三月二十四日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

〔宇都宮興廢記〕抑芳賀家ノ元祖ト申ハ、人皇四十代天武天皇ノ皇孫、一品

舍人親王九代孫、瀧口藏人吉澄ノ男高重、人皇六十五代花山法皇ノ勅勅ヲ蒙リ、下野國ニ配流セラレ、芳賀郡ニ住シ、十世次郎太夫清原高親カ時ニ至テ、宇都宮宗綱カ幕下ニ隨ヒ、十八世左兵衛入道禪可カ時ハ、宇都宮氏綱ノ後見トシテ、越後ノ守護職ヲ兼任シ、威勢ヲ近國ニ振ヒシカ、鎌倉ノ左兵衛督基氏朝臣ニ敵對シテ改易セラレ、五世ヲ經テ、左兵衛尉成高カ嫡子太郎丸、宇都宮明綱ノ跡ヲ嗣テ、宇都宮ニ移リ、下野守正綱ト號ス、其舍弟次郎三郎高益、伊賀守ト號シテ、芳賀家ヲ相續シ、真岡ノ城主トナリシヨリ此カタ、

高貞宇都宮氏綱ノ後見トシテ守護職ヲ兼任ス

南朝正平十八年 北朝貞治二年八月二十日

一九四

鑿田經助
ノ奮戰

基氏弘賢
ヲ岩殿山
留守ノ賞
留シテ伊
豆走湯山
別當職ニ
補ス

宇都宮芳賀同根ノ因アリテ、兩家共ニ繁榮シ、京都將軍家ノ御内書ヲモ拜受シ、關東ニ於テ、歷代規模有家筋ナリ、當時五万石餘ノ分限ナリ、

〔新編武藏風土記稿〕

六十三 比企郡 壘蹟 鎌倉基氏ノ陣壘ト云、櫻

州岩殿山ニテ、芳賀伊賀守高貞入道禪可ト合戰アリシ由ヲ載ス、此頃ノ壘蹟ナルヘシ、又、築田家譜ニ、公方基氏、比企郡ノ内岩戸山一戰ニ利ヲ失ハレ

〔附錄〕

〔三寶院文書〕

○山城 第二回探訪

讓渡

伊豆國走湯山別當職事

右職者、去貞治年中、爲岩殿山御留守賞而、瑞泉寺殿御代拜補訖、

應永九年壬午二月五日

前大僧正弘賢 在判

伊豆國走湯山密嚴院僧都尊運雜掌榮快謹支言、欲早被退水本僧正隆源非據競望、任安堵御下文以下代々手繼相承旨、預御裁許、全知行當院家職事、中略

護持ノ勤
勞

右職者、去貞治年中、故西南院大僧正弘賢依護持勤勞被拜補之了、中略

應永廿四年九月 日

懷良親王、筑前天滿宮安樂寺留守職及ビ祭禮ノ事ヲ沙汰セラル、

〔大鳥居文書〕

○筑前

天滿宮安樂寺留守職事、依確論被置中途畢、既出御之間、諸事所被閣也、還御之時、可被仰出、次樂得別府事同前、次下牟田事同可被遵行也、於祭禮者、明日可被遂行之狀、依仰執達如件、

正平十八年八月廿日

右中將 印

大鳥居法印御房

二十一日、北朝、最勝講ヲ土御門殿ニ修ス、

〔後愚昧記〕

三 八月廿一日、丁巳、寂勝講初日也、行香作法、解劔笏儀、忠光卿尋之、委示遣了、

廿五日、辛酉、寂勝講結願也、

〔柳原家記錄〕

六十六 異本長者補任

長者僧正光濟 自八月廿一日、於禁裏寂勝

講始行、證義僧正二人、慈能、

南朝正平十八年 北朝貞治二年八月二十一日

一九五

證義顯遍
下慈能

結願

行香作法
劔笏ヲ解
儀

〔東寺執行日記〕 一

八月廿一日、天晴禁裏寂勝講始行、證義者與福寺顯遍

僧正、山門慈能僧正云々、大乘院御方始被參聽衆云々、名字可尋之、

同日、自大理四條中納言隆家被仰云、來廿五日、寂勝講結願可搆參之由被仰出、官人

章頼可召具之、就其者、當寺寄檢非違使俸祿千疋分、（目力）近明可沙汰之、若令難澁

者、速可經奏聞、若經奏聞者、定就下地可有沙汰歟云々、

廿三日、天晴彼料足千疋沙汰渡章頼方訖、昨日參彼亭、雖歎申、不事行也、

〔大乘院日記目錄〕 一

八月廿一日、禁裏寂勝講、證義顯遍、慈能僧正、

二十四日、庚申幕府、細川頼之ヲシテ、二加四郎左衛門尉等ノ、祇園社領備

後小童保ヲ、近藤國頼ノ、同社領讚岐西大野郷ヲ押領スルヲ停メ、下地

ヲ社家雜掌ニ交付セシム、

〔祇園社記〕

御神領部十

貼紙ニ云、第三度御教書、奉行齋藤入、

祇園社前執行法印顯詮申備後國小童保事訴狀副具如此、二加四郎左衛門

尉并廣澤中務丞押領云々、早退彼輩之妨、沙汰付下地於社家雜掌、可被執進

請取狀、更不可有緩怠也、依仰執達如件、

貞治二年八月廿四日

（斯波義高力）左近將監 判

細川右馬頭殿

〔祇園社記〕

御神領部十五

紙端陰面ニ云、御教書、讚岐國西大野郷、

祇園社前執行法印顯詮申讚岐國西大野郷事、訴狀副具如此、近藤六郎五郎

國頼令押領云々、早退彼妨、沙汰付下地於社家雜掌、可被執進請取狀、更不可

有緩怠之狀、依仰執達如件、

貞治二年八月廿四日

左近將監 判

細川右馬頭殿

〔祇園社記續錄〕 十

目安

祇園社御師法印顯詮雜掌成祐申讚岐國西大野郷事

右當郷者、長日大般若仁王講三所本地供等料所當知行之條、度々綸旨、御教

書、御内書等炳焉也、案文進覽之、而當國住人近藤六郎五郎國頼、自去年押領

間、及御祈禱違亂也、所詮早被成嚴密御書被打渡下地雜掌、全知行、彌爲抽護

雜掌成祐
長日大般若
若仁王講
三所本地
供等ノ料

持忠言上如件

貞治二年八月 日

二十五日、辛酉義詮、大山崎神人等ノ訴ニ依リ、赤松光範ヲシテ、攝津河上新關ヲ撤セシム、

〔離宮八幡宮文書〕○山城

〔御教書案〕

大山崎神人等申於河上新關成在胡麻運送〔光範ノ裏花押アリ〕煩由事、如注進者、吹田彦五郎入道號在京、不應守護使云々、好而招罪科歟、早莅彼在所、不日停止之、可全神物、若尙不承引者、任法令徹却於〔徹下同シ〕狼藉之篇者、可注進子細之狀如件、

貞治二年八月廿五日

〔義詮〕御判

赤松信濃〔光範〕大夫判官殿

守護施行
狀

大山崎神人等申於河上新關成在胡麻運送煩由事、今月廿五日重御教書如此案文遣之、早任被仰下之旨、遣使者嚴密令徹却彼在所、全神物、且可被注進狼籍之子細之狀如件、

貞治二年八月廿七日

〔赤松光範〕左衛門尉(花押)

赤松兵庫助殿

○楠木正儀、勅ヲ奉ジ、諸關ヲシテ、石清水八幡宮内殿燈油料ノ在胡麻ヲ勘過セシムルコト、正平六年十二月二十四日ノ條ニ見ユ、

二十七日、癸亥義詮、上杉朝房ヲシテ、武藏金陸寺寺領信濃西馬越郷ノ地ヲ、同寺家ニ交付セシム、

〔相州文書〕

〔二十三〕山之内村〔鎌倉郡文書〕圓覺寺所藏

金陸寺雜掌申信濃國浦野庄内西馬越郷〔薩摩九郎〕事、任今年八月廿七日京都御書之旨、莅彼所、沙汰付下地於寺家、可執進請取之狀如件、

貞治二年十月七日

〔上杉朝房〕沙彌(花押)

十倉左衛門尉殿

○尊氏、信濃浦野莊西馬越郷ノ地ヲ、金陸寺ニ寄進スルコト、貞和三年正月十一日ノ條ニ見ユ、

二十八日、甲子義詮、故足利貞氏ノ三十三回忌佛事ヲ修ス、

〔後愚昧記〕

〔三〕八月廿八日、甲子、自今日武家修佛事、是故贈〔貞氏〕三品〔大樹〕父卅三

薩摩九郎
ノ跡

法華八講

結願

回、相當來月五日之故也、

九月一日、丁卯、霧、天氣如春、自今日武家八講云々、僧名追可尋注之、

五日、辛未、武家八講結願也、

〔續史愚抄〕

後光嚴院中

九月一日、丁卯、自今日武家爲贈一位 貞氏、卅三回、

行八講、五日忌日爲結願、後愚昧記、長曆、

○北朝、貞氏ニ、從一位ヲ贈ルコト、本月十四日ノ條ニ見ユ、

二十九日、乙是ヨリ先、義詮、石清水八幡宮神輿ノコトニ因リテ、祇園社目代ヲ越中ニ配流ス、是日、義詮ノ命ニ依リ、石清水八幡宮神輿歸座ス、

〔離宮八幡宮文書〕

〇山城

石清水八幡宮神輿事、祇園社當年馬上役差苻目代、依追捕狼藉之罪科、所流刑于越中國也、早令下知此趣於神人等、不日可奉勸御歸座之狀如件、

貞治二年八月廿二日

(義詮)

當社檢校法印御房

〔後愚昧記〕

三

八月廿九日、乙丑、今日八幡神輿此間坐歸座也、供奉人可尋注之、

祇園社目代馬狼藉ス

神輿東寺ニ御坐

神輿歸座大路掃除及浮橋ノ河沙汰

神輿東寺金堂ヲ出久我通相田中法印神官以下數百人供奉代ノ見死人アリ

大湯屋門扉ヲ以テス

〔東寺執行日記〕

一

八月七日、來十一日石清水神輿可有御歸座、大路掃除、朱雀河浮橋可有其沙汰之由、齋藤五郎左衛門尉爲奉行、以雜色等五人、相觸訖、浮橋事、勸進方直可被仰之由返答、次掃除事、承訖、此由返答了、即掃除事、相觸之處、如公人等申旨、自九條口、至朱雀巷所、勸進方管領也、然者可被仰彼方之由申之、仍仰送勸進方訖、次浮橋事、自武家被仰之由、可有御存知之旨、先内々仰遣勸進方了、

廿九日、天晴、丑日、石清水神輿酉刻御歸座、先奉出金堂禮堂、禮人奏樂、自南大門還御、久我左大將備前守供奉、社務田中法印、神官已下數百人供奉、希代見物也、爰有一珍事、自侍所置警固於大門、彼警固中雜色已下下部見物者一人、致害之、依爲屬穢、還御可及豫儀歟之由、相存之處、不及沙汰、無爲無事還御也、

九月一日、天晴、略中、次朱雀河浮橋事、自武家、奉行齋藤五郎左衛門尉重嚴密被責伏之處、無力領狀、爲勸進方沙汰、以大湯屋門扉等、暫時渡橋訖、人夫ハ散所法師原、并寺内歎冬田在家人責出之了、〇東寺長者補任、異事ナシ、

〔武家年代記〕

下

貞治二年八月廿九、神輿歸座、久我右府供奉、

〔大乘院日記目錄〕

一

六月日、男山神輿入洛、八月廿九日歸座、〇皇年代略記、和漢

南朝正平十八年 北朝貞治二年八月二十九日

二〇二

代合符、如是院年
記異事ナシ、

○石清水八幡宮神人等、祇園社馬上役ノコトニ依リ、神輿ヲ奉ジテ入
洛スルコト、六月十七日ノ條ニ見ユ、

九月 大丁卯朔

二日、辰北朝、丹後國ニ令シ、山城天龍寺雲居庵領同國宇河莊半分地頭職
及ビ餘戶里ノ課役ヲ免除セシム、

〔鹿王院文書〕四○山城

左辨官 下丹後國、

應任本寺例、免除伊勢太神宮役夫工米、御禊、大嘗會以下勅役、院役、并都鄙
寺社所役、及國中段米、關米、恒例臨時大小公役等、永爲天龍資聖禪寺雲居
庵領、當國宇河莊半分地頭職并余戶里事、

右得彼庵雜掌去七月日奏狀、備當寺草創之由來、叡願嚴重之旨趣、不及費私
言、且奉祈帝道之洪基、且奉資先院之證果、仍清衆之勤行、不退轉者也、爰再興
之時分、造營之寂中、嗽義（音）之輩、稱未蒙勅免、致無理之譴責之間、非分之對論、非
無其煩、所詮、任本寺之例、被下課役、勅免之官、苻宣、彌仰天恩、有道奉祝、聖祚安
全者、權中納言藤原朝臣忠光宣、奉勅、依請者、國宜承知、依宣行之、

貞治二年九月二日

大史小槻宿禰（音）花押

權右中辨藤原朝臣（音）花押

南朝正平十八年 北朝貞治二年九月二日

二〇三

大神宮役
夫工米、御
禊、大嘗會
以下勅役
等

〔石清水文書〕

六 菊大路家文書

尙清法印遺跡事去六日繪旨一見訖不可有相違之狀如件

貞治二年九月十五日

(花押)

山井別當法印御房

○義詮、昇清ノ忠功ヲ賞シ、父尙清ノ遺跡ノコトヲ舉奏スルコト、觀應三年四月二十五日ノ條ニ見ユ、

九日、北朝僧事、

〔東寺執行日記〕

一 九月九日、僧事被行之、前寺務醍醐妙法院僧正轉大、五

壇法降三世法賞云々、又石山成就院法印杲守并昇進矣、

○定憲、五壇法ヲ土御門殿ニ修スルコト、五月十三日ノ條ニ見ユ、

懷良親王、五條賴元ノ子孫ヲシテ、筑前三奈木莊及ビ日向飢肥南北兩郷地頭職ヲ相傳セシメ給フ、

〔五條文書〕

一 筑後

筑前國三奈木庄、除弘安賞當并日向國飢肥南北兩郷地頭職事、可令子孫相傳給者、將軍宮御氣色如此、仍執達如件、

正平十八年九月九日

右中將

謹上 勘解由次官殿

〔五條文書〕

五條氏清原系圖

賴元

良氏

良遠

五條筑後守實賴元三男、勘解由次官、主水、左馬頭、正平十八年五月三日宣旨、別在叙正五位下、任兵部少輔、同年九月九日令旨、賜筑前三奈木庄、日向飢肥南北兩郷地頭職、從此住矢部高屋城、法名玉峯宗全

懷良親王、宇治惟澄ノ豊後入田小川ノ戦功ヲ褒シ給フ、

〔征西大將軍宮譜〕

九

豊後入田小川退治事、所々城追落之次第、高名之至、殊所感恩食也、彌可被抽忠節候也、令旨如此、悉之以狀、

正平十八年九月九日

大藏卿 判

阿蘇大宮司館

入田小川、豊後の何郡あるやいよ考へ、此、前氏經より惟むらへの狀、入田に歸り、(シカ)は、入田小川の者共、其頃、宮方(シカ)して、阿蘇乃所領、あとの

南朝正平十八年 北朝貞治二年九月九日

二〇七

矢部高屋城ニ住ス

令旨

定憲ヲ大僧正ニ任ズ 五壇法降三世法ノ賞 杲守昇進ス

ありてありしを、惟村引るゝ將軍方に誘入をさるるへし、それ故惟澄とつゝら發向して、所々城とも追落しふりと見えふり、惟村が所々構要害といへるも、入田小川のあふりに城郭を構へさるるへし、大藏卿の次の

○九年十月の令旨乃上包こ、資世とあれとも、世系はさるるあらは、
○斯波氏經、宇治惟村ノ戰功ヲ褒スルコト、閏正月四日ノ條ニ、北黨大内弘世、南軍ト豊前柳城ニ戰フコト、十二月十三日ノ條ニ見ユ、左ノ感狀、署名ヲ詳ニセズト雖モ、便宜附收ス、

〔萩藩閱録〕

百六十四 正田惣左衛門

於野間、以鈴ヶ原繩手菊池一戰之砌、當家爲忠義、多勢引率出張、十死一生相働、遂粉骨旨、神妙如件、

貞治貳年九月十一日

判

正田兵四郎殿

十日、^丙是ヨリ先、足利直冬、備後ヲ逃走シ、山名時氏、幕府ニ降ル、是日、義詮、之ヲ小早川春平ニ告グ、

〔小早川什書〕

直冬没落備後國子細注進狀披見訖、山名左京大夫時氏參御方之上者、其堺定可屬無爲歟、可存知之狀如件、

貞治二年九月十日

(花押)

小早河美作守殿

〔太平記〕

三十九 山名時氏降參武家事

山名左京大夫時氏子息右衛門佐師氏、近年御敵ニ成テ、南方ト引合テ、兩度マテ都ヲ傾ケシカハ、將軍ノ御爲ニハ上ナキ御敵ナリシカトモ、内々縁ニ屬シテ、兩度ノ不義、全ク將軍ノ御世ヲ危メ奉ラントニハ非ス、只道譽カ餘ニ本意ナカリシ舉動ヲ、^{○前田家本、只道譽餘ニ本意無リシ}舞無本意程、思ヒ知セン爲計ニテ候キ、其罪科ノ御宥免、^{○西源院本、御宥免}此間領知ノ國々ヲタニモ、^{○前田家本、此ノ間}恩補セラレ候ハ、御方ニ參テ忠ヲ致スヘキ由ヲソ申タリケルケニモ、此人御方ニ成ナラハ、國々ノ宮方力ヲ落ス、^{○西源院本、ノミナラス、西國モ又}院本亦ニ作ル、無爲ナルヘシトテ、近年押ヘテ領知、^{○前田家本、セラレツル}因幡伯耆ノ、^{○利家本、但馬}トア、外丹波、^{○南都本、作雲トアリ}丹後美作五箇國守護職ヲ充行ハレケ

時氏ノ南
朝ニ降リ
タルハ道
譽ノ舉動
ヲ嫌忌シ
ルニ因

五ヶ國守
護職

野間ニ於
ケル鈴ヶ
原繩手菊
池ノ合戰

南朝正平十八年 北朝貞治二年九月十一日

日本長門州鳳凰山安國東隆寺開山南嶺和尚道行碑

浙江杭州府僧綱司都綱天竺靈山住持比丘雲屋妙術譯印

浙江杭州前衛昭信校尉管軍百戶葵原吳東升書并篆額印

元ニ遊バ
志ヲ遂ゲ
懷敬ニ受
業ス
德儉ニ參
厚東武實
ルニ請セラ
東海元ニ
入リ子越
ニ代リテ
江ノ西ノ
庵主及ビ
明本ニ謁

日本居大海東、俗習多取法於中國、其崇敬佛教尤爲隆篤、故其剎寺置額、亦以五山十刹、而甲乙之禪林儀軌、竝依百丈清規、若鳳山南嶺禪師一門、數世雄據、大方化聲交振、而四海雷奔盛矣哉、其法孫元久、航海來朝覲、謂曰、吾祖曾欲遊中國、而不遂志、戰化、已來幾百年、未記道行、若待今日、願丐文、刻于碑、予讀其狀、曰、師諱子越、號南嶺、洛陽茂族、藤氏子、髫鬢穎異、不群、初從懷敬和尚受業、竺墳魯誥、通柝大義、尋拜佛燈國師、燈舉第一義、而勘之、隨問隨答、當仁不讓、既而司侍職於東山、首衆於巨福、三浦介延請問法、一日謂介曰、吾有南遊志、豈匏繫此哉、促裝行、介留不止、偕弟日東海、振策西邁、道經長州、太守厚東崇西、夢肉身大士入境、黎明躬往視、與夢符契、即迎館於上舍、將別西公曰、吾立梵刹、奉師使封內人民、均沾法雨、師不得已、應其請、而東海入中國、代贊書寄江西信庵主、天目本禪師、二師展視曰、扶桑有斯人乎、東海回各附僧伽黎、以表信、其衣現在、太守姓物部氏、守屋大臣、胄胤、崇敬佛乘、有給孤長者之風、將闢寺基之夕、復夢鳳凰

鳳凰山東
隆寺ヲ開
ク
元曉元光
テ助化ス

攝津福嚴
寺ニ住ス

福嚴寺諸
山ノ位ニ
列セラレ
安國禪寺
ハノ額ヲ
壽藏ノ塔
ヲ作リ續
フ燈庵ト
云

遺偈

徒弟元初
塔ヲ建福
寺ニ聖福
シテ八歳
立ツ

遷巢於某山、往觀峯環水繞、松檜森聳、乃鳩工購材、始作淨名室、次蓋居佛殿、名其山曰鳳凰、寺曰東隆、應夢也、然後門廊庖福庫廩靡不畢具、并輸稅以充衆食、從是向師風者、川奔雲湧、曉月窓、光寂室、遠來助化、緇素問道者無虛日、故天龍國師遇關西僧必問曰、曾禮長門長老否、若豪家富族、捨第建寺、延師開山、今爲附庸者二十餘院也、攝州福嚴國師道場、與議請師繼踵、期滿還山、諸方大刹、迎迓不起矣、故建仁嵩中山寄偈曰、三十餘年方得信、審知五十五春秋、開于光室遲君久、須急來扶老比丘、觀應二年、詔位列諸山、賜安國禪寺額、割山井一鄉、永充常住莊園、師又擇寺正北爽塏地、作壽藏之塔、扁續燈庵、師退居、一夕將三鼓、忽有女子、乞受歸戒、爲授畢、侍者覘之、沒入前溪大地、先是火于浴室、鐘鼓齊鳴、道俗來採、師宴座自若、月窓來叫曰、火及方丈、胡不出去、師執其手、笑曰、老僧江湖興發、紫陽聖福、缺主席、詔師、師辭老、勅太守固逼起之、延文四年八月入寺、鯨音再震、鼙鼓重喧、衆歎希有、謝事回舊隱、影不出山矣、貞治二年九月十一日、聚徒遺誡、書偈云、七十九年、心月孤圓、來時無口、一句了然、擲筆而化、壽若干、臘若干、塔曰常照、其徒弟元初就聖福建塔、亦曰續燈、出世弟子曰潮、曰信、曰烟、曰幢、曰禮、曰伊、餘目視雲霄者尙多矣、師十八時佛前立誓、過午不食、脇不沾席、三

南朝正平十八年 北朝貞治二年九月十一日

門人三會
ノ語録ヲ
編ス
遺像二幅
ヲ寫ス

南朝正平十八年 北朝貞治二年九月十一日

二二四

會語錄門人纂集之、大相公謂禮履仲曰、不幸失瞻汝師、願拜遺像、遣使之安國迎取、至則齋沐焚香設拜、召畫工圖寫二像、命僧錄大岳師述讚、一留第供養、一賜履仲以爲法門之榮、寺經回祿、續燈歸然獨存、若有神護師之、四十餘年紹隆祖道、荐膺殊擢、據大道場、聲實昭灼、龍象奔趨、而化緣有限、良可喟也、然其去住自由、光明烜赫、道俗具瞻、斯足矣、彰其法身之常住、而表其功行之純懿、垂休千古、厥有斯在、語言文字、何足以輕重哉、然而先世行業、子孫顯揚禮也、遂不辭而述以辭曰、

- 扶桑之域居大海東、習俗取法、與中華同、一
- 崇敬佛僧、尤爲隆盛、金利巍峩、寶輪暉映、二
- 禪林規矩、百丈是宗、五山十刹、丕振玄風、三
- 篤生碩師、號曰南嶺、魯誥竺墳、窮探要領、四
- 勝幢屢建、宗旨弘敷、化風遐暢、師道蔚昌、五
- 主鳳凰山、應檀那夢、緇白象龍、川奔雲湧、六
- 門徒弟子、得法尤多、附庸諸刹、棋布星羅、七
- 化權輝赫、時緣際會、一皆南嶺、如幻三昧、八

塔ヲ常照
庵ヲ續燈
トイフ

塔曰常照、庵曰續燈、永鎮海邦、金剛眼睛、九
我辭非實、惟默斯契、一月千江、太虛無際、十

大明景泰五年歲在甲戌夏四月朔旦

〔延寶傳燈錄〕

十六
臨濟宗

南禪約翁德儉國師法嗣

筑前州聖福南嶺子越禪師、久侍約翁、一日請開示、翁曰、吾無與備法、去訪諸方、卻回嗣翁、開法筑之聖福、師行業精緊、風規孤硬、防州檀越創永興寺、請爲開山祖、大播玄化、

〔禪刹住持籍〕

筑前扶桑最初禪窟安國
山聖福禪寺歷代住持

廿八世南嶺子越一本說佛心
惠灯禪師

〔颯雲捉風〕

大内家文學考士代

南嶺子越

南嶺子越、南禪佛燈國師約翁の弟子なり、元よ入らんと欲して、徒弟日東海を偕ひて西下せ、道長門を過ぐ、厚東武實入道崇西よあふ、崇西抑留して、爲めよ厚東郡棚井村よ鳳凰山東隆寺を創建して開山と爲、於是東海をして代り元よ入らしむ、某年攝州福嚴寺國師の道場、南嶺を請ひて、踵を繼ぐしむ、○中貞治二年九月十一日寂せ、臨終の偈よ曰く、七十九年、心月孤圓、來時

南朝正平十八年 北朝貞治二年九月十一日

二二五

聖福寺二
十八世

周防永興
寺ヲ開ク

無口、一句了然、

〔佛祖宗派綱要〕 楊岐方會

南禪 翁德儉

聖福 嶺南子越

南禪 仲圓伊

南禪 履元禮

〔廣智國師語錄〕 偶頌 南嶺

瞻部州中第一峯、當陽突出勢巖崕、藏身北斗登孤頂、東泰西恒立下風、

〔寂室錄〕 偶頌 之一 雪中寄東隆長老

菴外雪深積、菴中僧獨禪、同人如到此、其話普通年、

〔嵩山集〕 三 寄東隆堂上

本色住山獨見君、人天福報復何言、名藍日競魯般手、須擲餘材旌家門、

○北朝、子越ヲ筑前聖福寺住持トナスコト、延文四年八月是月ノ條ニ

見ユ、

十二日、戊寅義詮、大友氏時ヲ、筑後守護職ニ補ス、

法系

士曇ノ南嶺道號頌

元光ノ寄スル偶

居中ノ住山ヲ賀スル詩

豐前ノ國替

冷泉公泰ノ和歌

百首和歌一條内嗣

〔大友文書〕 ○筑後

筑後國守護職事、爲豐前國替、所補任也、早守先例、可致沙汰之狀如件、

貞治二年九月十二日

(義詮) (花押)

大友刑部大輔殿

○義詮、氏時ヲ肥後守護職ニ補スルコト、延文四年八月二十四日ノ條

ニ、勳功ノ賞トシテ、菊池氏闕所地ノ半ト、筑後生葉莊地頭職トヲ氏時

ニ與フルコト、同年十二月十五日ノ條ニ見ユ、

十三日、己卯後村上天皇住吉行宮和歌御會、

〔新葉和歌集〕 戀歌五 正平十八年九月十三夜、内裏みて、人々題をさくり

て歌讀侍り巻ると、(公卷)寄嵐戀を、冷泉入道前右大臣

いふふ糸てあうはと、うゑる頼めおし契もいゑのあらし吹夜を

○是歲、百首和歌、五十首和歌御會、便宜左ニ合敘ス、

〔新葉和歌集〕 秋歌上 正平十八年、内裏みて、人々題をさくりて、百首歌よ

見侍り巻る時、初秋の心を、(一條内嗣) 福恩寺前關白内大臣

住吉の松よ涼しく聞そめゆ、秋く涼かさのおきつゝを、わうせ

南朝正平十八年 北朝貞治二年九月二十六日

二一八

〔新葉和歌集〕

戀歌三

正平十八年、内裏百首歌中、旅戀を、

(花山院家書)
妙光寺内大臣

思ふつゝ、ろつくしの行をゑよあれいと頼むおふの松原

〔新葉和歌集〕

戀歌四

正平十八年、内裏みて、人々題をさくして、百首歌讀

侍り々ほとた寄遊女戀を、

妙光寺内大臣

いふふして結ひささめん浪枕うきさる舟のよるの契を

〔新葉和歌集〕

神祇歌

正平十八年、内裏みて、人々名所百首歌のうまつ

りたる時、鈴鹿川といふ事を讀侍りは、妙光寺内大臣

神も又あそれのうきよま、り川八十瀬をうけし跡の白浪

〔新葉和歌集〕

戀歌二

正平十八年、内裏みて、人々題をさくして、五十首歌

とみ侍り々流中よ、おあし心を、

(後水尾)
妙光寺内大臣

此舟よさて縁てかゝらとぬ世語よ成りてぬるうたふの浦梨

二十六日、北黨左衛門尉某、丹波光福寺ニ、同寺領同國高槻保守清名ヲ

安堵セシム、

〔安國寺文書〕

○乾

丹波

丹波國高槻保守清名事、任相傳之旨、知行不可有相違之狀如件、

貞治二年九月廿六日

左衛門尉

光福寺塔頭侍者御中

○義詮、尊氏ノ遺骨ヲ光福寺ニ納ムルコト、延文三年六月二十九日ノ

條ニ、同寺ヲシテ、天下靜謐ヲ祈ラシムルコト、康安元年十二月二十五

日ノ條ニ、尊氏夫人登眞院ノ遺骨ヲ同寺ニ納ムルコト、貞治四年七月

十六日ノ條ニ見ユ、

二十八日、北朝、東寺ヲシテ、榮濟沾却ノ水田ヲ元ノ如ク管領セシム、

〔東寺百合文書〕

○山城之二十四

(繪卷)
繪旨并寺務御教書案 榮濟律師沾却水田事

東寺水田内五段、榮濟執行之時沾却云々、早如元可管領之由、可令下知定伊

律師給之旨、天氣所候也、仍上啓如件、

九月廿八日

右中辨(宛果小路)嗣房

謹上 三寶院僧正御房

南朝正平十八年 北朝貞治二年九月二十八日

二一九

南朝正平十八年 北朝貞治二年九月二十八日

一一〇

榮濟沽却水田事

綸旨如此、可令存知給之由、長者僧正御房所候也、仍執達如件、

貞治二年九月廿九日

權大僧都 判

東寺執行律師御房

〔東寺執行日記〕 一 十月三日、榮濟執行之時、沽却水田五段、致興行沙汰、如

元可知行之由、被下綸旨、寺務執行了、此事去月廿六日、雜訴御沙汰ニ被合之了、今日到來、別當使光不法師（定使）持參、被下酒肴了、用途百文同賜之了、凡祝著々々、

十六日、彼水田内南田三段、（號角神里八坪）買得人比丘尼明順出訴訟了、自寺務被取下之了、

弘覺法親王、山城佛母心院ニ於テ、灌頂ヲ受ケ給フ、

〔東寺執行日記〕 一 九月廿八日、於嵯峨佛母心院、有宮御灌頂、教遍阿闍梨

參威儀僧矣、

〔續史愚抄〕 （後光嚴院中） 九月廿八日、甲午、大覺寺宮、（弘覺法親王歟、重可考）於嵯峨佛

母心院、遂灌頂云、（東執記、門跡傳、）

水田内南
田三段ハ
尼明順買
得ス

威儀僧教
遍阿闍梨

〔參考〕

〔山城名勝志〕 （九野郡三） 佛母心院

仁和寺院家記云、權僧正信助、（菩提院本號大金剛院、堀川入道太政大臣基實息、正和五年十二月十一日、入壇道場大覺寺ノ内佛母心院、後宇多院御附法、建武四年七月十九日入滅、四十一、）

細川賴之、讚岐歡喜寺領同國土器保田所職ヲ、同寺ニ安堵セシム、

〔京都帝國大學所藏文書〕 （古文書集八）

讚岐國宇夫階歡喜寺領同國土器保田所職、（又次郎入道跡事、任先度寄進狀之旨、領掌不可有相違之狀如件、）

貞治二年九月廿八日

（細川賴之） 右馬頭源朝臣（花押）

二十九日、（北朝）右近衛權少將持明院保冬ヲ、左近衛權中將卜爲ス、

〔柳原家記錄〕 （七十七仲光卿記、勅裁口宣）

貞治二年九月廿九日 宣旨

右近衛權少將藤原朝臣保冬

宜爲左近衛權中將

藏人右少辨藤原仲光 奉

佛母心院
ハ大覺寺
内ニ在リ

又次郎入
道ノ跡

南朝正平十八年 北朝貞治二年九月二十九日

一一一

口宣一帋獻之、早可令下知給之狀如件

九月廿九日

右少辨仲光 奉

進上 新藤中納言殿

○保冬ノ右近衛權少將トナルコト、文和四年八月十三日ノ條ニ見ユ、三十日、丙申是ヨリ先、伊賀光政、北黨某ニ屬シテ、陸奥名取、府中及ビ高清水ノ陣ニ至ル、是日、北黨某、之ヲ證ス、

〔飯埜八幡社古文書〕坤

〔著到〕

伊賀肥前守盛光代子息左衛門三郎光政申、

右名取御陣馳參候、陸奥名取郡荷中并高清水御下向供奉仕候者也、然則爲後代龜鏡、著到之狀如件、

貞治二年九月晦日

承了

是月、北黨斯波直持、陸奥飯野八幡社領ニ、甲乙人等ノ濫妨狼藉スルヲ

禁ズ、

〔飯埜八幡社古文書〕乾

〔新發直持〕
〔花押〕

禁制

飯野八幡宮附社領等事

右軍勢以下甲乙人等、不可致濫妨狼藉、若有違犯之輩者、爲處罪科、可令注進交名之狀如件、

貞治二年九月 日

十月丁酉朔盡

一日酉北黨石塔範家、伊東祐家ニ、津々野河原新田畠内三段ヲ知行セシム、

〔伊東文書〕

津々野河原新田畠内參反政所所計申候也、可有知行之狀如件、

貞治二年十月一日

(石塔範家) 範家(花押)

伊東掃部助殿

○十月、範家祐家ニ駿河安部山内上田村地頭郷司職ヲ宛行フコト、左

ニ附收ス、

〔伊東文書〕

安部山内上田村地頭郷司職事、所宛行伊東掃部助祐家也、任年貢公事先例、可被致沙汰之狀如件、

貞治二年十月 日

(石塔範家) (花押)

二日戊戌若狹高成寺法延年大寂ス、

〔青井山高成禪寺開山大年大和尚傳〕

傳記

梵僊ニ相
模淨妙寺
ニ謂ス

梵僊崇岳
的傳ノ法
衣ヲ付ス
法延覺僊
ト回覺僊
下ニ問話
カノ狀ヲ
シム

尊氏ノ歸
嚮ヲ受ク

大高重成
ルニ請セラ

師諱法延、字大年、豫州人也。父藤氏、母平氏、縉笏之族也。幼而有出塵之志、懇白父母、師郡之教、寺某僧都以薙染、博學梵經、染指於圓別之奧、然聽宗門有傳心之要、盡棄去所業、弄遍詢之策、歲幾乎而立矣、故不勞山川嶮峻、往々參謁諸大老宿、或被可、或被賞者不少、然師不屑之、時竺僊(梵僊)仙禪師帶鳳臺之玉、卽入于本朝、雄材肆辯、眼空一代、時人莫敢嬰其鋒者、師聽風心喜、是我之所屬望也、若厥犯鉞不死、將何時射牛斗哉、英機揚々、謁仙和尚於關東淨妙大精藍、和尚一見器之、居未幾、容不時入室、以日夕俾參扣斯道、和尚徵詰雜問、使師下語、吐露心性、和尚嘗云、○中略、梵僊、法延ヲ印可スルコト且又付以從松源祖翁(孫也)至古林的傳之法衣壹頂、古林自題一縷千鈞之四字、師以珍之、一日師命工、繪作回鸞峰下流泉之側、坐語心台上、與和尚共語之狀、以請贊、和尚讚云、延首殷勤聽語心、森羅萬像笑唵唵、莫教傳向人間去、寫作高山流水音、○梵竺僊禪師語、晚錄、天柱集同、歲入洛時、尊氏相公飯嚮厥道風、幕下有高伊豫太守重成公、覃情于宗門、參詢法要於天龍國師(賢行)、々々爲之編夢中問答集付之、後薙髮號海岸淨智居士、々々慕師高風者有年矣、康永三年甲申春、佩五馬卽于若州、々爲之采邑矣、邈請尊氏相公曰、願迎師以合化吾邦、相公許之、太守改州之教寺作禪刹、請師爲開

南朝正平十八年 北朝貞治二年十月二日

二二六

山祖、命之以作高成寺、蓋以大高重成之二字也、昔祇陀之所施爲祇園之類乎、於是制叢規振墜綱、四來雲衲日臻、世以號大叢林、貞治二年癸卯十月初二日、端坐示寂、付法弟子若干、語錄若干行世、厥所傳古林法衣留鎮山門、是其師之行履土直也、若夫盛德大業、縱令硯千瀛海、筆千須彌、只是太山一毫芒而已、

〔延寶傳燈錄〕

二十七 臨濟宗

南禪竺仙梵仙禪師法嗣

若州青井山高成禪寺大年法延禪師、略○中貞治二年十月二日、威儀整正而化、

有嗣法雲巖禪德、○本朝高僧 傳異事ナシ

〔高成寺文書〕

○若 狹

□置

若狹國青井山高成禪寺住持之事

右當寺者、大高伊與太守請 法延 令住持、開山□□也、然者貞和五年丑巳四月一

日、雖可爲稜迦院門徒、寺由契約當寺之所領等皆被取公、既雖及破□顛倒、更

無其扶持、背契約之旨間、任契約之趣、於向後可爲別院者也、此上者 法延 (故脱カ) 物後

於法延弟子孫々、相隨器用可令住持者也、若於子孫者中、被□人背法延定置

旨者、可爲不孝弟子、□□□置上者、從稜迦院、號門徒寺、雖致違亂妨、於公方

更不可有御用者也、仍爲後日龜鏡定置狀如件、

貞治元年八月一日

法延(花押)

法延首座道念根於心地、確不可拔、余住淨妙時、數蒙訪及、悉以此事而諮詢之、洎余董茲山、如有緣契、諮之益密、往々徵詰難問、使其下語吐露心於性之理、不無所入、不無所得、而余亦不無爲□首、而若此者、不知其幾、然雖若是、於我宗門、猶有逕庭、今年十一月十五日、余爲衆上堂、有天上天下唯我獨尊之語、有未解者議之曰、此四月八日語也、何故說之首座、即謂之曰、今日堂上誕生辰也、人始稱奇、余既聞之、多識兄弟有未至者、遂於冬至小參、觀縷引言、痛爲箴誨、乃及舜老、

夫答古鏡因緣、首座一歷耳根、走謁丈室、忻然呈露、請益、余卽爲之對機、提撕再三、勘辨、見其始有超脫、誠於在昔、大段不同、卽許可之、於後亦復數々相見、見其開言、尤爲迥異、首座乃曰、從上佛祖、皆以此事時節、因緣如此、契合、方乃承嗣、爲師弟子、我今思之、數効先哲、竟以所自願、爲弟子嗣續宗風、余以福薄德淺、以不可謝之首座、既以此事、根之於心、連旬累日、投誠是請、迫不得已、使其焚香、恭請

南朝正平十八年 北朝貞治二年十月二日

二二七

三寶證明順而受之仍書此爲證云、

右付弟子法延首座、

建武四年丁丑十二月十二日

淨智竺仙梵僊(花押)

〔夢中問答〕 下

余書此書越三載一日法延首座携以誥余曰至哉有是書而書之若是此非佛法之與佛異相同心殊途同致彼此相爲表裏以化有情曷有是哉然而師知夫大高伊與太守及所刊此之意否余曰唯知其人是有鼻孔者有年矣而實未知所刊之意如何耳然無過欲利益人耳復何意哉曰因其人如師所謂有鼻孔故然後知其香臭乃欲刊之也始則國師不許高曰或未始有此寫本則已既有之而人人遞相抄錄不啻烏焉成馬毫厘有差天地懸隔否則展々轉々以誤傳誤而又誤本各相不同則乃人々疑惑莫知所歸本欲利人奈何反誤人哉然固是作始爲左武衛將軍一人酌答而已不爲他人也譬如佛說一代時教雖一時說皆爲後世及無邊衆生耳如不結集而亦安有今日哉於是國師然其說故刊之由是人皆知歸安行大道不復妄趨邪徑也余曰若是哉若是哉然亦爾知夫大道顯然三世諸佛諸代宗師皆夢言乎延曰請書以誌之余曰是則無妨又添一

法延夢中問答之文求之

個延復爲余曰大高伊與太守者號海岸居士入深法門心大如海殊有淨名之風饒益衆生誠未艾也(東水三年)今年春又遷若狹太守云故并書之甲申十月初八日寓南禪東堂之東軒

梵僊 再跋

梵僊ノ法延ニ與フル法語

〔梵竺僊禪師語錄〕

東渡禪子 與年禪人

諸佛法印無有文字匪從人得直指人心見性乃是自達磨西來印破二祖面門至今收拾不起幸自可憐生且作死馬醫虛空不能容日月不能照到者裏諸佛法印亦著不得所以道不是心不是佛不是物畢竟是箇甚麼直下見得個儻分明早是相埋沒了也何況更安箇名言句字遮相誑惑所以悞它多少好人向名言句字上尋終朝學佛學法學禪學道未有了期雪峰云飯籬邊座餓死人臨河渴死漢玄沙云飯籬裏坐餓死漢水裏沒頭浸渴死漢雲門云通身是飯通身是水所以大慧和尚將者兩三箇老凍膿不知是甚麼胡言漢語一絡索舉了喝云多嘴阿師可殺忍俊不禁通身是飯通身是水那裏得者消息來大慧也是奴見婢慙慙又雪峰謂玄沙云備頭陀何不徧參去玄沙曰達磨不來東土二祖不往西天看它發出者般語話直是驚人可煞新鮮若踏得者些子著不妨欺凡罔聖

南朝正平十八年 北朝貞治二年十月一日

二二〇

轉地回天、納須彌於芥中、擲大千於方外、然後拈一莖草、作丈六金身也得、將丈六金身、作一莖草也得、七縱八橫、變化自在、不由它人、且道、是諸佛法印、是直指人心、從來汗馬無人識、只要重論蓋代功、

〔青井山安國高成寺略記〕

狹○若 什物

一西天二十八祖之像讚

四幅

竺仙和尚將來附大年和尙、後入于將軍家之寶庫、

〔高成寺文書〕

狹○若

御札委細拜見仕候、抑青井山堂事、尤爲□□地相應事候者、不可有子細候、御座可然候、其間事、代官許へ委細申遣了、其上僕委申候了、恐惶謹言、

五月十三日

伊與權守重成(大高)〔花押〕

延首座禪師

御返事

〔履踐括要〕

狹○若

履踐序

這篇因由、私家諸子懇勸請教、辨道法度、以余爲人、不諱當故、茹連典章、憑託金文、名曰履踐、以代酬答、千萬不要、讀過便休、細入揣度、觀縷著眼、務在一撥便轉

梵僊法延
贊四祖天二
與八幅像

大高重成
青井山堂
延ノ事ヲ法
延ニ答フ

履踐括要
ヲ撰ス

諸子履踐
括要篇集
ノ始末ヲ
法延ニ尋

梵僊二見
エテ豁然
大悟ス

打成一片
ノ工夫

而已、

觀應二年 卯辛 八月十三日

青井法延自敘

履踐括要篇集既畢、諸子亦重請說此篇始末、逼不獲已、拙語應之、余從南詢尋師訪道以來、未嘗有一念箇欠緊之意、爭奈打頭不得、遇作家、終無受本色鉗鎚、何哉、是故心路未絕、徒執律身、苦行枯禪、究妙之見、祖關未透、錯作山青水綠、平常無事之看、(老)不知約我箇活祖、警牙之話、皆成死語、韓廬逐塊、靈龜曳尾、終無一點交涉之處、近來幸受先師竺(好)和仙和尚本色鉗鎚、々々下打、翻從前意路、識神窩盤之處、豁然領悟、脫白露淨、先師就而一印々定、古謂粉骨碎身、未足酬一句了然超百億是也、苟無恁麼、透過鬼門、開子隨處、做主宰底、一著子者、幾乎錯認寂湛之性、以爲至寶、搜玄窮妙、離見超情、以爲究竟、看々蹉却、我箇行脚大事、不覺、徒做門外客、作漢也、嗚呼惜哉、須是一番有、如斯結菓、始得、然後春蘭秋菊、各自馨香、山青水綠、事々依舊、加之梵行清白、潔於千嶂之月、性地耿介、涼於一天之秋、是謂打成一片工夫到也、豈是心路未絕、祖關未透、拍盲強說、平常無事者乎、而又覺得、從前江湖參得底禪、到於明眼師前、一句也用不著、如箇藥求銀入

南朝正平十八年 北朝貞治二年十月二日

二二二

諸子ヲ警策ス

鍛便流之誤多繇是余之修行始末平生錯處束做二十八段一面排出專引佛祖金言爲證痛以激之安有它哉欲其知非改過無陷不義異日做好人而已不敢聞於諸方賢達之人只是警策私家屋裏諸子者也若有一言半句漏入江湖之中唯願回慈悲方便之眼研究余之舌頭落處切莫以及唇我慢之意起箇嫉妬生滅之見但爲投誠自忘敗闕稽首和南重說一偈

誠諦金言集成大成

一番拈出一番新

依斯苦口叮嚀訓

敢保將來做好人

觀應二年 卯八月 日

青井法延爲諸子書

〔履踐括要〕

中 宗々雜糅不可別白

梵仙云履踐讀誦登臨歌嘯希鯤慕鼈投竿擲釣注修持操履讀誦經書乃至登臨賞玩詠歌舒肅悉是欲釣大身衆生之釣餌也大身衆生卽大乘根器是矣宗師一切施爲未嘗不是爲人向上提持接向上人但衆生根器下劣之者不能領悟而彼舉心動念悉作世相解之否則目爲禪道佛法俱成塵勞皆不是也故尺

法延梵履踐讀誦登臨歌嘯希鯤慕鼈投竿擲釣ヲ注ス

士曇ノ道號贊偈

〔廣智國師語錄〕

五 偈 大年

與太虛空甲子同威音劫外老翁翁祝延皇帝無疆壽萬歲三呼嵩岳峯

〔寂室錄〕

上之一 大年

試將壽域配乾坤無始無終寧紀元算自威音至彌勒聖凡是我小兒孫

〔大年法延和尚畫像〕

○若狹高成寺所藏

青井山高成禪寺開山大年和尙頂相

永恩ノ贊

元光ノ道號贊偈

古林ノ衣ト號ス

師諱法延字大年本貫豫州人也父藤氏母平氏壯而遍參一時諸大老宿到關東淨妙趨入竺仙和尚室和尚一見卽可之付以松源滅翁加括橫川需括古林的傳之衣并書一語證之矣衣留鎮于高成寺山門號古林衣一縷千鈞者乎其證語在竺仙和尚錄中示法延首座者是也貞治二年癸卯十月初二日端坐示寂付法弟子命畫師寫竺仙老師與大年和尙於回鸞峰下相見圖一問一答師資道契者

南朝正平十八年 北朝貞治二年十月二日

二二三

梵僧法延
相見ノ遺
像ハ火災
ニハル

南朝正平十八年 北朝貞治二年十月二日

二三四

乎、竺仙和尚有贊詞、詳于錄中、其遺像時迫澆季、享祿第三庚寅二月十七日、爲丙丁童子被奪去之、伽藍亦灰燼矣、誰不嘆嗟乎、伏惟、大年和尙晚歲入洛時、尊氏相公、飯嚮其道風、尊氏幕下有、大高伊豫太守重成公、法名海岸淨智居士者、康永三年甲申春、佩五馬印于若州、爲采邑矣、告尊氏相公曰、願迎大年和尙、令化吾邦可也、相公許之、大高改教寺作禪刹、引大年爲之開山祖、今之高成寺是也、名寺以高成二字何也、且掇大高重成之二字、名其寺也、昔祇陀太子所施佛之林、名之爲祇林、類乎、傳聞、海岸居士參天龍國師、國師爲之、編夢中問答集、付之居士刊板傳之于千載、黃檗傳心法要一卷、今所板行于世者、所海岸居士捨財者也、因之見之、海岸居士於大年和尙、龐居士於馬祖、裴相國於黃檗者也、至矣盡矣、於此其諸徒再命畫師、寫其慈像、需著予贊詞、予托開曰、到其盛德、縱磨大海硯、蘸須彌筆、只是太山一毫芒耳、且俟博聞、諸徒謂予曰、師乃幼而薙髮于此山、故開山行實耳、熟矣、況又來此乎、故不獲峻拒、書以應其命、贊詞曰、松源六世、竺仙的傳、玉塵拂柄在手、金縷伽梨掛肩、坐海岸孤絕處、現補陀洛迦境、待定中三會春、住小都率陀天、其招提也、鼓鳴樓鐘出寺、其化境也、窓含雪門繫船、師檀趣同、得迎豫州刺史祖述、緇素雖異、可稱翰林學士大年、把生茗帚千金、掃蕩

法延ノ徒
師ノ像ヲ
畫カシメ
贊ヲ永恩
ニ請フ
贊詞

西營葛藤露布、以楞伽經四卷、翻譯東土大乘真詮、其遊戲自由也、天然自然釋迦彌勒、其智惠行願也、小男長男、文殊普賢、到父子不傳妙訣、在未施丹青以前、看麼、

說甚今朝昨日、青山一會儼然、

〔參考〕

〔花押彙纂〕釋家 法延

○高成寺文書(看卷)
貞治元年八月一日置文

南朝正平十八年 北朝貞治二年十月二日

二三五

南朝正平十八年 北朝貞治二年十月二十日

宜爲如元造伊勢太神宮使者、

口宣一番獻之、早可令下知給之狀如件、

十月廿日

進上 坊城中納言殿

北朝、山城常光寺二、同寺曼荼羅堂田地及ビ本主友快散在名田畠等ヲ安堵セシム、

〔東寺百合文書〕ト一之十五

繪旨常光寺曼陀羅堂田地竝本主友快散在名田畠等紛失狀無子細候歟、然者當知行所々、不可有相違旨、天氣如此、悉之以狀、

貞治二 十月廿日

(中御宣方) 左少辨 在判

友快律師御房

○義詮、佐々木高秀ヲシテ、山城常光寺曼荼羅堂領散在田畠等ニ、甲乙人ノ濫妨スルヲ停メ、所務ヲ眞顯ニ全ウセシムルコト、應安四年九月十七日ノ條ニ見ユ、

二十一日、北朝、藤原光秀ヲ上野介ニ、同家光ヲ中務丞ニ任ズ、

〔柳原家記錄〕七十七 仲光卿記 勅裁口宣

貞治二年十月廿一日 宣旨

藤原光秀

宜任上野介、

藤原家光

宜任中務丞、

二十九日、北朝御遊及ビ詩御會、

〔後愚昧記〕三 十月廿九日、天晴今夜中殿宴也、當代初度也、新藤中納言忠

光卿、後日委注送之事儀見彼記、

〔御遊抄〕中殿御會

貞治二年十月廿九日、

先獻題、次御遊、次詩如例、題云、可貴聖人道、

拍子、前參、議宗重、

私器 笙御所作、
別當隆家、

南朝正平十八年 北朝貞治二年十月二十一日 二十九日

中殿ノ宴
當代初度

南朝正平十八年 北朝貞治二年十月是月

私 笛 右大臣通相公、

筆 前宰相中將雅光、

私 比巴 右大將實俊、

箏 無其人、

私 和琴 前權大納言忠季、

呂安名尊、鳥破、
席田賀殿急、

律 伊勢海、萬歲樂、
五常樂急、

御製并古詩等朗詠共無之、文人之中依兼音曲之仁也、又管絃皆名物等紛失也、各用私器了、

〔皇年代略記〕後光 貞治二十廿九、中殿御會詩、

〔參考〕

〔實隆公記〕十六 延德二年七月四日、乙卯、天晴、中入夜參、依當番也、中

中殿宴ノ
屏風

其後依召參議定所、屏風可拜見之由也、貞治中殿宴屏風也、詩歌爲重卿筆歟、
入木尤殊勝云々、略

是月、北朝權僧正杲守ヲ、東寺長者ト爲ス、

御製並ニ
古詩等ノ
朗詠無シ

仲玄ト交
替

〔東寺長者補任〕四 權僧正杲守石山成 十月日、加任宣下、仲玄替歟、仲玄

辭退之條不聞之、爲上被拔之歟、決之、

〔東寺執行日記〕一 十一月十八日、

賀札事 御加任事、御理運之條、雖不能左右御事候、臨期承悅無極候、參賀之間、且捧

短札候、以此旨、可有申御沙汰候哉、恐々謹言、

十一月十八日 權律師定伊

謹上 大納言僧都御房

追申、宣下案可注給候、又誰人替候哉、委細可示聞候、

成就院法印杲守、去九月九日、僧事昇進云々、其後不幾、加任之由有其聞、仍付

賀札者也、

廿八日、去十八日、公人等、可參石山之由、令申之間、雖出賀札、依降雨留訖、今日

參訖、同日歸參、但酒肴等不被下之、言語道斷事也、略

○杲守、昇進ノコト、九月九日ノ條ニ見ユ、

執行定伊
ノ賀札

十一月 大 丙寅 朔 盡

一日、丙寅北朝正三位世尊寺行忠ヲ從二位ニ敍ス、

〔公卿補任〕四三 非參議正三位藤行忠世尊寺、五十一月一日敍從二位、

○北朝行忠ヲ正三位ニ敍スルコト、延文四年十二月十九日ノ條ニ見

ユ、

北朝御曆奏、

〔師守記〕四十三 帝國圖書館本 貞治五年十月廿九日、戊寅、天晴、中貞治二年

十一月一日御曆奏、上卿不參之間、被付内侍所、

二日、丁卯義詮、上杉憲顯ヲシテ、結城直光ノ、仁木義尹ノ所領常陸中郡莊ヲ押領スルヲ停メシム、

〔上杉古文書〕二

仁木兵部大輔義尹所領常陸國中郡莊事、退結城直光中務大輔入道押領、嚴密可有遵行之旨、所令申關東也、急速可申沙汰之狀如件、

貞治二年十一月二日

花押 上杉民部大輔入道殿

内侍所ニ付ス

下司開發地
進止ノ地
近隣ノ莊
民等ノ家
人等ノ分
スノ妨ナ

三日、戊辰芥河貞繼、東寺雜掌某ノ、攝津垂水莊下司職ヲ濫訴スルヲ停メ、同下司職ヲ安堵セシメラレンコトヲ幕府ニ請フ、

〔東寺百合文書〕〇山城

〔海峽卷〕 芥河五郎左衛門尉支狀 貞治二十一年三月三日

芥河垂水五郎左衛門尉貞繼謹言上、

欲早被奇捐〔芥河下開〕東寺雜掌不知名字、無道濫訴、任當御代安堵御下文并關東六波羅

代々御下知御教書等公驗證文、被成御奉書攝津國垂水庄下司職以下事、

副進

三通 當御代安堵御下文御施行守護人行狀事

一卷 關東六波羅代々御下知并手繼狀事

右當庄者、下司開發進止之條、所進之公驗證文明白也、爰近隣有勢之庄民、或守護家人等、動成非分之妨之間、爲向後之煩斷絕、被准予勳功之賞、下賜安堵御下文、彌當知行無相違之地也、而押領下地拾四町八段之間、可被處御下知知違背之罪科之旨、就訴申、依田左近大夫御奉行之處、差違而於當御奉行所、結句爲本所進止之下司職之由、致虛訴之旨、承及之間、所捧支狀也、所詮雜掌

南朝正平十八年 北朝貞治二年十一月三日

二四三

於^(符カ)于内奏方、雖掠賜御教書、貞繼所帶證跡等、達于上覽、尤不便之由被仰出、則被下依田左近大夫方畢、有御尋之日、不可有其隱哉、早被奇捐雜掌之姦訴、任當御代安堵御下文并關東六波羅代々御下知狀等、爲下賜御教書、粗支言上如件、

貞治二年十一月 日

○本文書日ヲ闕ク、端裏書ニ、貞治二十一三下之トアリ、姑クコノ日ニ揭グ、尊氏勳功ノ賞トシテ、攝津垂水莊下司職ヲ貞繼ニ與フルコト、文和三年九月二日ノ條ニ見ユ、

四日^(巳)幕府、赤松則祐ヲシテ、粟生田丹後入道某ノ、播磨田中莊ヲ押領スルヲ停メ、下地ヲ律師賢宣ニ交付セシム、

〔德禪寺文書〕^{〇三山城}

大輔^(校正)律師賢宣申播磨國田中庄事、訴狀^{副具}如此子細見狀、所詮粟生田丹後入道以一旦兵糧之預狀、號地頭、立還于遵行之地、押領云々、頗招罪科歟、不日如元沙汰付賢宣、可執進請取、更不可有緩怠之狀、依仰執達如件、

貞治二年十一月四日

左兵衛佐^判

地頭
ト稱
ス
テ
押
領

赤松^(則祐)律師御房

○義詮、則祐ヲシテ、粟生田丹後入道某ノ、田中莊ヲ押領スルヲ停メ、下地ヲ賢宣ニ交付セシムルコト、延文五年三月四日ノ條ニ見ユ、

幕府、土岐直氏ヲシテ、久世七郎ノ、山城善峰寺往生院領同國上久世莊石原方内法西跡ヲ濫妨スルヲ停メ、下地ヲ同寺雜掌祐圓ニ交付セシム、

〔三鈷寺文書〕^{〇山城}

西山善峰寺往生院雜掌祐圓申、山城國上久世庄石原方内法西跡壹町餘事、訴狀^{副具}如此、久世七郎濫妨云々、早退彼妨、任御下知狀、沙汰付下地於雜掌、可被執進請取狀、使節更不可有緩怠之狀、依仰執達如件、

貞治二年十一月四日

左近將監^(新波義高)花押

土岐宮内少輔殿^(原氏)

幕府、右兵衛佐某ヲシテ、服部余次ノ、青砥康重後家尼自祐所領丹後芋野郷半分地頭職ヲ濫妨スルヲ停メ、自祐代ニ沙汰セシム、

〔前田家所藏文書〕^{事林明證三}

御教書案
青砥右衛門尉康重後家尼自祐申丹後國芋野郷半分地頭職事、訴狀如此、服

南朝正平十八年 北朝貞治二年十一月四日

二四五

南朝正平十八年 北朝貞治二年十一月六日

二四六

部余次濫妨云々、太無謂、退彼妨、可被沙汰付自祐代之狀、依仰執達如件、

貞治二年十一月四日

沙彌 在判

右兵衛佐殿

○幕府、青砥康重ニ、勳功ノ賞トシテ、丹後芋野郷ノ地ヲ宛行フコト、康永二年十一月六日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

〔前田家所藏文書〕

事林明證三

丹後國芋野郷相傳系圖

青砥右衛門尉康重

帶自祐御下文案者、和泉右衛門尉自筆也、後家自祐 應安五年十一月廿八日死去、自同五年十二月十日押領、

清詮

六日、辛未義詮、赤松則祐ヲシテ、法印曾清ノ、善法寺領播磨船曳莊、丹後黑戶莊等ヲ競望スルヲ停メ、同寺雜掌ニ交付セシム、

〔石清水文書〕

六 菊大路家文書

播州船曳庄、丹後國黑戶庄等事、曾清法印、稱平等王院領、帶正中、嘉曆、建武度々、繪旨、雖申子細、元尙清法印管領之間、載通清法印所得永仁讓狀、訖、而元應

曾清平等王院領ト稱ス、元來ハ尙清管領ノ地

永仁ノ手實

年中、以祠官等知行之別納所々、被付社務之時、件兩庄其隨一也、雖然、重爲別納、曩清法印拜領之間、被返尙清跡之條、勿論、爰任尙清永仁手實、通清跡預還補勅裁之上、不可各別之條、其理必然之間、就繪旨、武家成施行畢、仍所弃捐曾清之競望也、可令存知之狀如件、

貞治二年十一月六日

(義詮) (花押)

善法寺法印御房

善法寺法印昇清雜掌申播州船曳庄事、曾清法印雖申子細、所被付昇清也、早退曾清代官、可被打渡雜掌之狀、依仰執達如件、

貞治二年十一月十日

(斯波義將) 治部大輔(花押)

赤松律師御房

八日、癸酉妙葩、春屋天龍寺住持ト爲リ、是日、入寺ス、

〔智覺普明國師語錄〕

一 智覺普明國師春屋和尚住山城州靈龜山天龍資

聖禪寺語錄

師就雲居菴受請、於請貞治二年十一月初八日入寺、

法語

南朝正平十八年 北朝貞治二年十一月八日

二四七

指山門云、嵯峨萬仞、龍門大開、一步纔進、四海風雷、
佛殿、佛身無爲、不墮諸數、且作甚麼形容、云、揮香露乃禮拜、

土地、靈山付囑、捨在今日、神也神兮、切忌以諛爲直、
祖師、單傳直指、全沒巴鼻、此土西天、百花富貴、

據室、橫按開爐烹金、非無古德、若論漆桶生光、試看爲蚶添足、靠丈
勅黃、寶鑑當臺、明如千日、云、舉起看々、萬象不能逃影質、拈帖兵隨印轉、將逐符行、

山僧、齊維那對衆宣明、

疏

山門疏、全賓全主、換步轉身、說屋裏語、還屋裡人、
諸山疏、錦上鋪花、之乎者也、鴟盃澆腸、逆耳成我、

江湖疏、絲不如竹、々不如肉、曲傳陽春、湖南江北、

法眷疏、少林皮髓、南岳眼耳、棣萼聯輝、春風匝地、

拈衣

拈衣、寸絲不掛、有分擔荷、纔露針鋒、空也包裹、指法座云此座無高下、亦非平等中、須

瓣香

彌燈王佛、何因立下風、
此一瓣香、爇向寶鑪、端爲祝延、今上皇帝、聖躬萬歲、萬々歲、陛下、恭願、睿算

齊天、乘乾至健而正位、鴻恩浹物、法離大明以莅民、

妙在、白
槌

此香、爇向鑪中、奉爲征夷大將軍、亞相、資陪祿算、伏願、衙門之政、永佐聖化朝廷、
帷幄之籌、遠被武惠邊塞、

此香、埋之而不腐、燒之而不燼、底業種、今日拈出、爇向爐中、供養本寺開山五代

帝師、夢窓正覺、心宗普濟、國師大和尚、非是耐法乳之恩、只爲償未了之債、遂跌

座、妙在南禪、此山和尚、白槌云、法筵龍象衆、當觀第一義、師云、若是第一義、諦、南禪和

尚、一槌下百雜碎了也、不可更向諸人面前、撒土撒沙、若也恁麼、休去、法堂前草

深一丈、須知開口元不在舌頭上、可中莫有共相、激揚底麼、問答不錄迺云、我本無心、

有所希求、今此寶藏、自然而至、我大覺世尊、爲利益衆生故、出現於世、四十九年、

三百餘會、大小權實、半滿偏圓、橫說豎說、東倒西播、未嘗不以此藏開示、隨機所

化、得解雖異、檢點將來、惣不出此藏、便見、弛張萬行於毫端、印定群有於一印、塵

々含攝法界、法々發揚正宗、所以道、釋迦不出世、四十九年說、達磨不西來、少林

有妙訣、敢問大衆、前是佛殿山門、後是寢室方丈、畢竟寶藏在何處、若能於此薦

得、不歷化城、徑登寶所、無勞彈指樓閣門開、其或未然、重爲開示、以拂子還入作

麼、又一無私皇化、裏依舊好山青、

復舉、世尊與衆行次、以手指地云此地宜建梵刹、時天帝釋將一竿竹插地上云、

建梵刹竟、世尊微笑、山僧試呈一偈、應此時節去、帝釋當年成梵刹、何如今上建
吾宮、祇林春動劫、壺外觀史天開、彈指中、雨露恩光周道日、山河秀色漢時風、太
平應是將軍致、撞動須彌頂上鐘、

小參

當晚小參垂語、本無一法與人、既是兩手分付、若有帶耳朵底、不妨意外提句、問
錄不廼云、萬法根源、千聖窟宅、在眼曰見、在耳曰聞、在脚運奔、在手執捉、晃々於色
塵之內、而理不可分、昭々於心目之間、而相不可觀、無向背處、輝古騰今、絕朕迹
時、填溝塞壑、雖然如是、恁麼會去、有何交涉、兼拈主喚作主丈、則觸不喚、作主丈
則背者簡、喚作什麼、向不背不觸處、道取則且致枉、爲今時一句、又作麼生、兼丈
來年更有新條在、惱亂春風卒未休、

復舉、馮侍郎問大惠禪師云、和尚曾道、不做這蟲豸、今日因甚住山、大惠曰、盡大
地是一箇呆上座、備向何處見我、拈云、侍郎向懸崖、万仞處著力、一拶大惠若不
解翻耳、性命泊乎歸、他手裡、今夜或有人致恁麼問、只對他道、野色更無山隔斷、
天光直與水相連、次日、就多寶院拈香、一念圓成大梵宮、金輪元在願輪中、今朝
長者門前駕、昔日五雲天上龍、

湖圓月ノ江

〔東海一漚集〕

二 春屋住天龍江湖疏

材美者譽隨之、道腴者德附之、譬如影之於形也、響之於音也、夫形之立也、有類
昂而影亦類昂、音之作也、有小大而響亦小大、某名馳四遠、德重諸方、言行兼全、
福智兩足、莅事也咄嗟而辨、談禪也照用同時、明鑑來機、入門便知好惡、澤施群
品、隨幾乃分多寡、不忝國師之嗣、宜爲王者之師、

〔智覺普明國師年譜〕

貞治癸卯十一月、天龍虛席、時顎薦爭聘、於是山中者

宿竊議曰、吾山將爲安庸所欲、不如奏於官府、使雲居塔主補處、乃差英祐五六
輩、往詣官府請之、遂齋鈞帖來起師、師雖以靖退爲事、終不獲已、領之、一日上堂、
自敘出世始末、略曰、予三十有二、居南禪後板、適自思惟、光陰歛忽、不覺到今日、
予自妙年入明眼宗師室、不專究明此事、虛過此生、可不惜乎、痛生感激、職滿往
寓西芳寺、先亦有喜色、僅經一冬、于時將有天龍寺慶讚勝會、先師命予就于紀
綱職、茲會乃朝廷睿願、文武官僚相共經營、次年九月事畢矣、既而復有雲居洒
掃之命、予心甚悅、謂幸而見許、同住一房、今若不究決、更待何日、封被不臥、朝請
暮參、每有諄諄提耳之訓、纔呈見解、面目嚴冷、威風不可觸、如是經兩三、偶閱圓
覺經、年居一切時八句文、忽然有得、乃作二偈相呈、先師細看、卷而還之、藉此知
予見解不錯、以何知之、先茲舉佛佛光師祖行致問曰、一夜三更聽得首座寮前板

天龍寺ノ
書宿等官
府ニ請ウ
テ妙シム
起タシム
妙龍上堂
シテ出セ
ノ始末ヲ
敘ス

響、本來面目見前、作頌子與先師無準老和尚見了亦不道好、亦不道不好、但擊
揮在地上、我自收了歸僧堂、但知法身廣大、亦不領老和尚鉤頭意也、我疑宗師
家接人之際、須縱奪分曉、爲什麼不道好、不道不好、先師曰、見地已到、故不道不
好、大機未明、故不道好、汝豈不知佛鑑禪師滅後七年、在大慈持淨、登井樓打水、
牽動轆轤、不覺百千三昧皆在我手頭之事乎、當此時明得佛鑑平生所垂手、予
別先師已十餘年、雖未明識得先師垂手之處、年來掌寺門營造、萬事紛擾而不
被紛擾所轉、又迫不獲已出來胡說亂道、是則親炙先師之力也、大元前靈岩恕
中愷公有寄師偈序曰、宗社寥落、天下一律竊聞、和尚慨然有振興之志、深有喜
焉云々、

○妙葩、臨川寺住持トナルコト、康安元年十一月二十六日ノ條ニ見ユ、
十一日、子丙是ヨリ先、義詮、東寺律師經助ニ托シタル具足等ヲ盜ミ取ラル、
是日、幕府、其盜ヲ捕フ、

義詮近江
具足等ヲ
經助ニ預
ク

〔東寺執行日記〕一 三月廿七日、今日年預法印深源并定伊可參之由、自寺
務被仰之間、即令同道了、被仰出之旨趣、去々年康安十二月七日御開之時、將
軍家大事御具足已下、被預經助僧都于時律師之處、大事具足內重寶刀金造已下

經助ノ出
仕ヲ停メ
評定ス

盜取訖、仍此間於武家有其沙汰者也、然而未及沙汰出、所詮彼經助者、爲寺僧
之上、爲宗家可有糺明之沙汰之由、以杉田八郎左衛門尉本奉被仰之間、所被
仰出也、忿々馳歸、寺家相觸衆中、可申散狀之由、以別當宗助大僧都被仰出了、
同日申廻加評定、先相懸明匠行賀大僧都三口供隨一訖、次於經助者、且落居之程、
不可出仕之由仰送了、（遺カ）供僧中使者公文法橋禪舜、執行使節中綱圓良也、
進寺務書案經助僧都問事、今日仰趣、則相觸供僧中之處、於寺家糺明之儀、更難事行、於
宗家直對本人、及御沙汰之條、可有何子細哉、次於經助身者、付是非、先令衆
勘了、此趣供僧一同所令言上矣、

寺家ニ於
テ糺明
ハ事行ヒ
難シ

貞治二年三月廿七日

經助僧都問事、今日被仰下之間、即相觸供僧中候處、衆中事書如此、子細見
狀候歟、以此旨、可令披露給候、恐々謹言、

權律師定伊

謹上 別當大僧都御房

四月三日、雨降、○

南朝正平十八年 北朝貞治二年十一月十一日

經助ノコ
トヲ衆中
ニ觸ル

南朝正平十八年 北朝貞治二年十一月十四日

二五四

追申、經助間事爲衆中一途、可有御沙汰之由被申候し、其後無被申之旨候、
何様候哉之由、可申旨候、

此狀即遣年預法印眞聖方了、恐可披露衆中之由返答了、

十一月十一日、酉終、於八條大宮路次有一男、被取侍所了、將軍御物盜取事、露
顯故也、同心經助僧都逐電、言語道斷事也、

○義詮ノ近江ニ走ルコト、康安元年十二月八日ノ條ニ見ユ、

十四日、卯幕府、赤松則祐ヲシテ、飽間光泰ノ、東寺領播磨矢野例名公文
職ヲ濫妨スルヲ停メ、下地ヲ同寺雜掌賴憲ニ沙汰セシム、

〔東寺百合文書〕ル三十八之四十七

東寺雜掌賴憲申播磨國矢野例名公文職事、重訴狀如此、飽間光泰九郎左衛門入
道、每度立還遵行之地濫妨云々、好而招罪科歟、不日退彼輩、沙汰付雜掌於下
地、可被申左右、若尙不事行者、可有殊沙汰之狀、依仰執達如件、

貞治二年十一月十四日

左近將監判

赤松律師御房

○幕府、則祐ヲシテ、飽間光泰ノ、東寺領播磨矢野例名公文職ヲ濫妨ス

八條大宮
ニテ一男
ヲ捕フ
同心ノ經
助逐電

好シテ罪
科ヲ招ク

ルヲ停メ、下地ヲ雜掌賴憲ニ沙汰セシムルコト、延文五年十二月二日
ノ條ニ、北朝、播磨矢野例名等ヲ東寺ニ安堵セシムルコト、康安元年十
一月八日ノ條ニ見ユ、

幕府、斯波義將ヲシテ、伊丹勘解由左衛門尉及ビ治田兵庫入道等ノ、祇
園社領越中堀江莊地頭職内南北小泉、梅澤、西條、同國上高木村ヲ濫妨
スルヲ停メ、下地ヲ同社御師顯詮代ニ沙汰セシム、

〔祇園社記續錄〕十

紙端陰面ニ云、奉書、

祇園社御師法印顯詮申社領越中國堀江庄地頭職内南北小泉、梅澤、西條、同
國上高木村事、訴狀副具如此、子細見狀、伊丹勘解由左衛門尉並治田兵庫入
道、以下輩濫妨云々、早速電方彼等、沙汰付下地於顯詮代、可執進請取狀由、可令下
知守護代給之狀、依仰執達如件、

貞治二年十一月十四日

左近將監判

治部大輔殿

南朝正平十八年 北朝貞治二年十一月十四日

二五五

遵行狀
顯證代伊
與堅者

南朝正平十八年 北朝貞治二年十一月十八日

二五六

同云守護代書下、使節乙部勘ヶ由左衛門封裏同正文、
祇園社御師法印顯詮代伊與立者申社領當國(中)堀江庄地頭職内梅澤村
半分事、任去年貞治十一月十四日引付御奉書并去月八日御教書之旨、可打
渡下地於伊與立者之狀依仰執達如件、

貞治三年十月廿七日

沙彌 判

乙部勘ヶ由左衛門殿

同讓狀

祇園社神領當年(國)越中堀江庄地頭職内梅澤村半分事、任去廿七日御宛行之
旨、所令遵行伊與立者、依仰執達如件、

貞治三年十月廿八日

左衛門尉 判

○幕府斯波義將ヲシテ、土肥中務入道心覺父子ノ、祇園社領越中堀江
庄ヲ濫妨スルヲ停メ、下地ヲ同莊惣領方雜掌成定ニ交付セシムルコ
ト、明年九月四日ノ條ニ見ユ、

十八日、北朝小除日、

未

打渡狀

〔公卿補任〕

四十

權大納言正二位藤實繼(三條)、五十一月十八日復任、

前參議從二位源親光(中務)、五十一月十八日任權中納言、

前權中納言正三位藤俊冬(所城)、五十一月十八日辭、

前參議正三位藤宗重(中御門)、六十一月十八日任權中納言、

前權中納言從三位藤教光(北小路)、七十一月十八日辭、

權中納言從三位藤隆家(四條)、六四月廿日任右兵衛督、同日使別當如元、十一
月十八日遷兼右衛門督、

○北朝從四位上大中臣實通ヲ正四位下ニ、從四位下大中臣時世ヲ從
四位上ニ敍スル等ノコト、便宜左ニ合敍ス、

〔柳原家記錄〕

七十七
仲光卿記 勅裁口宣

貞治二年十一月十二日 宣旨

從四位上大中臣朝臣實通

宜敍正四位下、

從四位下大中臣時世

大中臣時
世

大中臣實
通

南朝正平十八年 北朝貞治二年十一月十八日

二五七

南朝正平十八年 北朝貞治二年十一月十八日

二五八

大中臣輔世

同朝臣清世

以上宜敍從四位上

從五位下大中朝臣輔世

宜敍從五位上

藏人右少辨藤原仲光 奉

口宣一昏獻上、早可令下知給之狀如件、

十一月十二日

右少辨

進上 藤中納言殿

上卿新藤中納言

貞治二年十一月廿一日 宣旨

左兵衛尉藤原國重

宜任左衛門尉

同日

正六位上藤原資妻

左衛門尉

宜賜從五位下位記

同日

大法師朝榮

宜敍法橋

法橋

北黨左衛門尉某、丹後餘保呂地頭職ヲ、朽木一壽丸代ニ避渡ス、

〔朽木文書〕 乾

丹後國余呂保呂保地頭職事、任被仰下□旨、沙汰付下地於久津木一壽丸代之旨、
渡狀如件、

貞治二年十一月十八日

左衛門尉(花押)

二十日、^西下野日光山別當僧正某、同山常行堂堂僧及ビ講衆ノ入衆ニ關
スル訴ヲ裁シ、堂僧、講衆各一人入衆ノコトヲ定ム、

〔輪王寺文書〕 〇下野

堂講相論事□□所存落居□□期歟、於見衆者、重□□私得度已後、任故實□
定之由申之、於結衆者、先立而差定、重政多誘取、堂中結句又不顧先度非儀、重
欲抑留昌秋之間、及此霍論云々、就之兩方申狀、雖事繁究明頗難事行哉、仍爲

南朝正平十八年 北朝貞治二年十一月二十日

二五九

度者ハ堂
僧分一人
結衆分二
人ヲ加フ

□□兩方所存、以和睦之儀、一途令落居、可申御^(其)□^(其)旨、度々雖被仰下、兩方更無承諾、只一向雅意之請文趣也、然者任先度落居之篇、各一人差定不可相替、但兼修事、結衆雖申之、堂中又不及承諾、所詮兼修一段者、爲八法興行歟、仍向後於來度者、三人早可加結衆方、其後堂僧分一人、結衆分二人、且任次第、且隨器用、可有差定、其規式大概任古御帳文旨、所被定一途也、此上猶存異儀、不從^(其)上裁者、云堂中、云講衆、搜帳本、可被處罪科之由、別當僧正御房御氣色所候也、仍執達如件、

貞治二年十一月廿日

權少僧都

堂僧等御中

近年講衆
闕意

堂中一人
講衆一人
ヲ差定セ

定

常行堂

右新衆差定事、日來者、限堂中規式之間無異論、而近年人法漸衰減之間、講衆就及闕意、有此儀歟、是又雖不背理、動及霍論之條、尤不可然、云堂中、云結衆、共住興隆、可專御願之處、互住強儀間、始終定可有難儀哉、然者結衆者卅人、見衆者十四人、已爲半分之間、堂中一人之後、講衆一人可有差定之、但如古御帳文

シム

堂僧結衆
著會ノ時
ノ舊例
酒宴ノ法

者、可守器用之由、被定置訖、已爲祖師御遺誠之上者、一山爭無優異之儀、然者若非其器者、結衆方新加、雖及重疊二人、一人分始終差定、不可存異論之狀所定如件、

貞治二年十一月廿日

座主僧正法印大和尚位

定

常行堂

右堂僧結衆著會之砌、不論堂講衆著座之一和尚、致諸成敗之條、爲舊例之處、每度及異論歟、甚不可然、自今已後、可任先規、次酒宴之法、并暫時之暇事、可乞同惣一和尚、但於卅講五時講之間者、爲少勸進之役、申繼之、請著座一和尚之氣色、可令落居、同於先達出仕之砌、堂僧結衆不著座、致勸盃之時者、不論堂講衆、相向惣一和尚、可成訴訟、次爲延年指衆會之案内、同鐘打事、堂講衆任薦次、爲一和尚、役可沙汰之、中禪寺以同前、出仕之時者、坐一和尚之座、可執行始終、云堂中、云結衆、共住興隆、可專御願者也、若條々共於背此法之輩者、糺明張本之人、跡、可被拂山中、之狀、所定如件、

南朝正平十八年 北朝貞治二年十一月二十日

二六一

南朝正平十八年 北朝貞治二年十一月二十日

二六二

貞治二年十一月廿六日

座主僧正法印大和尚位(花押)

(講義書)
堂僧初度申狀案文

目安

日光山常行堂々僧等申、

欲特蒙御裁許、且因准先例、且任文永建治御張文、停止結衆等新議非法、任
差文、淨土院昌祐律師同宿昌秋被補堂僧、結衆等惡行被糺明子細條々、

戒者下著
ノ時其器
ヲ守リテ
差文ヲ遣
ス

瀧尾講

右謹考先例、當堂入衆事、戒者下著之時、守其器、遣差文者古實也、講衆者、二薦
夏勤兩講說、三薦春出所望狀、令入衆者先規也、而道樹房重辨僧都同宿重政、
淨土院昌祐律師同宿昌秋受戒下向之間、依爲其器、遣差文之處、重政者、參堂
無相違、昌秋者、度々打返差文、剩正月十五日瀧尾講、無是非沙汰入東山之條、
前代未聞事也、是一、次重政參堂事、號房主重辨所行、重辨以下同宿等、於諸講
說不可著合之旨、立使者、止出仕之條、自由張行罪科不輕、是二、加之上執事以
下見衆等皆以不可著合、云々、是三、縱雖爲新議、(德)有所存者、可仰上裁之處、任雅意爭

貫首二代
ヲノ御張文
昌秋差文
ニ返ス

堂衆ハ非
家人ニ入
ザレバコ
トヲ得ズ
講衆ハ侍
者トシテ
入衆セシ

當山ハ貫
首ノ進退

奉忽緒(德)上方、破貫首二代御張文上者、罪科何道、無御炳誠者、向後狼藉不可斷
絕者、是四、任堂僧差文、重政參堂之條、稱房主咎、重辨於被擯出者、昌秋返差文、
八講衆、昌祐咎如何爰久安元年、始而自被移置本山於東谷常行堂以來、星霜
二百餘歲、返差文八講衆之例、曾以無之、雖勤講說、守其器、依遣差文令參堂者
傍例、凡當堂衆者、糺品秩之間、非御家人者、無入衆之議、不差腰刀、不加惡事、講
衆者、爲侍者令入衆之間、堂講異議也、然間講衆等存確執、堂講爲無勝劣、先立
誘取之間、堂僧器無人數、講衆者、四季講之新足、重嚴僧都依申行之、每年闕如
無之、於御忌日者、無新足上、無人數也、隨而今年御忌日及闕如之、同上執事如
形執沙汰訖、向後御勤可斷絕、且不可立堂僧造意、佛法雖(難)貫首之御敵、何事如
之哉、

以前條々大概如斯、凡戒者下著以前、遣使者於本房誘取、不待三薦、不勤兩講
說、號本山例、背先規古實、新議張行、尤可被加禁逼、御留守學頭、何同新議非法
可許容之哉、就中當山者、貫首御進退也、雖爲本山式、背古例不可新議私張行、
招其咎者也、所詮以昌秋被補堂僧、結衆等非法惡行可被糺明之由、被下御教
書者、如日來堂講勤無違亂、內貴佛法不廢、外仰有道之善政、不耐懇欸之至、堂

南朝正平十八年 北朝貞治二年十一月二十日

二六三

僧等跪一同申上目安如件、

貞治貳年潤正月七日

二十二日、子亥北朝、不動法ヲ土御門殿ニ修ス、

〔東寺執行日記〕一 十一月廿二日、西方院法印仲我於禁裏(土御門殿)、不動法行之、同

廿八日結願云々、

〔參考〕

〔東寺執行日記〕一 貞治三年三月十五日、去六日西方院法印仲我昇進、去

年貞治十一月廿二日、禁裏不動御修法勤仕勞被書入、去月廿六日僧事訖、凡

此仁當寺學頭并定額僧大覺寺學頭也、法流ハ理性院也、

二十四日、丑巳義詮、右兵衛佐某ヲシテ、丹後佐野別宮及ビ板浪以下ヲ、石

清水善法寺雜掌ニ交付セシム、

〔石清水文書〕六 菊大路家文書

善法寺法印昇清雜掌申丹波國佐野別宮并板浪以下事、度々被仰之處、于今

不遂行者、太以濫吹也、不日打渡彼所々於雜掌、可令申左右若尙不事行者、可

有殊沙汰之狀如件、

導師西方
院仲我

仲我ハ東
寺并ニ大
覺寺ノ學
頭

貞治二年十一月廿四日

(義詮)
〔花押〕

右兵衛佐殿

二十五日、庚寅權僧正道淵、東寺二長者ヲ辭ス、

〔東寺長者補任〕四 權僧正道淵菩提院十一月廿五日辭長者、

○道淵ノ東寺二長者ニ補セラル、コト、四月十三日ノ條ニ見ユ

二十六日、卯辛義詮、石清水八幡宮ニ詣ツ、

〔東寺執行日記〕一 十一月廿六日、鎌倉大納言義詮卿石清水參詣矣、

二十八日、巳癸北朝、東坊城長綱ヲ大藏卿ニ還補シ、山科教言ノ右衛門督

ヲ罷ム、

〔公卿補任〕三十

非參議從三位(東坊城)菅長綱 大藏卿、正月廿八日去卿、十一月廿八日還任、參木、

(山科)藤教言、三十 右衛門督、十一月廿八日去督、

十二月 丙申朔 盡

八日、卯沙彌道達、近江竹生島ノ制法ヲ定ム、

〔竹生島文書〕○近江

〔編纂書〕惣政所御書 馬淵殿

定置 制法事

右於當嶋郡使等可停止檢斷以下非分催促、但於罪科之輩者、爲寺中沙汰、可被退當嶋之居住、將又、至寺領郡使等、就是非、可止入部之儀也、次寺領檢斷等事、爲同寺家之計、可有其沙汰之狀如件、

貞治二年十二月八日

沙彌道達(花押)

○佐々木氏頼、目賀田彈正忠入道玄仙ヲシテ、守護使等ノ竹生島及ビ寺領近江早崎村ニ入部濫妨スルヲ停メシムルコト、貞治六年七月八日ノ條ニ見ユ、

前建長寺住持可什寂ス、

〔普濟寺過去帳〕○武

八日 物外大定禪師示寂、貞治二年□□□□略下

檢斷以下
非分催促
ス

傳記

紹明ニ參
慧廣等ト
共ニ元ニ
入ル

博多ニ歸
著スニ
少貳頼尙
リノ請ニ依
ニ崇福寺

〔普濟寺記錄〕○武

武芴多摩郡柴崎村玄武山普濟寺
一御朱印貳拾石、寺中不入諸役御免除、

開祖眞照大定禪師物外可什和尚、

貞治二癸卯年十二月初八日示寂、法臘七十八、○下

〔五山記考異〕巨福山建長興國 第三七大定禪師 嗣法大應、諱可什、號物外、十二月八日、

〔延寶傳燈錄〕臨濟宗 建長南浦紹明國師法嗣

相州建長物外可什禪師、久參大應、得擇法眼、元應二年、與天岸廣等相偕入元、徧躡名區、謁一時名匠、天曆己巳、明極俊應本期之請、誘竺仙、天岸及師、而浮海岸、有洋中苦無風、偈師和曰、十年詢道事參尋、豈怕重溟濶、又深、萬里清風吹不盡、一蓬明月影將沈、仰憑三界天神力、且慰五湖孤客心、日日望山、山不見、潮陽依舊涌黃金、始見山喜作、見山同立喚、喚山、山便覺、歡心海樣寬、他日莫談波浪嶮、使人特地骨毛寒、既及著博多濱、會秀崖嵐解、崇福印、太宰府都督藤頼尙、請師開堂、瓣香酬大應、鎌倉源副帥敦聘、以建長、創開武之清德寺、濃之正法開山大

建長寺二
住ス
武藏清德
寺ヲ開ク
正榮ノ七
座回忌ニ
ス

南朝正平十八年 北朝貞治二年十二月八日

二六八

醫禪師七周忌、門人等請師陞座、問答罷、廼曰、法無定相遇緣、卽宗、法幢隨處建立、正法逐時流通、所以道、法本來法、無法無非法、然則以法說法、法無異說、以佛見佛、佛無異見、乃古乃今、是凡是聖、同一正見也、若是利根上智、便向自己脚跟下承當、更不用如之若何、坐斷報化佛頭、無纖毫漏滲、況是吾祖達磨大師西來、不立文字、直指人心、見性成佛、後來六祖大鑑(鑑)祖師道、只個不立兩字、已是立了也、何況說心說性、談玄談妙哉、祖師門下有甚麼交涉、豈不見藥山(性)始到石頭問云、三乘十二分教、某甲粗知之、曾聞南方直指人心、見性成佛、某實未明了、乞師指示、石頭云、恁麼也不得、不恁麼也不得、恁麼總不得、藥山不契、直到(道)馬大師處、又如前問、大師云、有時教伊揚眉瞬目、有時教伊不揚眉瞬目、有時教伊揚眉瞬目、是、有時教伊不揚眉瞬目、不是、山於是省、大師云、你見個甚麼道理、山云、我在石頭時、如蚊子上鐵牛相似、且道、石頭曰、恁麼不恁麼總不得、馬祖又曰、有時是有時不是、畢竟是同是別、今時兄弟盡謂、石頭壁立萬仞、處接他去、故不契、馬祖放開一線路、他乃悟去、殊不知、石頭恁麼道、早是滿逗不少、馬祖恁麼道、毒害尤深、借問諸人、藥山前頭、因甚麼不契、後頭因甚麼悟去、到這裏、須此有些不被人瞞、衲僧眼目始得、所以道、參須實參、悟須實悟、雖然威音王已前無

眞照大定
禪師ノノ
ヲ賜フ

相模淨智
寺ヲ董ス

師自悟、不假修證、威音王已後、因師打發、未免立師立資、有迷有悟、有修有證、要且是接引方便語也、若依實論之、元來只個自家底、自受用三昧也、前所謂法幢隨處建立、正法逐時流通者也、夫本寺開山大醫禪師、親入鷲峰(飛也)老國師室、挑起無盡大法燈、一燈百千燈、燈燈相續、照徹群昏、大哉至哉、復舉洞山(良妙)供養雲嵩(無盡)和尚真次、有僧問、昔年邈真時、先師只道這是、莫是否、山云、是、僧云、意旨如何、山云、我當時泊錯會先師意、僧云、未審先師還知有也無、山云、若不知有、爭解恁麼道、若知有、爭肯恁麼道、師曰、今日恰值堂頭和尚供養開山先師真次、若是有恁麼問和尚、又恁麼答、山僧在傍未免爲之著判語去、莫怪父子互換機、正中來偏中至、水中鹽味、色裏膠青、人只知有何會形容、雖然如此、只如洞山云、爭解恁麼道、爭肯恁麼道、端的作麼生辨別、喝一喝曰、只聞鷄報家林曉、未見鴈傳鄉國書、師某年十二月八日寂、塔在福山天源菴、敕諡眞照大定禪師。

〔延寶傳燈錄〕

二十一
臨濟宗

西江宗湛菴主法嗣

相州建長藏海性珍禪師、京城人也、○中物外什董相州之淨智、招居後版、及外遷建長、轉前版、秉拂說法、○下

〔本朝高僧傳〕

二十

相州建長寺沙門可什傳

南朝正平十八年 北朝貞治二年十二月八日

二六九

南朝正平十八年 北朝貞治二年十二月八日

二七〇

一覽亭ノ
傷
觀應二年
示寂說
塔ヲ回陽
トイフ

釋可什號物外不詳何許人。○中又一覽亭偈曰山重々又海漫々塵刹都來眨
眼間見得分明非見見共誰高倚曲欄干什以觀應二年十二月八日化于天源
菴勅謚真照大定禪師樹塔曰回陽

〔本邦禪林諸師別稱〕

別ニ豐城
ト號ス

豐城 物外可什 住建長嗣南浦

〔佛祖宗派綱要〕

楊岐
方會

法系

建長南紹明

建長物可什

壽福謙宗禮

建長直成端

〔佛乘禪師東歸集〕物外菴口號

歸隱方休事杖鞋綠饒門逕長莓苔厭繁斫却軒前竹放取一天明月來
揚眉瞬目何魔魅樹倒藤枯時若爲一句當機如擬議德山臨濟豎降旗
爍盡玄微機路絕南詢童子誤奔馳有娘生口嫌吞佛證自在身誰假師翠竹青
杉圍老屋紫蘇黃菊滿疎籬獨居物外無拘束日上月沈十二時

慧廣物外
菴口號

梵僊ノ天
源菴記

〔梵竺僊禪師語錄〕

天柱集
雜著

天源菴記

先王所尊莫大於孝大雄氏殊尊而尤大也然生事死葬其致唯一相陽巨福山
建長禪寺者爲海內第一蘭若其十二世圓通大應國師號南浦諱紹明示寂當
山闌維之後越二十餘載雖徒衆之多莫能卜其宅兆而安措其靈骨焉非不爲
也力不及也徒之內有曰宗意字栢菴者爲寺之大耆舊且掌都聞之職莫不念
茲在茲故嘗塔於寺之它處然地窄而不美與夫出入徑路不便行履內外彼我
不堪其憂以其事聞於朝廷建武初詔賜茲地并天源禪菴之額自寺之北隅循
薰碧池渡截流橋傍山縈廻數百步流泉暗注空翠含風雲蘿寒木鬱蔽岩戶則
乃鑿崖開道遂入幽谷崗巒映帶左右委蛇故知勝道場地實在於茲於是刊木
伐石精構堂室床座臥具靡所不備尊嚴像設生以事之至於獲爲蒸嘗之禮其
猶先王之制而有宗廟焉也抑茲異境絕致不假脩飾出自天然亦爲奇矣且其
左臂東峯之頂有大浮圖崢嶸丹級掩映山綠猶天垂地湧巋然翼然如呈如獻
至於碧沼青林皆非常態悉與門牆戶牖相佐相承如揖如遜斯卽嘗所作於它
處不堪其憂者迂於是也吁彼何其鄙而斯何其優哉抑有數乎抑有時乎然而
土木之工所費其資亦萬有餘緡矣是皆一出於意公也先是意公有居俗之弟

天源禪菴
額ヲ賜フ

南朝正平十八年 北朝貞治二年十二月八日

二七一

於師無恙之時、嘗共承事之、且復禮意公爲義師、訓其名曰宗明、爲在家出家弟子也、觀之意、公爲二重昆仲、又爲師焉、且明公尊師之志、猶不爲之可々、而懼其兄之力乏、恐其事之不贍、故傾其家、廩相爲戮力、無幾衆制畢就、同門之士、喜而聚爲議曰、維是菴也、開基創業、一出於二公之己有、師門所籍亦莫大矣、其可蔑聞於將來、且我等不能一木一石之助、然而豈無知耶、宜植生詞以旌其德、抑爲世之勸也、二公聊聞而不許、然衆議不可沮、遂作之、內置二公壽像、并凡有功於斯者、各以名銜位其牌、既沒之後、必於諱日營供以享之、歲定其規、雲仍是守毋爽、苟或世代深遠、有不肖者出、忘其本而自擅、至於凌滅改作、衆攻而擯之、鬼誅而報之可也、議定、有物外首座什公、飽參而博識、抱其道而恬乎淡然、不與物競、一綢乎理者也、自昔南遊與余爲舊識、以其事命爲之記、且余固不知文章之所爲也、然以什公之志、且欲爲後世之章程、而海內未始有也、而又強之、免不可獲、因爲之書、而復爲詞曰、

人倫之道、孝爲至要、異德殊尊、塔宇宗廟、相陽福山、深入幽谷、乃有厥人、創茲華屋、天源派遠、終歸於海、餘波末流、遵行毋改、作此記詞、用傳不朽、子子孫孫、繩々是守、

可什天源
庵ノ記ヲ
梵僊ニ囑
ス

梵僊ノ可
什建長寺
第一座ニ
位スル賀

〔梵竺僊禪師語錄〕

天柱集前僊頌

廣休居老人韻寄物外首座并引

偶閱休居老人語、有寄淨慈斷江首座偈者、因思、建長第一座物外什公年高德邵、而久不肯爲、今方一出、群衲喜之、於是敬廣其韻、以助其喜、并爲叢林得人之賀、仍用其起結二句、并書是老人舊作於其首云、當時之序如此今開版則不書休居所作者

巨福山中第一座、昔曾万里遊南方、每念雲門睦州死、痛嗟法海頽其綱、何況耆年歷黃檗、行道已先威音王、與夫一時坐鉢位、何如大地爲禪床、佛祖固無立地分、聊以道術能相忘、隨其波也逐其浪、同其塵也和其光、否則人應無處避、北斗南辰俱易位、此事如今且莫論、不如下地巡堂去、

〔東歸集〕 和物外首座行脚歸

東西縱步忌鞭索、地北天南隨所托、山萬層兮水萬條、自家行李自家挑、永嘉一宿曹溪去、啐啄機用同時具、摩霄俊鶻便高飛、明月夜照江淮路、物外遊人從何歸、禪衣尙濕吳山雨、近聞說法昇天宮、却在扶桑東畔住、同參不許小釋迦、摩訶衍法猶在句、兔角杖子暫息肩、拈來靠在菩提樹、

〔廣智國師語錄〕

五頌

次物外藏主韻

掃除九丘并八索、五千卷裏還依托、寧知截斷箇兩條、鑿頭下菜徒勞挑、直饒莫

士養ノ和
偶

圓言ノ和
偶

南朝正平十八年 北朝貞治二年十二月八日

二七四

向中間住。臨機只要閑家具。不將本分爲全提。向上誰能通線路。竹老曾爲物外遊。歸來東海施法雨。天下名山寺院多。何妨任性隨緣住。巨峯衆底且容身。要透玄關參活句。活句活句須參取。好風吹折長松樹。

圓月ノ可
什萬壽寺
住スル
疏ニ

〔東海一漚集〕

疏ニ 萬壽請物外疏

烏號鉅黍不能自正。正在排擲。綠耳纖離。雖曰是良。良由鞭策。況此末流。邪見成弊。賴彼本色。住持力除。猊床適虛。象駕宜命。某人在獨愈謹。泚衆固嚴。應物則無作無功。功超物外。臨機則有照有用。用施機先。源流降九重天。澤潤遍一切處。南遊爲久。參於阿叔。宜合玉樹。生謝家庭階。東歸豈可負於廼翁。正好雲關呈國師塔樣。既然玄武山下。假設玄要。亦須乾明門中。別立乾坤。祝萬壽爲一人。許三請於四衆。

圓月ノ青
盜香爐ヲ
贈ラレタ
ルヲ謝ス
ル詩

〔東海一漚集〕

古詩 謝惠青盜香爐并序

物外什公座元。昔予與在杭之南屏。朝講暮明。之最熟也。昨見光賁兼惠以處州爐。香片極慚虛辱。詩以寄謝。

寶盜精緻何處來。括蒼所產良可愛。滑潤生光與玉侔。青鑪峙立厭鼎彝。卦文旋轉觀有倫。檀片吐香煙藹藹。粟散王國苦亂離。十年不見通貨賣。江南之物皆價

可什物
外木像

武藏普濟寺所藏



原寸 身長〇八五〇

南朝正平十八年 北朝貞治二年十二月八日

二七四

向中間住。臨機只要閑家具。不將本分爲全提。向上誰能通線路。竹老曾爲物外遊。歸來東海施法雨。天下名山寺院多。何妨任性隨緣住。巨峯衆底且容身。要透玄關參活句。活句活句須參取。好風吹折長松樹。

圓月ノ可
萬壽寺
住スル
ニ疏

〔東海一漚集〕

二 萬壽請物外疏

烏號鉅黍不能自正。正在排撥綠耳。纖離雖曰是良。良由鞭策。況此末流。邪見成弊。賴彼本色。住持力除。視床適虛。象駕宜命。某人在獨愈謹。澄衆固嚴。應物則無作無功。功超物外。臨機則有照有用。用施機先。源流降九重天。澤潤遍一切處。南遊爲久。參於阿叔。宜合玉樹。生謝家庭。階東歸。豈可負於廼翁。正好雲關。呈國師塔樣。既然玄武山下。假設玄要。亦須乾明門中。別立乾坤。祝萬壽爲一人。許三請於四衆。

圓月ノ可
香爐ヲ
贈ラシメ
ルヲ謝ス
ルヲ詩

〔東海一漚集〕

古詩 謝惠香爐并序

物外什公座元。昔予與在杭之南屏。朝講暮明之最熟也。昨見光賁兼惠以處州爐。香片極慚虛辱。詩以寄謝。

寶瓷精緻何處來。括蒼所產良可愛。滑潤生光與玉侔。青鑪峙立厭鼎彝。卦文旋轉觀有倫。檀片吐香煙。藹藹粟散王國苦。亂離十年不見通貨賣。江南之物皆價

可什物
外木像

武藏普濟寺所藏



原寸 身長〇八五〇

可什ノ木
像胎内銘

翔陶器況最難運載藤陰窮僻人不來來者莫非世所廢柴門剝啄異常聞側耳
俄然驚警咳闔窓見之是故人倉皇迎迓衣挖帶未敝寒喧先唉言南屏到眼橫
翠黛決語殷勤留珍貺物意兼重難爲戴木瓜猶足報瓊瑤我此情懷孰可奈

〔物外和尚木像〕

胎内銘
武藏普濟寺所藏

彩色 啓端

造立助緣 芳循

辯翁 宗義

啓範 啓瑞

宗乘 宗順

啓一 啓勝

宗華 宗範

啓圓 啓壽

□盛 性了

宗□ 快翁

塗師 行盛

南朝正平十八年 北朝貞治二年十二月八日

南朝正平十八年 北朝貞治二年十二月八日

二七六

佛師 上總法橋朝榮

幹縁比丘 啓遠

應安三年 庚戌十一月初三 敬誌

〔石室玖禪師語錄〕

像讚 物外和尚

運菴正派、天澤真孫、魁梧虯厚、道韻高尊、依稀大達、髣髴慈恩、福山親董、國師席、武苑新開、權化門、全機無向背、生鐵鑄崑崙、古鳳臺前同參句、七穿八穴破砂盆、

〔建長寺年中諷經并前住記〕

模〇相

十二月初八 大定禪師忌 觀應二年乙卯

〔普濟寺記錄〕

藏〇武

開山大定禪師物外可什大和尚、法臘七十八歲、

貞治二 癸卯 年十二月初八日示寂、至正德二 壬辰 年相當三百五十年、現住顯谷宗揚修法會了、龍室和尚香語、武州多摩郡立川庄玄武山普濟禪刹開祖大定禪師物外和尚者、本寺天源之開祖、大應國師上足、而建長三十七世也、今茲正德二 壬辰 年臘月初八日、丁于三百五十之遠諱、預以十月初八日、普濟塔主比丘顯谷集門派之淨侶、營備香齋、諷經一上、加之命老拙、使舉揚香偈、以代遠

善政ノ贊

大定禪師忌

龍室ノ三
百五十年
遠忌香語

供云爾

三百餘霜物外禪、普光續焰覆人天、昔年東請南詢去、啓迪大方巨福巔、

遠孫老比丘前建長湛龍室焚香敬拜書

〔參考〕

〔新編武藏風土記稿〕

四十村 多摩郡 普濟寺 濟村ノ南ニアリ、玄武山ト號ス、

〔新編武藏風土記稿〕

北七品川 荏原郡 十八 清德寺 除地一町七畝、七步餘、東

〔新編武藏風土記稿〕

河内村 多摩郡 普門寺 除地二百五十六坪、村ノ東寄ニア

ハ、貞治二年八月八日、壽八十二、〇大定禪師 開山トス、禪師、諱ハ、妙、環、樞、翁、ト、號ス、佛國ノ禪師ニ本、嗣法ス、十、下、野、國、ノ、禪、師、人、文、和、請、テ、

南朝正平十八年 北朝貞治二年十二月八日

二七七

清德寺ヲ

普門寺ヲ

〔特別保護建造物并國寶目錄〕國寶指定 大正二年四月二十五日 內務省告示第二十四號

等級	種類	品名	目	所	有	者
丙種	彫刻	木造物外和尚坐像	胎内ニ應安三年十一月ノ銘アリ	東京府下北多摩郡立川村	普濟寺	寺

九日、^甲赤松光範、東寺雜掌ノ訴ニ依リ、同範賴ヲシテ、同寺領攝津垂水莊下司公文職ヲ同寺雜掌ニ沙汰セシム、

〔東寺百合文書〕〇山城 六十三之八十

〔論考〕 赤松判官狀 垂水司公文 雜事

東寺雜掌申垂水庄下司公文職事、訴狀具書案文遣之、子細見狀候、所詮於彼職分者、止半濟給人押妨、令全寺家所務之様、可被致沙汰候也、恐々謹言、

貞治二年 十二月九日

光範 在判

赤松兵庫助殿

〇芥河貞繼、東寺雜掌某ノ、攝津垂水莊下司職ヲ濫訴スルヲ停メラレシコトヲ幕府ニ請フコト、十一月三日ノ條ニ見ユ、

十三日、^戊北黨小野資政、大内弘世ニ屬シ、南軍ト豊前柳城ニ戰フ、

〔萩藩閱録〕七十一 小野貞右衛門

義詮感狀

豊前國柳城凶徒退治事、去年十二月十三日合戰之時、自身被疵之由、大内介弘世所注申也、尤以神妙、彌可抽戰功之狀如件、

貞治三年二月十七日

義詮公 御判

小野彈正左衛門尉殿

〇大内弘世、幕府ニ應ジ、九州探題斯波氏經ヲ援フコト、本年是春ノ條ニ、氏經、宇都宮經景ノ豊前平田宮林ノ戰功ヲ褒スルコト、明年正月十日ノ條ニ見ユ、

十四日、^己義詮、荒河詮賴ニ令シ、石見出羽上下郷地頭職ヲ、君谷祐忠ニ沙汰セシム、

〔萩藩閱録〕四十三 出羽源八

君谷彈正左衛門尉實祐跡輩申石州出羽上下郷地頭職事、退濫妨人等、任去文和貳年四月五日下午文之旨、可沙汰付實祐跡狀如件、

貞治貳年十二月十四日

義詮公 御判

荒河彈正少弼殿

御教書
實祐跡

南朝正平十八年 北朝貞治二年十二月十八日

君谷彈正左衛門尉實祐子息四郎左衛門尉祐忠申當國出羽上下鄉地頭職事任貞治貳年十二月十四日御教書旨領知不可有相違之狀如件

貞治三年七月一日

彈正少弼判

○義詮勳功ノ賞トシテ石見出羽上下鄉地頭職ヲ君谷實祐ニ與フルコト文和二年四月五日ノ條ニ實祐ノ石見出羽城ニ戰死スルコト康安元年九月四日ノ條ニ見ユ

十八日、北朝從五位上大神景朝卒ス、

〔體源抄〕三十五 大神宿禰 笛相傳

景光

景朝一者九年 從上安藝守貞治二十八年死

景經

〔地下家傳〕

十 樂人方郡 山井太神氏

景朝景光 年月日生、敍從五位上任安藝守貞治

二年十二月十八日卒

〔京都御所東山御文庫記錄〕

讓與

大夫將監景經所

八幡宮寺領備中國吉河庄預所職并當家之祕曲等事任故守殿之讓狀管領不可相違之由先而所令讓與也而任先度之讓不可有他妨可致當流之管領者也仍重讓狀如件

貞治貳年十一月十八日

大神景朝判

十九日、寅是ヨリ先、紀伊金剛峯寺領同國名手莊ト、丹生屋ト用水相論ノコトアリ、是日、南朝、東寺長者賴意ニ令シ、金剛峯寺ヲシテ、名手莊用水ヲ管領セシム、

〔高野山文書〕

西塔 寶簡集三十

金剛峯寺申寺領紀伊國名手庄用水事奏聞處國司成敗之趣被聞食畢當知行不可有相違之由可令下知寺家給之旨天氣所候也仍言上如件經清誠恐謹言、

正平十八年十二月十九日

左少辨判

進上 東寺長者僧正御房

南朝正平十八年 北朝貞治二年十二月十九日

東寺長者
法務御教書

南朝正平十八年 北朝貞治二年十二月十九日

二八二

金剛峯寺領紀伊國名手庄用水事、勅裁如此、早任當知行、可被全管領之旨、長者法務前大僧正御房仰所候也、仍執達如件、

正平十八年十二月廿日

法印(花押)

年預阿闍梨御房

追仰

用水事、傳奏六條中納言、奉行職事藏人左少辨候、同可被存知候也、

名手與丹生屋用水相論事、以使者被申之趣、披露了、就其、即被立使節於彼用水在所、被加見知、兩方如元可被落居、早存其旨、可被止發向之儀候、其間事、委細被仰合使者候了、仍執達如件、

正平十八年八月一日

圖書頭貞秀(花押)

金剛峯寺衆徒御中

向後ノ確
執ヲ停ム

名手與丹生屋用水相論事、一昨日一日、被立使節、已被落居候了、就其、兩方へ被成御教書候、此上向後不可有確執之儀候、且此御教書、恐々可被遺惣寺候

也、適御在庄之間、委細被仰候、先無爲落居條、日出候之由所候也、恐々謹言、

正平十八年八月三日

貞秀(花押)

蓮上院法印御房

名手庄與丹生屋用水相論事、度々御奏聞之處、寺家使者重參申入旨候、就其、急速被經御沙汰、勅裁等事、可有御計之趣、被仰出候、早捧事書、以使者可令言上之由、其沙汰候也、仍執達如件、

正平十八年十一月三日

法印仲尊

年預阿闍梨御房

追申

年預澄鑲申狀進覽之、此地事、先日以面謁、委細令啓候了、重以使者申入候、相搆可然樣可得御意候也、

紀州名手庄用水事、寺家重以行澄僧都歎申入候、根本寺務領之上、當知行地

寺家重
テ行澄
以テ愁訴

南朝正平十八年 北朝貞治二年十二月十九日

二八三

(指表) 務御舉狀案 正名手庄八年十二月十五日

南朝正平十八年 北朝貞治二年十二月十九日

二八四

大塔金堂寺用異他候、且又去比任道理、一位大納言加下知候了、重尋御沙汰候者、不便事候、賴意爭可掠由候哉、被下給旨候様、殊可得御意候、恐々謹言、

正平十八

十二月十五日

賴意

六條殿

足利基氏、上杉憲顯ヲシテ、上野國衙職ヲ、中院少將家雜掌良勝ニ交付セシム、

〔京都帝國大學所藏文書〕

中院文書二

中院少將家雜掌良勝申上野國々衙職事、任去康安元年九月二日給旨并同年十月三日御施行旨、可被沙汰付被雜掌之狀如件、

貞治二年十二月十九日

(基氏)
花押

上相民部大輔入道殿

御教書

上野國々衙職事、任御教書之旨、可沙汰付中院小將家雜掌之狀如件、

貞治三年四月七日

(良勝)
沙彌(花押)

長屋左衛門入道殿

施行狀

○北朝、中院通冬ニ、上野ノ知行ヲ安堵セシムルコト、康安元年九月二日ノ條ニ、通冬ノ薨ズルコト、本年閏正月二十四日ノ條ニ、中院通冬ニ、上野ノ知行ヲ安堵セシムルコト、明年十二月二十四日ノ條ニ見ユ、

二十二日、足利基氏、武藏安堵郷及ビ宮内郷ノ地ヲ、安堵泰規ニ還補ス、
〔安堵文書〕
武藏國賀美郡内安堵郷并兒玉郡宮内郷事、如元所令還補也、者守先例、可致沙汰之狀如件、

貞治二年十二月廿二日

(基氏)
花押

安堵信濃入道殿

○足利氏滿、安堵信濃入道聖賀跡半分ヲ、安堵憲光ニ還補スルコト、永徳元年十一月二十二日ノ條ニ見ユ、

二十四日、幕府、東寺雜掌賴憲ノ訴ニ依リ、赤松則祐ヲシテ、東寺領備前福岡莊内吉井村領家ノ年貢ヲ辨濟セシム、

〔東寺文書〕

射丸之十
山城

東寺雜掌賴憲申備前國福岡庄内吉井村領家年貢事、訴狀如此、子細見狀、不

南朝正平十八年 北朝貞治二年十二月二十二日 二十四日

二八五

南朝正平十八年 北朝貞治二年十二月二十五日

二八六

日可被辨申之狀、依仰執達如件、

貞治二年十二月廿四日

〔近將監(花押)〕

赤松律師御房

○幕府、則祐ヲシテ、小國九郎ノ、福岡莊内吉井村領家年貢ヲ押領スルヲ停メ、究濟ヲ遂ゲシムルコト、貞治五年十二月三日ノ條ニ見ユ、

二十五日、庚申、北朝、皇大神宮ニ、神寶使ヲ發遣ス、

〔迎陽記〕

一 貞治二年十二月廿五日、内宮神寶奉遣也、行事辨六位藏人等

祇候之、行列奉行史生職視也、辨代實直朝臣遲參之間、先被渡神宮等、其後辨代參入、渡門前云々、主上御出長橋上也、西面北唐門前被渡之、賀茂祭以下北

陣儀此定也、行列同康永度、

〔續史愚抄〕

後光嚴院中

十二月十五日、庚戌、略、中今日内宮神寶發遣、行事

辨等參仕、主上於長橋有御覽、次西面唐門前渡之、史等供奉之、迎陽記、追秘抄、

北朝策試、

〔師守記〕

○三十三帝國圖書館本

十二月六日、關ク、ナシ、

獻上

長橋上ニ
出御

十五日ト
ノ説

宣旨

宣旨

從二位菅原朝臣(前長)申請、殊蒙天恩、因准先例、次男文章生正六位上、熙長奉方略試事、

仰、依請、

右宣旨、早可被下知之狀如件、

十二月廿五日

權中納言忠光卿 判奉

大外記局

國長ノ請
文

請文奥狭之間、續裏紙、書宣旨了、(正脱カ)請、特天慈、因准先例、次男文章生六位上

熙長奉方略試狀

右謹考故實、依文學勞、奉方略試者、皇家之舊躅、我道之道規也、爰國長積儒勞、今臨八旬之齡、戴神德、今昇一門之長、月卿三人之内、舉者、明王無偏之殊恩也、况雖有兩男之繼、儒業、於彼一人者、要目解被優、珥蟬之職、忽開射鵠之策、思其舉奏、何稱非據、加之熙長文詞、是捕雖慕、食荷吞鳥之夢、學業無偽、偏勵聚雪、拾螢之功、望請天恩、因准先例、以熙長舉件試者、早繼累家之遺塵、彌

南朝正平十八年 北朝貞治二年十二月二十五日

二八七

南朝正平十八年 北朝貞治二年十二月二十五日

二八八

誇仁澤之洪化矣、國長誠惶誠恐謹言、

貞治二年九月十六日

從二位菅原朝臣國長

廿七日、壬戌、略○中

今日、右京大夫長衡朝臣進狀、是舍弟熙長方略宣旨付進之、付使可成賜宣旨云々、則被成遣宣旨了、略○中

先日委細之御報爲悅候、歲暮責伏候、於今者、明春早々得參會、可述心緒候、抑熙長方略事、新藤中納言奉書進之候、則御下知候者、悅存候、宣旨内々付廻、申請候者、可爲本望候、歲末御計會雖察申候、付廻相構、可申請候也、事々期參會候、恐々謹言、

十二月廿六日

長衡

師茂書狀

悅承了、如仰歲末責伏候之間、計會□御察□、何様明春早々可遂慶謁候、抑彼方略宣旨賜預了、當局宣旨付御使成進候、他事期後信候、恐々謹言、

十二月廿七日

師茂

宣旨

權中納言從三位藤原朝臣忠光宣奉勅、件人宜仰式部省、令奉方略試者、
同年十二月廿七日 大炊頭兼大外記下總守中原朝臣師茂 奉

師茂請書

謹請

從二位菅原朝臣申請殊蒙天恩、因准先例、次男文章生正六位上熙長、奉方略試事、

右宣旨依請之由、早可令下知之狀、謹所請如件、師茂恐惶謹言、

貞治二年十二月廿七日

大外記中原師茂 使

義詮、曼殊院僧正慈昭二、北野社別當職ヲ安堵セシム、

〔曼殊院文書〕○一山城

〔附題〕
寶篋院殿

北野社別當職事先年重々有沙汰、任相傳、可被返付之由、已經奏聞候上者、向後更不可及沙汰候、恐々謹言、

十二月廿五日

義詮〔花押〕

竹内僧正御房

南朝正平十八年 北朝貞治二年十二月二十五日

二八九

御教書

南朝正平十八年 北朝貞治二年十二月二十五日

二九〇

〔曼殊院文書〕〇山城

〔別當職〕梶井殿御競望之時一紙竹内門跡雜掌書狀 文明九年

竹内門跡雜掌謹言上

右子細者北野別當職之事天慶五年當社垂迹初被任是算法橋於別當以來致當門跡廿六代五百餘年相傳無相違者也綸旨院宣官符并公方樣代々御書明鏡也爰梶井門跡建武三年天下動亂之刻就被申掠一旦雖被任彼職爲當門跡披子細申問同五年等持院殿樣依御執奏被成下還補院宣〇曆應元十一年日ノ其後貞治二年寶篋院殿樣御書永和四年鹿園院殿樣御書仁雖有條參照ノ其後貞治二年寶篋院殿樣御書永和四年鹿園院殿樣御書仁雖有望申輩被載不可及向後沙汰之旨畢〇永和四年六月條參照然而去文安年中梶井門跡御競望之時雖被不預御尋成付當御所樣被披代々之支證於聞食則以御内書被返付之處今度又被申入禁裏樣江之風聞在之爲事實者不便之次第也所詮任代々支證旨嚴重爲預御成敗粗言上如件

文明九年八月 日

〇慈昭梶井宮尊胤法親王ノ同社別當職ヲ掠領スルヲ停メテ還補セラレシコトヲ幕府ニ訴フルコト延文二年閏七月是月ノ條ニ北朝慈

五百餘年相傳

昭ヲ北野社別當ニ還補スルコト延文四年九月九日ノ條ニ見ユ

二十六日辛酉北朝小除目

〔公卿補任〕三十四

權中納言從二位源親光中院五十二月廿六日辭退

權中納言正三位藤宗重中御門六十二月廿六日辭退

前權中納言正三位藤俊冬坊冠十二月廿六日還任

權中納言從三位藤宗實大炊御門十二月廿六日任元左中將

〔師守記〕三十三

〇帝國圖書館本

十二月廿六日辛酉

〇中今夕酉刻被行小除目

上卿權中納言藤原時光卿參議

〔右〕

少辨藤原忠光

〔右〕藏人書召名奉行

職事藏人〔右〕藤原嗣房少外記中原康隆少内記等參陣被除見任次將十

餘人注折紙於陣被下外記了除目了後被下之云々次神宮神寶奉遣内文請

印上卿以下同前少納言不參之間康隆勤代中務輔不參不及沙汰將監代被

用陣官人次有結政請印上卿時光卿少外記康隆等參入納言上卿邂逅歟少

納言不參史生代行益

廿七日壬戌天晴今朝已一點少外記康隆去夜小除目召名并被除見任次將

南朝正平十八年 北朝貞治二年十二月二十六日

二九一

上卿日光野柳原忠光召名ヲ書ス

内文請印

結政請印

師茂除目
小折紙ヲ
日野時光
ニ求ム

南朝正平十八年 北朝貞治二年十二月二十六日

二九二

師茂除目
任人折紙
ヲ内々進
光ニ進ズ

折帑等進之、而小折紙不見之間、被尋使者之處、上卿被取之云々、仍則被遣取之間、付使者賜之了、而左近少志大神景俊樂人、之由、被載小折帑、左右近少志不打任之間、被伺申殿下之處、無御才學、以職事可伺申之由、有御返事之間、再往可遅々之間、先載左衛門少志之由、被賦聞書了、其赴赴付藤黃門時光卿、被伺申之處、先被直付之條、無子細候歟、以便宜可申入云々、
今日武家聞書一通、以左近太郎被付町野遠江前司□許、又私分一通同被副遣、返事云、慥賜候了、則可持參云々、其後所々支配如例、小折帑被進上卿了、
略

夜前小除目任人折帑一枚謹進上候、須差遣六位外記候之處、與奪候間、恐遅々内々所進上候也、師茂恐惶謹言、

十二月廿七日

大外記中原師茂上

進上 人々御中

折紙也、於陣被下外記康隆、此輩依不仕也云々、

不仕ニ依
リテ現任
ヲ除ク

左近中將藤原公世

同 基秀

同行輔

同 成清

同 家綱

同 雅冬

少將藤原忠隆

同 藤輔

同 宗相

同 頼時

右近中將藤原兼藤

同 實材

同 宗仲

少將藤原經清

同 盛雅

以上宜除見任、

被申殿下狀、

師茂ノ書
狀

昨日被行小除目候之間、參陣六位ぞ、いま□送觸候而、小折帑、左近少志大神景俊樂人、□載られ候、不打任存候、いりやう、御沙汰候けるやらん、御伺候てうけ給候へく候、除書を仰候て申上候、いそきく、お母さられ候へく候、又近衛次將多可除之由、被宣下候、被定員數候て、かやうに御沙汰候哉、云治定員數之御沙汰之次第、委可被仰下候、弘安永仁、被定候よし、被仰下候し、子細なく候やらん、いま、不勘出候、いそきく、御伺候て可被仰下候、あかりしこ、

南朝正平十八年 北朝貞治二年十二月二十六日

二九三

南朝正平十八年 北朝貞治二年十二月二十六日

二九四

二條良基
ノ返狀

御返事

大神景俊事、なにと候やらん、きゝいまあまりに御物恐候程こ、うろゝ
ひ申され候のす候、それよと職事まつけて、きとく伺申され候へく候、
又次將事の、不仕の輩を現任をと、められて候、員數のいまさささまり
候のす候、まけ一向不仕の輩はうをのきりれさるのうと、別候て
除名罪科のふんまての候のす候、現任をと、められさるのうと、候よ
しおのさ事候、補任歴名つうのされ候、

師茂良基
返狀ノ意
申ス時ノ
ニ

昨日小除目召名參陣、六位康隆只今送賜候之間、欲支配候之處、左近少志
大神景俊樂人之由、被載小折帟候、不審存候、左右近少志不打任候間、仰武
家除書申入執柄候之處、付職事、可伺申之由、雖被仰下候、可及遅々候之間、
先載左衛門少志之由、令支配候了、爲存知、急速有御伺、可被仰下候、師茂恐
惶謹言、

十二月廿七日

師茂

人々御中

時光左近
將監ノコ
トヲ良基
ニ申ス

左近將監事、被思食殘候歟、被直付之條、無相違候哉、奉之趣可伺申候、恐々
謹言、

十二月廿七日

時光

〔續史愚抄〕

二十五年
後光嚴院中

十二月廿六日、辛酉、有小除目、或記、公卿補任、

幕府、伊勢石上寺ノ、歲末祈禱卷數ヲ贈レルニ答フ、

〔石上寺文書〕

伊勢

伊勢國石上寺恒例歲末卷數令披露候了、仍執達如件、

貞治二年十二月廿六日

二條實行元九
中務少輔花押

是英傑翁相模淨智寺住持ト爲リ、是日、入寺ス、

〔傑翁錄〕

於貞治二年臘月二十六日入院、
山門乾坤之内、宇宙之間、有寶山在、喝云、入作來看、
佛殿、全佛全心、全心全佛、未審向外拜什麼物、便禮拜、
靈祠、窈兮冥兮、其中有精、四時自行、

南朝正平十八年 北朝貞治二年十二月二十六日

二九五

南朝正平十八年 北朝貞治二年十二月二十六日

二九六

祖堂一月不降百水不升西天此土的々相承

據室拈云祖翁爐鞴今日重開百鍊精金再須入來卓一

拈帖牽犁拽把從是得成佛作祖亦依佗舉帖云修利修利娑婆訶

拈山門疏褒文賤句截鐵斬釘燈籠露柱諦聽諦聽

拈諸山疏京城南北山雲東西澗水相應相求同聲同氣

拈江湖疏京城江湖歲既暮將謂無交態度疏云眼々自相對

法座龍舞鳳翔還它諸老成山僧步々只要信脚行

陞座拈香祝

聖罷遂跌座云第一義諦一槌擊碎大地山河許多光彩莫有添光彩底麼問答不錄

乃云廼祖創草阿練若淨智莊嚴大道場四圍岩石側金壁一樣松杉凌雪霜少林妙訣顯露了世尊密語不覆藏到者裏無分接可祖豈堪付飲光雖然恁麼今朝既入這保社未免祝皇帝萬歲群臣千秋拈拄杖卓一下云鸞鷲麒麟共是瑞旃檀蔭

荀一般香謝詞不錄

復舉達磨大師偈曰吾本來茲土傳法救迷情一華開五葉結果自然成師拈云遠孫是英大和年遠事而今重舉揚舉拂子云這箇長鬚翁碧眼胡僧孫

當晚小參 銀山鐵壁鐵壁銀山難透過處處透過來看問答不錄廼云方外甘閑送殘年飢飧渴飲任運過今夜出來呈醜拙笑倒同行木上座拈拄杖云木上座々々皈隱有時出遊隨宜有時則且置隨宜底備還識麼卓拄杖云阿呵々好大哥復舉德山小參不答話無角鐵牛眠少室趙州小參要答話無言童子念摩訶今夜有人問不答話即是要答話即是一只對它道新來晚到不知井竈

當晚小參

山門疏

圓月ノ諸山疏

山門疏

獨貴敦厚故賤浮虛爨韃祥烟凝戾丹臺靜室葳蕤羽蓋咸臨金地法筵光華顯明玩弄翰墨而作佛事儀標卓闊張磔網羅而納群雄收將々之威行善々之道去縷斐之牙角鈍姦險之鋒芒舉以為衆望所皈此所以多士之附平章濟北玄要旨唱出曾子金石聲像法之間生衆聖之後覺宜乎鸞鷲鳴彼岐下亦復梧桐生彼朝陽將拈□之翁稟承一香專祈皇帝聖壽萬歲

〔東海一漚集〕

傑翁西堂住淨智諸山疏

國步寬饒禮樂刑政之製行乎正佛門崇敬禪定智慧之修勤乎精允矣歸依宗猷宜哉選舉本色某人傳衣表信嗣香答恩靈松雅韻繼奏於松源佛海餘波及漲於青海憶昔三應匡叔玉樹芝蘭茂植謝家堦庭復次一默明翁琅函卷軸尋

南朝正平十八年 北朝貞治二年十二月二十六日

二九七

南朝正平十八年 北朝貞治二年十二月二十九日

二九八

釋竺土墳典、說法宏博、雷音殷々、度生衆多、蠡羽誦々、諸隣皆埃分光、一鞭快著、昂駕、

○是英、相模大慶寺住持トナルコト、延文二年八月七日ノ條ニ見ユ、二十九日、甲子幕府、北朝ニ貢馬ヲ獻ス、

〔師守記〕三十三 ○帝國圖書館本 十二月廿九日、甲子天晴、申剋雪分散、○中今日

自武家進貢馬云々、

足利直冬、吉川經秋ヲ土佐守護職ニ補ス、

〔吉川文書〕

土左國守護職事、早守先例、可致其沙汰狀如件、

正平十八年十二月廿九日 (花押)

吉川駿河守殿

○直冬、吉川經秋ヲ招クコト、八月三日ノ條ニ見ユ、

足利基氏、上杉憲顯ヲシテ、上野滿行寺領同國淵名莊内花香塚實相院方ノ地ヲ同寺賴印ニ交付セシム、

〔相州文書〕十八 鶴岡八幡宮供僧莊殿院所藏

上野國滿行寺執行中納言大僧都賴印申同國淵名莊内花香塚實相院方事、早任安堵下文、可被沙汰付下地於寺家之狀如件、

貞治二年十二月廿九日 (花押)

上相民部大輔入道殿

上野國淵名莊内花香塚實相院方事、任御施行旨、沙汰付下地於中納言大僧都賴印代候畢、仍渡狀如件、

貞治三年正月十六日 教阿(花押)

南朝正平十八年 北朝貞治二年十二月二十九日

二九九

南朝正平十八年 北朝貞治二年是冬

三〇〇

是冬、靈見海性山城三聖寺住持卜爲ル、

〔性海和尚遺稿〕 性海和尚行實

略○上 貞治二年冬、征夷大將軍義詮公、召以三聖、雖使正副二官使請、師謝病不應也、重有敦請命、作休休歌、以同辭焉、大樹和尚感于歌之風韻、嚴旨汲汲泊乎三回、於此弗克免、遂詣洛直登三聖、一香酬虎關和尚之法乳也、大樹相公義滿乘釣軸之初、命董東福、叢規嚴肅、衲子勇奮、又奉聖勅、補天龍之席者二會、次遷南禪、衆心所伏、帝心所簡、前後領南禪之席者凡三會矣、三聖海藏劫灰之後、殿堂門廡不數年復本者、皆師之功也、

〔東海一瀛別集〕 疏 三聖請見性海疏

行遵古道、則躡躅也得其人、言□事情、則騰說也行茲世、馴致言行相顧、庶幾敦學共成、若彼世俗、猶然况吾祖風、遠振某人、信州間產、海藏克家、振錫南方、行脚大唐國裡、無禪師、泛杯東海歸來、撒手到家、久不識、丹山豈可久淹、五采華洛正宜上祝一人、臨鴨水想鴛鴦湖、揮龜毛施醍醐味、

義詮ノ請ニ依ル
靈見休々歌ヲ作リテ入山ヲ固辭ス

圓月ノ賀疏

是歲、南朝權中納言日野邦光卒ス、
〔系圖纂要〕 日野 藤氏十七

資朝

邦光 候南山、

正平九年四十一、三木辨人正四上、十二一從三、十年二一左兵衛督、十五年權中納言、十八年薨、

資茂 元中四年十二、三木、正四上、左大辨如元、六年從三、

〔尊卑分脈〕 藤原氏 内麿孫 日野

資朝

邦光 候南朝、

資茂 東南山、永德元五九滅、六十二、爲祖父俊光卿子、

〔日野一流系圖〕

資朝

邦光 童名阿新丸、

資茂 候南山、

〔西宮記〕 〇七 候爵前田利爲氏所藏

南朝正平十八年 北朝貞治二年是歲

三〇一

世系

童名阿新丸

近衛經忠
本ヲ以テ
西宮記ヲ
校定加點
ス

南朝正平十八年 北朝貞治二年是歲

三〇二

建武元年十一月八日、以近衛前右大臣殿本校定加點書寫書入了、

〔西宮記〕

八 候爵前田利爲氏所藏

比校了 邦光

○邦光、石清水八幡宮臨時祭使トナルコト、延元元年三月十九日ノ條ニ、新田義氏ト共ニ、石見圓嶽ニ北黨上野賴兼ト戰ヒ、工藤三郎ヲ豊田城ニ救フコト、興國元年八月十八日ノ條ニ、賴兼ト石見稻積城ニ戰フコト、同二年二月十八日ノ條ニ、南朝、惠良惟澄ニ鎮西ノ事ヲ籌策セシメントシ、邦光、勅使トナルコト、正平五年十月二十一日ノ條ニ、二條師基等ト、京都ヲ攻ムルコト、正平十六年十二月八日ノ條ニ見ユ、

北朝、京官除目ヲ停ム、

〔敍位除目執筆抄〕 京官除目停止、依無執筆也

北朝從三位難波宗有出家ス、

〔公卿補任〕 三十 非參議從三位藤宗有 月日出家、

〔公卿補任〕 三十 非參議從三位藤宗有 父故正四位下行刑部卿宗繼、三男、母、嘉元元二十七日從五下、同二十七侍從、正和五二廿九辭侍從、同十二

官歴

執筆ナキ
ニ依ル

世系

宗繼

宗有 左中將、從三位、母

宗國 中將、母

宗成 右少將、從五下、母

邦民、元及ビ高麗ヲ侵ス、

〔元史類編〕 十帝 天王八 至正二十三年、癸卯、八月、丁酉朔、倭寇蓬州、守將劉

暹擊走之、

〔高麗史〕 四十三 恭愍王三 癸卯十二年三月乙酉、倭國歸我、被擄人三十餘口、

夏四月己未、倭船二百十三艘泊喬桐、京城戒嚴、以安遇慶爲倭賊防禦使、金鏞

伏誅、倭寇守安縣、東國通鑑 異事ナシ

高麗ノ擄
人三十口
ヲ返ス
邦船二百
十三艘喬
桐ニ泊ス

邦民蓬州
ヲ侵ス

南朝正平十八年 北朝貞治二年是

三〇三

年未雜載

曆、天文、氣象、災異、

〔後愚昧記〕三

貞治二年具注曆日

癸卯歲干水支水
納音是金 凡三百八十四日

大歲在癸卯名單闕之歲為一年
君不可將兵扭向

大將軍在子、 大陰在丑、

歲德在中宮代合在癸戌癸上
取土及宜修造

歲在子、 歲破在酉、

歲致在戌、

黃幡在未、 豹尾在丑、

右件大歲已下、其地不可穿鑿動治、因有頽壞事、須修營者、其日與

歲德月德、歲德合、月德合、天恩、天赦、母倉并者、修營無妨、

歲次大火

右件歲次所在其國有福、不可將兵扭向、

正月大 閏正月小 二月大 三月小 四月小 五月大 六月小

七月小 八月大 九月大 十月小 十一月大 十二月大

正月大建土府在丑、 天道南行、 天德在丁、 月致在丑、 用時庚壬、

寅寅 月德在丙合在辛、 月空在壬、 三鏡乙辛乾
坤巽艮

時正

〔師守記〕

○三十二 帝國圖書館本

二月六日、丙午、天陰、已斜以後雨下、未剋聊休、申

剋以後降雨、終夜甚雨、○下

今日時正日中也、

廿八日、戊辰、天晴、○下

自今日入土用、

〔師守記〕

○三十一 帝國圖書館本

閏正月廿八日、己亥、天晴、○中今夜戌剋、天變、自

戌亥指辰已飛、

〔建長寺年代記〕

○坤 相模

癸卯二、八月廿五夜、大星雙出、九月十五夜、二星合、

〔師守記〕

○三十二 帝國圖書館本

二月十日、庚戌、天陰、雨降、未剋未申、方雷鳴、兩三

度聞、申剋以後屬晴、終日風吹、入夜風不絕、

〔師守記〕

○三十一 帝國圖書館本

閏正月十四日、乙酉、天晴、朝間聊小雨下則止、○下

地震

今日申剋地震、又酉剋地震、

十五日、丙戌、天晴、申剋以後天陰、雨降、○下

入夜戌始地震、同剋又地震云々、

南朝正平十八年 北朝貞治二年雜載

天變

土用

大星雙出

雷雨

〔師守記〕

三十二 帝國圖書館本
二月四日甲辰天霽今曉寅剋大地震

十日庚戌天陰略下
(備考) 入夜丑剋地震

十八日戊午天陰未斜以後降雨終夜雨下時々休略中
入夜戌剋大地震無程又小地震

〔東寺執行日記〕

一 七月十四日天晴大地震

八月四日卯剋大地震

十一月九日酉終大地震越常篇矣

〔師守記〕

三十一 帝國圖書館本

閏正月廿九日庚子天晴略中
今日未剋許北小路町兵部卿邦世親王御在所并白雲寺燒亡失火歟勸修寺一品經顯第近々

定仰天歟予可訪問之處風氣未散之間無其儀家君曾所勞雖滅氣之躰無力之間無其儀者也火自北小路南頰在家出來

〔師守記〕

三十二 帝國圖書館本

二月二日辛丑天陰略中
今日未始許川崎西向

燒亡無程靜謐川崎西門爲餘焰燒亡

廿七日丁卯天晴未剋以後風吹申斜休申時細雨下則止今日酉剋許山科邊

火事 邦世親王 御在所并 白雲寺 燒失

川崎西門 燒失

日野口小 野邊燒亡 死傷多シ

炎旱ノ兆 阿波饑饉 妙葩饉粥 ヲ出シテ 貧人ヲ救

京都大風 ノ爲メ住 屋散失 東寺鎮守 八幡宮等 現ニ羽蟻 出ス

占文案

燒亡後開自山科寄醍醐之間日野口小野邊燒之云々一昨日自醍醐寄山科兩方多損命被疵云々

〔後愚昧記〕

三 六月十九日丁巳入夜長并北方如遠所燒亡火光不知何故或說炎旱之瑞云々略下

〔智覺普明國師年譜〕

貞治癸卯二月赴阿州先於補陀寺表開堂于時國中大饑途多餓孳師備饘粥施貧人乞者連日矣太守以下官吏隨喜而效之依此蕪

息不寡略下

〔東寺執行日記〕

一 十一月十日今夜終夜大風多住屋散失越常篇矣

〔東寺執行日記〕

一 三月十八日今日未時於鎮守并寺(八幡宮)內々家并欸冬田在家禪舜住屋等羽蟻出現

占文案

今月十八日未時八幡宮社頭并公人住屋邊令見驚給事火事之兆并就文書田地違亂又病事歟其期卅日內及十月十一月十二月明年正月節中并甲乙日矣恠異之慎不輕兼而殊可被致祈謝乎

三月十九日

定春

南朝正平十八年 北朝貞治二年雜載

三〇八

進寺務注進案
去廿二日未時、自東寺鎮守八幡宮巽角、羽蟻出現、指西北如煙飛覆畢、

貞治二年三月廿四日

權律師定伊
法印權大僧都深源

去廿二日、於鎮守社頭羽蟻出現事、捧注進候、可然之様可令披露給候、恐々
謹言、

三月廿四日

權律師定伊

謹上 別當大僧都御房

注進日付及遅々之間、

〔春日若宮神殿守記〕

貞治二年 六月十九日、當山木カレタルヲ、三方神人
シルス、北郷方五百廿六本、南郷方四百廿七本、若宮方三百七十本、
廿三本、カ□ノ木ノカレタル御祈禱有、同六月廿一日ヨリハシマル、社司ウ
チムト七ケ日夜サムロヲ、三方神人同七ケ日夜サムロヲ、コノアイタ御ア
イノ一万度、水屋ノ一万度ヲスル、三方拜殿中、同廿一日ヨリ七ケ日、御八乙
女ヲタテ申テ、御イノリヲスル、ハテノ日申アケヲスル、用度百文、沙汰人清
有申、

〔大乘院日記目錄〕 貞治二年□月□日、山木枯稿、
神社、

〔塔寺八幡宮長帳〕

○岩代

貞治二年 卯正月八日開白、同十日結願、

初百内 新衆炭了、 文和加丸

二百内 新衆炭了、 久松丸

三百内 祐尊

四百内 慶海

五百内 祐圓

六百内 式部公

仁王講

十部百座 初來年順炭可有、又 賴俊

十部百座 後來年順炭可有、又 祐慶

十部百座 俊覺

五部大乘經 助公

南朝正平十八年 北朝貞治二年雜載

三〇九

寺僧分了圓 了賢 肥前 久松丸

〔石清水八幡宮略補任〕別當 興清檢校 貞治二正十一任之、

〔藤波文書〕伊勢

興清石清水八幡宮別當ニ任セラル

〔志〕摩國答志郡伊雜神戶内築地御園ノ

□志國賜永代讓狀畢、而於田島所當三節公事物□志分一者、爲同心合力沙

正檢校節供

汰讓與于權禰宜行重、神主□志分之貳者、云田島所當公事物、云正檢校節供、

□志房繼與明伊、可令中分知行也、次至預所定使者、□志司可令補之、雖爲一

事、相互不可令違此旨、但三ヶ^年□志不成熟沙汰者、可奉返避狀也、仍爲後代契

狀、

貞治二年二月一日

禰宜房繼花押

〔師守記〕

三十二 帝國圖書館本

二月十七日、丁巳、天陰、申剋細雨下、入夜亥剋以

後雨休、中今夕長綱卿返賜袍、被停止宴穩座之間、不入仍返進候、來廿五日

聖廟御忌八講爲行香、片時大切恩借候哉云々、今日不立御要之條、無念候、來

廿五日事、可隨召候之由答了、下

廿五日、乙丑、天晴、中今朝予物詣、以前大藏卿長綱卿借用予袍之間、付使遣

北野八講

覺一檢校等ノ平家アリ

之、聖廟御忌日八講行香新云々、存敬神借遣者也、及晚返賜之、

今朝家君密參北野社給、予同道申之、音博士師興、宗左衛門入道賴惠、和泉左

衛門尉國尙、大炊充國隆等被召具之、覺一檢校并弟子行一明一等、有平家、社

僧座、北南面著座、略

〔白山宮莊嚴講中舊錄〕貞治貳年四月ノ祭禮ノ後宴ノ猿樂例年ハ彼岸所

白山宮祭禮

ノ前ナリシヲ、大講堂ノ前ヘウツサル、

貞治貳年卯癸四月廿五日勸進、于時二和尚惠、佛眼坊同宿其日ノ講師詮運

運玉泉坊、眞講説ノ寢中、御供ノ上膳崩并三所ノ御菓子共ニ崩レタリ、滿座悉

作不思議ノ想、先達云、遠檢先蹤、可有一衆起事之時、如此有奇瑞、或講師、或勸

進、或當坊奇恠也、所詮嚴重ノ可有祈禱云々、仍翼念日御躰奉入一和尚璋運坊、

秀等覺坊、琳眞弟也、於寶前、八講千反陀羅尼行道卅三卷、觀音經、末先達兩三輩講衆悉

致除災與樂精祈畢、然而五月廿一日晚景、佛眼坊中間又次郎男、自里中登山、

過萩嶋之時、金釵宮社官河口又次郎河狩之後、酒宴醉狂、於路次、行遇彼中間

男、無端致惡口之間、既ニ及珍事、本坊聞此由、爲相助、同宿已下帶甲冑、宮尻坂

口令發向之處、境節勝重坊連海、當講衆先達也、自富樫被登山之刻、見此事、無相違被

講衆等除災與樂精祈ヲ致ス

講說
諸衆
鈍色
著

鈍色ノ
立政僧
都ノ寄
進者

和睦畢清案此事可爲兩寺超事之處、不思儀平定畢、誠和光同塵利生揭焉、可
有此超事、兼示玉ヒケルニヤ、又講衆等抽無二丹誠、依致精祈決定應受ノ業
ヲモ轉シ玉ヒケルニヤト、不思儀也、嚴重也、彌可奉仰信、深可奉渴仰、

貞治貳年卯六月廿五日講說講衆悉著新鈍色白裳參勤

一和尙璋運長吏坊同宿 二和尙惠蒞佛眼花坊同宿

三々々豪詮尊性坊真弟 四和尙良禪號長吏坊同宿

五々々光什伊平坊同宿 六々々能成泉公坊同宿

七々々豪俊讚性坊真弟 八々々詮運玉泉坊真弟

九々々尊祐長吏坊同宿

爲令知本山法式、自昔初入問講三ヶ月間、雖著續裝束、親講衆悉著鈍色事、是
始也、所詮料足、先院主立政僧都依被寄進也、

一同年十二月戒者六人被舉之、講衆既已滿也、六人戒者、

林成號泉坊同宿 勝尊號長吏坊同宿

尊雅號光學坊同宿 英運號尊性房真弟

承遍號性寶坊真弟 光善號知足院同宿本地

已上六人也、此年堂中唯一人被舉之、元觀勝緣房同宿、此仁也、堂僧今一人未
滿也、同貞治三年修正、已上十二人勤之、此外今一人堂僧、依爲境節觸穢、不
勤之、仍十二人也、于時堂僧上執事真如坊權律師靜秀、下執事知足院同宿
卿公增雅、

于時講衆一和尙定圓坊阿闍梨璋運、等覺坊真弟、長吏坊同宿也、

〔柳原家記錄〕

七十七
仲光卿記 勅裁口宣

貞治二年五月廿六日 宣旨

從五位下鴨縣主祐前

宜爲三所社權禰宜、

藏人右少辨藤原仲光 奉

口宣一帛獻之、早可令下知給之狀如件、

五月廿五日

右少辨仲光

進上 藤中納言殿

〔中臣社司補任〕

和○大 權預補任次第

北朝
主所
禰權
禰權
禰權
禰權

春日社權
預祐岡祐
經下交替

同祐成祐
爲下交代

春日社頭
ノ觸穢

轉書會勅
使

南朝正平十八年 北朝貞治二年雜載

三一四

氏人延茂二男
延隆 康安二年九月十四日、以祐岡職立替畢、貞治二年七月、祐經還補間、以

祐岡職還補

祐經 貞治二年卯七月五日還補、披露十日也、

加任權預補任次第

祐爲 貞治二年卯九月四日還補、祐成解良殿良御代、

〔古今最要抄〕 六 著到事

一社頭觸穢之時、雖奉止御供、面々令參社、御祈番并社司氏人本新著到付之、
貞和以下度々例也、貞治二七廿六例有之、

〔古今最要抄〕 七 南曹辨御迎送人夫傳馬以下事

一南曹辨殿爲傳害會勅使人夫傳馬不進之、動被仰出事在之、每度申子細不
進上候也、
略 中

貞治二年 癸卯 十二月九日、南曹御狀到來、來十二日可有御參社、人夫傳
馬可進之由、被仰下之旨、召進之處、爲傳害會勅使、御下向之由、御下著以
後存知之由、仍御上洛人夫傳馬并雜事等事、度々雖被仰出、申子細不進
也、

鶴岡八幡
宮供僧補
任

大神宮御
領

〔鶴岡八幡宮寺供僧次第〕 上 一南藏坊

寺 良祐 介阿闍梨、律 貞治二年八月十九日、仲玄法印補任、

〔輯古帖〕 〇十二 伊勢

伊勢大神宮領壹瀨御蘭鄉內之事

四至 東ハ限奈外瀨橫峰、

西ハ高山神之久岐之佐、ハタ、

南ハ限志摩根、

北ハ限峰、東ハシカラタキマ山、

カゲ山ノカキルナリ、
カキル也、ホリキリマテ、
ヒカウソクロイシマテ、

貞治貳年八月廿八日

六郷之老若 一之瀨谷川上村植村十右衛門藏

〔東寺執行日記〕 一 正月一日、略 中 同夜惣禮如恆例、每事珍重々々、幸甚々々

々、祝著無極者也、

閏正月一日、雨降、每事珍重々々、幸甚々々矣、

南朝正平十八年 北朝貞治二年雜載

三一五

東寺八幡
宮惣禮

神樂用途

恒例節供

男山社參

鎮守八幡宮夜燒

十七日、此事更不存知之由、令申訖、歸寺之時、相尋宮仕之處、令露顯訖、仍自今月、寺家直請取之、任恆例、三分之一分三百卅文、令下行御子方、次爲御供、三百文御殿御分一前、下行宮仕方了、於彼御供者、奉供之後、於御前分者、奉行岩山方先々遣之由、宮仕等令申之間、可然之由、被仰含了、至今一前者、可被召寺家之條、雖爲先規、以別儀、被出宮仕等申了、相殘三百余、新足止寺家了、

三月一日、天晴、御神樂用途請取之、如去月支配之了、每事珍重々々、

三日、天晴、恒例節供如常矣、

四日、同、男山社參矣、

四月一日、天晴、御神樂用途請取之、支配如例、每事珍重々々、

三日、雨降、中略、

鎮守八幡宮夜燒間事、宮仕等申狀如此、子細見狀候歟、忿速事行之様、可得御意候、但去年先執行之時、可令執申之由、宮仕等雖望申、依有存旨歟、不執申歟、仍新付進衆中候歟、凡此事違先規之上、非所存候、中綱職掌等事、就是非爲執行令執申、爲宗家御成敗、往古不易事候歟、所詮於身者、不存異儀之上者、速可被返遣正月、今月兩度衆中舉狀哉之由、同得御意、可令申沙汰給

候、恐々謹言、

四月十日

權律師定伊

謹上 別當大僧都御房

五月一日、天晴、神樂新足如先々支配了、每事珍重々々、○下

五日、節供如恆例、每事珍重々々、

六月、今月八幡宮神樂料足無沙汰、追猶可尋決之、

七月一日、每事祝著、珍重々々、

廿日、雨降、判官入道沙汰鎮守神樂料足事、六七兩月無沙汰之處、可沙汰進之由、自奉行岩山宿所使者來申、仍遣人貳貫文請取之了、珍重々々、此間吉事相續非一、祝著無極者矣、抑彼二貫文如先日令支配了、

八月一日、天晴、每事祝著珍重々々、同日神樂料足請取之了、如恆例令支配了、

但十疋爲私沙汰、石清水御供料進了、大會談議開始、

六日、○中、同日自京極、當寺八幡宮臨時神樂料足二貫文有其沙汰、明日卯日可遂其節之由、被仰了、即神供神樂料足各五百文下行之了、殘壹貫文止寺家了、

了、悅喜々々、但神供五百文内百文、稱宮仕等酒肴分下行之了、

石清水御供料大會談議時神樂

九月一日、天晴、每事祝著々々、恆例神樂料足請取之、如先日支配了、
 十月一日、每事珍重々々、恆例神樂料足請取之了、
 十一月一日、天晴、每事珍重々々、恆例神樂料足請取之了、
 十二月一日、天晴、每事珍重々々、恆例神樂料足請取之了、

〔香取文書纂〕

大宮司家藏

香取假殿
遷宮用途

假殿御遷宮用途事在別紙條々

- 一 御正體纏料 八丈絹一疋、内院一神主助吉、二神主則時、各請取、
- 一 御座 縹網三帖、御内三所御料、
- 一 幄覆用途 八丈絹八疋二丈、自正神殿、至于アサマ、大禰宜請取、十六
- 一 大幕四帖料 白布十六段、禰宜同請取、大
- 一 細布六丈 内院神主三人捧禱料、
- 一 白布三段 菹道料請取之、神主當日敷之、
- 一 御供料 五石五石當日御供料、御大炊中臣兼日請取之、、
五石後朝御供同、御此神内ニ御酒アリ、ヨイアシタ共、
- 一 三石御燈油料 三貫衣裳料 權禰宜請取之、
- 上紙三帖 御幣料 幣所快正 助請取之、

一 神官祿料

神主八丈絹一疋、秣三十束、大禰宜八丈絹一疋、秣三十束、
 權禰宜八丈絹一疋、秣三十束、物中祝八丈絹一疋、秣三十束、
 御物忌八丈絹一疋、秣三十束、大細工秣三十束、

貞治二年九月廿四日

書生義光 在判

大行事 在判

〔京都帝國大學所藏文書〕

東大寺一書

シ ア ウ サ イ ニ テ ミ コ シ ノ レ ウ

大勸進頼然花押

借請 利錢事

合拾貫文者

右八幡宮神輿造替新足、武家支配未到之間、先爲寺依致其沙汰、所及借物也、
 每月貫別加肆拾文利分、無懈怠可令返辨之、但質物防州正稅物所差置之也、
 明年著岸到來之時、必可致其辨、明年若雖及不慮違亂、以後年正稅可令辨濟
 之、正稅物少分到來之時者、隨借物之多少可配分、不可及相論、又遷替職之習、

東大寺八
幡宮神輿
造替

設十分之一、雖及後代勸進、於此借物者、不可有難澁者也、若又正稅失墜之時、懸供祈、以別足可有其辨之旨、依滿寺評定、借書如件、

貞治貳年^{癸卯}十一月晦日

年預五師宗兼(花押)

沙汰人俊英(花押)

法印權大僧都覺聖(花押)

法眼定堅(花押)

宗賢(花押)

法眼賢量(花押)

賢祐(花押)

權少僧都憲朝(花押)

鎮頓(花押)

權律師圓慶(花押)

智圓(花押)

權律師清圓(花押)

實專大法師(花押)

大法師春實(花押)

大法師信藝(花押)

大法師賢源(花押)

○本文書
塗抹セリ、

^(英卷)此內本貳百七十文出了、^{利分二貫二百七十文、}

以貞治五年新絹且出了、^{丙午}十月廿七日宗兼(花押)

^{板代}且壹貫七百文返進候、油倉方、

貞治五年四月廿八日(花押)

且七百文返進候、油倉方、

貞治四年六月廿八日(花押)

且一貫七百文返進候、油倉方、

貞治四年^{乙巳}七月九日(花押)

^(南英卷)寺方十貫文

治貳年十一月晦日

此內四百四十文出了、以此分借書被出了、

貞治六年五月八日先^(年預)預代宗兼(花押)

此內本壹貫五百文、利分壹貫五百文出了、

貞治六年^{丁未}四月八日先年預代宗兼(花押)

此內本貳貫廿八文、利分貳貫廿八文出了、

貞治五年^{丙午}以新絹代出了、十二月二日年預代宗兼(花押)

此內不貳貫貳百七十文出了、利分二貫二百七十文、

以貞治五年新絹且出了午十月廿七日宗兼花押

且七貫文返進候、油倉方、

貞治四年六月廿八日花押 ○本文、前文書ト同ジキナ以テ、端裏書、裏書ノミヲ載ス、

〔會津舊事雜考〕○下越後 小川庄津川町由來舊記

一腰王權現、貞治二年癸卯、拉木谷地今津也、移玉泉寺祐尊許、本願奧田民部盛隆、青木兵庫通俊也、今古四王と云、何時改哉、不詳、

佛寺、

〔東寺執行日記〕一 正月一日、早旦參御影堂、奉拜大師影像、三十疋持參之、

如舊例、

廿五日夜、盜人令亂入金堂、剝取中尊薄了、言語道斷珍事也、

去夜廿五、盜人令亂入金堂、剝取中尊薄了、言語道斷珍事候、向後又非無畏候、可然之樣可有申御沙汰候哉、恐々謹言、

正月廿六日

定伊

別當大僧都御房

會津腰王
轉現ノ移

定伊東寺
御影堂ニ
參ル

盜東寺金
堂中尊ノ
薄ヲ剝取
ル

宿直ヲ始ム

結番ヲ出
シテ夜廻
ヲ始ム

塔内ノ佛
具等ヲ盜ム

別當返事

廿五日夜、於金堂盜人亂入事承候了、凡言語道斷珍事候、連々如此沙汰出來、殊ニ無勿躰候、公人等定無沙汰之子細候歟、於向後者、無畏怖之樣、可被加評定之由、能々可令披露衆中給候哉、恐々謹言、

正月廿八日

宗助

自廿六日夜、先於講堂、三人預可宿直之由、可被仰之旨、自供僧中被仰、送執行方之間、仰舍之處、以別儀、可領狀申云々、但始終事、堅可申子細云々、仍二ヶ夜廿六日、無相違令宿直訖、於廿八日者、幸爲修正之間、公人等祇候當堂、仍不及被相觸也、

閏正月十六日、自今夜至廿五日夜十ヶ夜、爲寺内在家役可有夜廻之由、被出結番了、自去一日至十日、爲供僧等沙汰、自十一日至十五日、爲歟冬田在家役、自廿六日至卅日、相宛散所法師原了、

三月十四日、今夜盜人偷入塔、佛具已下盜取之了、番衆更不知之、彼佛具ハ四佛御前ニ各一面皆具有之、木佛具ニ指面金也、

遣別當狀案

去夜十四、盜人令亂入塔、御佛具已下悉盜取了、言語道斷珍事候、凡及度々候間、向後又非無怖畏候、可然之樣可令申沙汰給候、恐々謹言、

南朝正平十八年 北朝貞治二年雜載

勾當職事

御影供下
行物ヲ以
テ沙汰ス

三月十五日

權律師定伊

謹上 別當大僧都御房

〔東寺執行日記〕

正月廿八日、勾當職事召仕青侍上總坊快祐補彼職了、於參堂新足四貫三百文得分物出來之時、漸々可有沙汰之由令申了、四貫三百文内一貫文別當方、一貫文寺家分、二貫三百文中綱職掌中分也、其内於別當方者、以當年御影供下行物、先可致沙汰之由領狀、至寺家方公人等者、後年漸々可補入之由請申訖、

同日修正、每年如恆例矣、

五月一日、天晴、略○中

國康當職事先度重々被經沙汰、被下安堵御教書候之處、衆中尙不被敍用候之間、不勤仕其役之由歎申候、無相違之樣可有執沙汰候哉、恐々謹言、

四月廿八日

宗助

執行律師御房

今日二日到來、

六月二日、鳳凰寺筭代貳百五十文沙汰之、祝著々々、

鳳凰寺筭

定祐法橋
忌ノ十三回

潤惠ノ三
十五日佛
事

安居終ル
金堂藥師
佛像薄塗
ノ繪師ヲ
采女正巨
勢行忠ニ
沙汰ス

東寺繪所
職

廿九日、雨降、今日定祐法橋十三廻、仍定慶隨分致佛事訖、當寺々僧十人許召徒之、勤行理趣三昧訖、予致如形訪訖、
八月廿八日、天晴、今日師匠法印、潤惠、三十五日佛事行之、當寺僧衆二十人計召請之、

〔東寺執行日記〕

一 七月十四日、略○中同日供花結願、又安居終、如恆例矣、

十七日、金堂藥師薄塗之繪師采女正行忠沙汰也、於此繪師者、當寺繪所有久子息也、仍相續可補彼職之處、近年依無寺家下行物等、強不致所望者也、而間以未補之身隨役之條、不可然、此上者、恐賜符任歟、不然者、不可隨役、可被仰別人歟之由、懸勸進方、加問答之處、仰之趣有其謂、恐可被下符任之由、行忠令申了、

十八日、圓守初參、

十九日、

東寺政所下

繪所職事

采女正巨勢行忠

南朝正平十八年 北朝貞治二年雜載

右以人補彼職、恆例臨時寺役、無懈怠、可致其沙汰者、寺宜承知、故以下、

貞治二年七月十九日

目代 在判

修理別當權律師 在判

於補任料足者、員數記錄未求得、暫以餘准據推之、三貫五百文、歟於五百者、目代分悉沙汰之、至三百文者、寺家分此內一貫五百文沙汰之、半分定於半分者、以內緣難申之間、以別儀免之了、

八月五日、北向緣新張之了、料足一貫五六百文入了、番匠四人、

六日、臺所以下板敷加修理訖、料足五百文計入了、番匠二人、兩日新足二貫百

文、米二斗也、番匠兩日分六人也、

十五日、天晴、恆例并久世方放生會如恆例、但久世方法會已下、依神輿御座、貴

賤群集非無其憚、仍酉終戌始程行始之了、

卅日、同、大會談義結願、同日愛幢丸初參增長院法印 清我坊了、

〔東寺百合文書〕

○山一之三十二

東寺北面御舍利田事

合壹段者、在佐井佐里廿五坪、字汲儀、號西山田、

新ニ北向
ノ縁ヲ張
ル所板敷
ニ修理ヲ
加フ

久世方放
生會

大會談義

東寺北面
舍利田

右件田者、當寺御舍利新田無其子細上者、號常利寺田、向後不可異亂候、仍爲後日狀如件、

貞治貳年潤正月八日

平七入道淨源(花押)

〔東寺百合文書〕

○山十之十六上

うけ申 用途の事

合壹貫文者、

右御てらへほひり候て、申^(ま)それまいらせ候、御よろこひ用途の中一くわんり、京とのひけいかあひす候、國より八月中よささ^(さ)をい^(い)し^(し)ら^(ら)せ候へく候、もし申あけ候あからふさ^(さ)に候り、とやうてんをめしあけられぬいらさ候へく候、よてうけふさく^(く)ふんのことし、

貞治二年二月廿一日

妙蓮(まるとん)

〔東寺百合文書〕

○山三十八之四十七

貞治二年

卯

略

○上

一清水坂無量壽院申拜師庄内大用事、二月廿日、量心院御起請符之地爲一代之學衆、令自專避出之條、不可然之上、入延慶正應□之上者、雖爲難治、彼口

山城拜師
庄内大用
事

京都ノ祕
計

入人武劬奉行中澤掃部大夫寺家不快之條、又還背與隆歟、所詮載筆、出避狀之條、可有斟酌歟、御無沙汰之儀、可指置之旨評議了、略中

八祖論義

水田定伊律師狀 一八祖論義水田事

號太郎丸、此內榮濟執行之時者、康安元年十月廿一日、八祖論義、水田壹段、小、本家別當方、

捧物寄進御影堂之由承了、可存其旨之由、可有御披露學衆中也、恐々謹言、

十月廿五日

權律師定伊

謹上 大貳僧都御房

〔東寺百合文書〕

大寶莊殿院評定引付年貞治二年

四月廿五日

定潤 深源 眞聖 仲我 行賀

亮忠 朝源 定伊 教深 賢寶

良寶 實成 禪聖 義寶

已上十六人(四力)

一籠衆所望之間、披露畢、

十一月十五日

定潤 深源 興雅 亮忠 朝惠 泉嚴

寶莊殿院評定

叡山横川 良源ノ佛 事源ノ法 同廟ノ講 華八講 西圓堂御 行

聖靈會

一籠衆相節下行事、勘日數可遣之、若令過上者、可爲公文所辨、若爲奉行、子細同前、

一籠衆部屋疊事、立配分以前證可致其沙汰云々、

一籠衆仁牀未補分、公方可預置之、略下

〔門葉記〕

七十山城 門主行狀三 入道一品尊道親王 龍院後青 第百卅四代座

主、貞治二年正月三日、横川元三勤之、同十月十八日、於横川(真德)御廟修法花八講、

〔斑鳩嘉元記〕

和大 一貞治二年 癸卯 正月八日、西圓堂御行初夜導師蓮觀

房相當之間、勤仕既畢、後此人者、母儀他界重服之人也、爭可有此役勤仕哉、

トテ、次下延觀房初夜導師ヲ重テ被勤仕直畢、先代未聞之珍事也云々、

一聖靈會行事裝束事

於此種子物、依無綱奉加裝束出來之後、行事此裝束不被當、而近年此種

子物ニ有奉加之間、延文六年 辛丑 歲聖靈會時、始テ行支裝束惣寺ヨリ被

配之内一具ハ袍裳下行一具ハ損新ヲ惣寺ヨリ沙汰シテ、行事私ノ沙汰也、彼損新五百文、參百文之異說在之、仍其時梵音衆沙汰人善宗房ニ慶祐相尋之處、法眼損新五百文ト有ル分明之日記ヲ被出タル間、五百文之條令治定畢、

一貞治二年癸卯三月十四日、矢日寺前九一切經供養在之、天王寺童舞也、

矢田寺一
切經供養
天王寺童
舞

一御舍利殿梵網經新箱出來事

聖德太子
御眞筆梵
網經

太子御眞筆梵網經上下、二卷、外題御手皮、爲往來拜見被安置、而每度依被披卷、令破損之間、箱被入定之後、御經ニ手ヲ不懸之樣、滿寺有評定、今箱ヲ始テ所造立也、新足滿寺

貞治二年癸卯三月廿二日出來、御舍利講次、諸人始テ拜見殊勝々々云々、

地藏供養
法一座

一當寺金堂後戶三殊勝地藏御前、每月廿四日地藏供養法一座事、古日記求見之處、龍田宮大般若經六口在之、此新田所當等配分下行、

配テ記金堂地藏供養法一口ヲ加テ合七口、并地藏御佛供下斗一升配金堂預方下行、壬月歲ハ其分加每年之散用狀分明也、仍此供養法ノ供田トテ、別ニ多年之沙汰如是、此供施主ハ信算春蓮房也、其子慶玄法印、其子慶祐僧

都、此時代違亂都無之、其子慶覺此時代退轉、

一貞治二年癸卯禪宗武藏殿坊強盜入、落書在之、盜人不顯、解文在之、

武藏殿坊
強盜入
聖靈院燈
油ノ事

一聖靈院燈油事、十二月晦日夜分見宗房、貞治二年癸卯始之、

一三經院諸忌日出仕衣、袈略樣事、不論講衆學道、於諸忌日出仕者、爲重衣自

三經院諸
忌日出仕
衣及袈略
ノ事

五帖袈裘之條、往古以來之法則也、而六月十三日、學頭辨玄僧都之忌日也、今日延引、同十五日始行在之、此忌日ヨリ單衣墨染絹袈裘始ル、三經院出

仕之陵遲此ヨリ始ル、無興隆之至極也、

一貞治二年癸卯九月九日、國符後ノ法師原中、牛彌太郎ト云物ヲ、林覺ト云

乞食口論シテ、當座令致害畢、コウノウシロハ爲寺領之間、尤寺ヨリ可有

罪科之處、彼屋敷ハ龍田順了房地主ノ由被申、而險封檢カ下向之、寺ヨリ雖種々

問答、都不被敍用、仍十二日夕寺領既被押領之上者、於明日十三龍田會者、

請僧不可有供奉之由申切畢、雖然龍田殿可隨寺命之由、十三日朝有領狀、

則罪科之儀被止、險封解給了、仍爲公文等之沙汰、犯人家コホテ出テ令

燒失畢、如寺門所存、令落居之間、龍田會如本式被勤行畢、

龍田會

長谷寺堂
供養
奈良舞人

金剛院長
日護摩

法隆寺大
湯屋

行信忌日
僧供注

一貞治二年 癸卯 十月廿九日、長谷寺堂供養、定日ハ廿八日雖令治定、依終日
大雨次日 廿九 供養畢、奈良舞人也、

講師大乘院僧正、同夜延年風流等 在之、長谷法師之沙汰如法結構云々、
一貞治二年 癸卯 十二月八日、御舍利講以後、金剛院長日護摩始行 在之、盡未

來際不可有退轉云々、施主阿闍梨實乘、圓信房 得業、供僧慶懷、辨英房 順學 得業、
印實、圓順房 淨慶房 善順房 實尊房 永信房、已上六人、

一當寺大湯屋湯船新斬樟木、慈恩寺山ニテ買得、代六貫文、湯頭ヲコ

〔法隆寺寺要日記〕

四 十月廿二日唯識講新田蓮池屋敷、十念

行信忌日僧供注文 依于慮見及書移之、十月二日忌日也、

癸未歲南ノハシ舜聖房屋敷頭、堯坊、學、同甲申歲同南ノハシ慶縁之頭、今ハ乘辨

此兩年ハ此屋ニツ、ケテ當ル、此坊ニ頭ヲスル時ハ、ハスノ高盛ハカリ、ナ
居汁也、汁ニタウフヲ上ニ五切ハカリ、フクイモタ、ミヲモユニ白米長合ノ一

升粉ニツク湯七八升歟入、高ツキ一、懸公 三前、西里三、借、但居汁ノ汁ヲモシルト
云、マイラスヘキヲ、今年ハ子細ヲ不知シテ、マイラセスシテヤミス、大方御
菜ハ高盛ハス、牛房、セムヘイ、イツツケ、已上四坏下盛、牛房、セムヘイ、イモサ

シ五クシニ、スカコサシミケ、ケ、ル、ル、歟、惣シテ七種也、出米ハ上日南ノハシニ
五升、中ニ六升、北ノハシニ三升、カシキ頭慶縁一升加、以上一斗五升ヲ飯三

斗三升ニハカリ置テ、一坏別三升配、十一坏ニ盛ナリ、
今ハスシノ坊一中坊ノ分ハ、セムヘイ大小五坏、イツツケ一坏、サシモノ一坏、上上四坏也、

一北ノハシニハ牛房大小也、二坏、饗御菜ノタケハ奥ニ注ス、頭當年南端癸未、
今ハスシノ坊甲申、乙酉、中坊丙戌、北ノ端、今ハ舜性房千午太郎、甲申之頭慶縁、今ハ乘辨頭ノ時ハ出米ノ

外一升ヲ加、ヲモユニ一升、長合、頭ノ不當年ハハスイシヲ高盛ニ二坏、マ
メ一、頭ノ當ル白米六升二坏ノ内一坏盛ナリ、汁ナ上ニタウフ五切歟、タ
今ハスシノ坊、ミ次中坊渡ル、中之内上壇ニ當、此年ハ南ニイツツケヲ高盛ニスヘシ、

ヒキ盛ハ無、中坊ノ時ハ、汁トタ、ミヲモユトハカリ、次北ノ端へ渡ルヘ
シ、此年ハ汁トタ、ミトヲモユトハカリ、此年頭之時ハ、南ニハストイモ

トノ高盛、マメ一種、中坊ニハイツツケスカコサシ、上壇ノ分也、又下ノ壇
ノ分ニ、セムヘイマメ、今ハスシノ坊、本ノミ、

次ニ又中坊へ頭當下壇ノ分ニ、此時ハ汁トタ、ミトヲモユトナリ、此年
ハ南ニセムヘイノ高盛ハカリ、

一セムヘイノコニハ、黒米四升、十合、一イツツケノコニハ、四升、十合、又ヌ
カコ三合入、

一出米事、南ニハ頭ノ不當年ハ白五升、中坊ニハ三升配二度、北ノ坊ニハ三
升、カシキ、頭ノ時ハイツレモ一升配ヲ加也、饗ハ十一坏、出米ハ一斗四升、
頭之一升加レハ一斗五升也、北ノハシハ、余ノ頭ノ時ハ、牛房ノ高盛、我頭
ノ時ハ、牛房ハ無之、子歲丑歲兩年ハ某始、此屋敷ニカシキ頭ナリ、飯析白
六升之内一升ハ加ナリ、カユノ米白一升、長合、水七八升入歟、高盛ハイシ
クルミノマメ、五合、頭アタラサル時ハ、ハスイシ、ハスハ一尺ツ、ノヨフ
タヨツ、キヲ卅五子ニテハアルヘキ歟、キタイタ五升五合ニテハアル
ヘキナリ、クルミノマメ六合、已上クルミノマメ一升一合、又三合コサノ
マメ、次寅歲スシノ坊上壇頭、此時ハ是ニハイツツケイモマメ、次卯歲北
ノハシ、此時ハヘイ、イモ、マメ、

文和四年^乙中坊頭勤仕畢、此頭時ハ北ノハシニハ牛房大小、中坊下分ニ
ハセムヘイノタカモリ一種、サシモノ、南ニハイツツケイモマメナリ、
^(イ)御菜ノタケ、^(イ)禮堂ノ本ヲウツス^(イ)

修南院敷地之内西半分ヲ上壇ト云、東半分ヲ下壇ト云、スシノ坊敷地ノ内
西半分ヲ上壇ト云、東半分ヲ下壇ト云、スシミチノ北ノツラ一所合五ヶ所
廻テ饗ノ頭ソスル也、

書本云、延文六年^{辛丑}三月十八日、修南院本書移畢、云々、慶祐、云々、

于時貞治二年^{癸卯}潤正月六日

〔三寶院文書〕

○^{明治}四十四年探訪

貞治二年正月十五日

三寶院佛
具目錄

- 五鈷金剛杵一口 五古鈴一口
- 〔^三鈷^{跡カ}〕金剛杵一口 獨古杵一口
- 輪 一口 羯磨 四口
- 概 四枚 金剛盤一口
- 商佉 一口 金銅^{〔^三〕}四口 ^(口假カ)一 紛失云々、
- 五色糸 二帖^(條カ) 茶碗壺一口 紛失云々、
- 〔^三〕面 二帖 水精念珠一連
- 金銅塔 一基 佛舍利二壺 ^(壺)紛失云々、

南朝正平十八年 北朝貞治二年雜載

以前目錄如件、

大阿闍梨法務僧正法印大和尚位光濟

〔雲邊寺文書〕波○阿

法華經可有信讀之由、自大將御書如是候、仍十部令進候、可有支配候、讀誦候者、後正月中可承補陀寺候也、恐々謹言、

貞治一正月廿四日

日環(花押)

雲邊寺衆徒御中

〔神護寺交衆任日次第〕城○山 貞治二年 癸卯

神護寺交衆任日次第
承經陀羅尼初參
守紹初參
三昧初參

大音院 應永十九年四月廿三日酉刻六十六才入滅、
定惠院 承經 閏正月五日陀羅尼初參、
守紹 二月六月廿日交衆上表了、寺役初參評(定願カ)
守紹 二月十三日理趣三昧初參也、

〔神護寺交衆任日次第〕城○山 康安二年 寅

迎 接院 尊融 貞治二壬正月七日補之、
圓 悟坊 淳耀 貞治二卯六月十二日補之、

〔神護寺交衆任日次第〕城○山 延文四年 己亥

榮 濟 貞治二年卯六月廿八日評定、
交衆上表了、

交衆上表

阿波雲邊寺衆徒法華經讀誦

師茂北隣庵ノ僧ニ
地所望ノ土
渡ヲ去リ

北隣庵柱立

仁和寺傳法灌頂

延文五年 庚子

通經 貞治二卯十二月廿六日評定、
交衆上表了、

〔師守記〕三十一 帝國圖書館本 閏正月八日、己卯、天晴、略下

今朝北隣庵、南地南北一丈、東西四丈六尺所望之間、被去遣、伴地先人□□
□被請籠式□了、而難去、此間所望之間、被許容了、

十六日、丁亥、天陰、略下

今日北隣庵柱立也、面三間□五間□也、置屋也、

〔師守記〕十四 押小路本 閏正月廿一日、壬辰、天晴、略中 今日北地自庵又東一

見所望之間、許容了、都合東西四丈七尺也、

〔仁和寺記錄〕二十三 傳法灌頂部類記乙

受者并道場色衆口數等事

貞治二壬正 同院 (中務王院) 大同上、年六十七、 道秀 廿二、

貞治二廿三 同院 受大、色六、口、 清實 廿六、略中

奉行 色六、口、

同二後正 賴兼 略下

南朝正平十八年 北朝貞治二年雜載

〔仁和寺記錄〕

傳法灌頂部類記丁

教授參入

貞治二潤正 僧正道淵 色衆外

同年廿三 法印權大僧都禪嚴

同年十七 僧正道淵 色衆外○中

振鈴以後護摩師起座行護摩

貞治二壬正 法印權大僧都顯仲

同二廿三 法印權大僧都顯仲

同年十七 法印權大僧都信海○中

小選神供師降庭致作法

貞治二壬正 權少僧都信曉

同年廿三 權少僧都信曉

同年 權少僧都道秀○中

一佛供燈油等事

佛供事

東大寺二月堂上七日參籠衆交名

貞治二年七月廿五日

佛供燈油料米貞治二年七月廿五日入壇之時得之 代二石三升 貳三百卅一文 略○中

一清實 加行日數并賜支度御次事

貞治二年四月廿三日壬戌 始加行 六月廿九日給支度

七月十一日入壇○十日許敷

同年八月四日房 庚子 始加行 十月十五日給支度

同十七日入壇○十日許敷

同年二月十一日入壇 同十三日給支度

〔二月堂修中練行衆日記〕

貞治二年癸卯 二月堂參籠衆交名事 上七日

清圓得業和上 圓兼 賴賢

聖成堂司 顯濟得業大導師 俊兼

俊英呪師 善祐 快尋

貞譽 專曉 行兼

曉圓 慶海神名帳 三ヶ夜 信玄神名帳 四ヶ夜

南朝正平十八年 北朝貞治二年雜載

寬專 善兼 顯圓 賢寶
辨玄 覺舜 廿一、 處世界

以上廿一人

被講無量義經、講師顯濟、問者快尋、

但前問役者、内陳令勸仕事

同下七日練行衆交名事

清圓得業和上 圓兼 賴賢

聖成堂司 顯濟得業大導師 俊兼

俊英呪師 善祐 快尋

貞譽 專曉 行兼

曉圓 慶海神名帳 四ヶ夜 信玄神名帳 三ヶ夜

寬專 善兼 顯圓

辨玄 覺舜新入 賢寶處世界

以上廿一人

〔高野山文書〕○又續寶簡集九十四 高野山檢校帳

定實ノ傳
法灌頂

勝尾寺四
至境證文
紛失

遠江大福
寺三月會
同五月會

淨土寺ニ
テ甲フベニ
キ亡者ノ
名

延文元

第百八代檢校、々々定實、琳勝房、功德院、同十八年卯癸二廿九入、實融房、禪良

院聚代重惠、長圓房、西院、地藏院、

〔勝尾寺文書〕○攝津

ひんくしれ御まき内畠小は本さう文お、さうしあいて候、若此さうもんあ
りとしてさおいさす物候、ぬす人のさいくわにおこされ候へく候、
四至 限東道、限南上島サカイ、限北コセ、新島所、な角、島

貞治二年卯癸三月四日 せんし(花押)

〔大福寺文書〕○六遠江瑠璃山年録殘編下 □□五月會頭役事

貞治二年卯癸來頭三月會、觀空房、五月會、乘圓、二度、

出家饗錢壹貫文專松丸、壹貫文益房丸、

一年行事 松元坊 實相房

〔淨土寺文書〕○三備後

可訪亡者等名字等事

善覺 信法 定性 智阿 性阿 常善 圓阿 本勝 順阿 本妙
性戒 覺圓 明善 教阿 善有 貞範 善信 理阿 蓮阿 了舜
覺藏 善妙 宣阿 光善 戒善

南朝正平十八年 北朝貞治二年雜載

現在逆善ノ名字

良性愛染明王ヲ佛ニ後淨土ス

圓覺寺文書目錄

本目錄内

法如 彌阿 觀智 願阿 圓殊 笠雲 憲守 真如 觀阿 定阿
覺吽 圓空 觀阿 定阿 念阿 古阿 伊阿 妙阿

現在逆善名字等事

本願主沙彌良性 光蓮 覺性 智阿 直阿 古阿 戒阿 勝阿
式佛 利阿 悲阿 慈阿 妙意 惠阿 法阿 得阿 殊阿 照阿
朝阿 宣阿 入帳畢

右志者、毎年御勤行之光明眞言之爲結緣、彼愛染明王本尊尾道浦淨土寺、所奉寄附也、但照嚴上人御檀所可有御安置候、仍寄進之狀如件、

貞治貳卯月八日

沙彌良性(花押)

〔圓覺寺文書〕

〇四相模

圓覺寺文書目錄

富田庄

本目錄内

一通 法光寺殿御寄進狀
二通 將軍家御下文 被載龜山郷一紙内

〇弘安六年七月十日
〇三月廿五日

内追加目錄

一通 年貢運上過書

宣時奥州永廻寺

〇同一年九月廿一日

一通 得真村御寄進狀 入道殿御事、師時相州、

成願寺殿、御時相州、

〇正安二年七月廿七日

一通 成願寺御下知 御時相州、

成願寺殿、御時相州、

〇正應二年四月廿四日

一卷 二宮田寄進狀同相傳具書等

成願寺殿、御時相州、

〇正和二年一月二日

一通 領家範考郷狀

成願寺殿、御時相州、

〇嘉曆二年三月三日

一通 同雜掌有宗請取契狀

成願寺殿、御時相州、

〇嘉曆二年八月八日

一卷 同和與具書案

成願寺殿、御時相州、

〇建武五年七月十二日

二通 成願寺御牒 京都雜掌方任之

成願寺殿、御時相州、

〇同年十一月十八日

一通 同國宣

成願寺殿、御時相州、

〇同年十一月廿二日

一通 領家年貢御教書

成願寺殿、御時相州、

〇建武五年七月十二日

追加目錄内

成願寺殿、御時相州、

〇元弘三年八月十六日

一通 富田庄被召返三位局繪旨

成願寺殿、御時相州、

〇元弘三年八月十六日

一結 役夫工米代々請取以下具書

成願寺殿、御時相州、

〇曆應十四年七月四日

一通 同權禰宜狀

成願寺殿、御時相州、

〇曆應十四年七月四日

一結 有御厨堺相論具書

成願寺殿、御時相州、

〇曆應十四年七月四日

南朝正平十八年 北朝貞治二年雜載

一枚 有 ○ 同繪圖

五通 ○ 萱野堺御使荒尾民部權少輔上條左衛門督注進

三通 同繪圖

一通 大嘗會米大藏權大輔狀

一通 ○ 下六ヶ里圖

一卷 ○ 下里領家返抄

龜山郷

一通 御寄進狀 本目錄内

一通 實檢帳

一通 同御奉書 細河阿波守

一通 萱菊夫用途百姓請文

一通 佐々木判官入道狀

一通 時宗申狀 ○ 弘安六年七月日

一卷 ○ 四通制札

篠木莊地
見目錄

篠木庄 一卷地見目錄

○ 明德三年十月日
○ 秋山入道誌之

○ 弘安六年

○ 文保二年

○ 建武四年

○ 康永四年

○ 貞和五年

本目錄内

本目錄内

一通 御寄進狀

一通 同將軍家御下文

一通 寂勝蘭寺殿御書

一通 領家年貢和與狀

一通 同安堵院宣

一通 同和與關東御下知

三通 同領家年貢請取狀

一通 同年貢被向修造常住御奉書

一通 同年貢被向寺用不足御下知

追加目錄内

一通 立券院廳御牒案

一通 同立券國司廳宣案

一通 領家年貢相傳狀等案

一結 領家方和與院宣令旨等

○ 正應六年

○ 永仁三年

○ 同日

○ 永仁三年

○ 同日

○ 同三年

○ 永仁三年

○ 七月五日

○ 同四年

○ 七月三日

○ 天養元年

○ 同年十二月十五日

○ 元弘三年十一月十九日

追加目錄内

- 四通 野口石丸兩村國衙濫妨廣義門院院宣令旨 ○建武元年 ○六月卅日、
- 四通 ○寂初和談目代施行一通請取二通并請文案 ○建武二年壬十月廿六日、
- 一通 白山大山寺御牒 ○曆應元年十月廿五日、
- 一通 國衙雜掌幸賢和與狀 ○同年十月廿六日、
- 一通 同和與國宣資明、野權大納言 ○同十一月廿八日、
- 一通 同別當殿御教書在具書、 ○同十二月三日、
- 一通 同院宣 同日、
- 一通 同西蘭寺御教書 ○同二年二月七日、
- 一通 同武家御下知 ○同二年二月七日、
- 新目錄內
- 一通 玉野鄉院宣 ○曆應二年十一月十六日、
- 一通 ○雜掌契智申狀案 ○曆應二年十二月十四日、
- 一通 高越後守請文 ○同年十二月七日、
- 一通 同八郎師貞請文 ○同年十一月六日、
- 一通 守護代山崎大進房請文 ○同年十一月六日、

新目錄內

寺領惣文書
本目錄內

- 一通 役夫工米侍從中納言消息 ○曆應四年四月廿三日、
- 一通 同院宣 ○同年後四月四日、
- 一通 御即位祈時可止大使譴責御教書 ○延文三年正月廿六日、
- 三通 ○大草郷給主往阿後家申三分一定損申狀并 ○文和四年十月五日、
- 百姓連署請狀 ○正和三年後二月九日、
- 一通 春日部百姓等四分一定損請狀
- 一卷 大縣宮御教書并同具書
- 一卷 役夫工米具書并御即位料
- 寺領惣文書
- 本目錄內
- 一通 官符宣 ○延慶元年十二月廿二日、
- 一通 院宣 ○同年十二月廿二日、
- 一通 西蘭寺殿御書 ○同廿三日、
- 以上三通入綿袋（錦之下同シ）、惣安堵二通入綿袋、
- 一通 法光寺殿御自筆御書